

雨の陽とひだまりの月

長岡来望

「美月（ルビ・みづき）、起きろ」

体を大きく揺らされ、私の名前を呼ぶ声が聞こえる。

枕元に置いたスマホからは大きなアラームが流れていて、半分寝た状態でそのうるさいアラームを止めてまたすぐ寝始めた。

「ほら起きろって」

そう言っただけの頬にキスしたり鼻を食ってきたりして起こそうとしてくる。

「ん〜……、おはよう〜……」

時刻は六時半。

私は毎朝この時間に兄である流星（ルビ・りゅうせい）によって起こされる。

自分でアラームをかけてはいるものの、その音に気付くことなく寝続けるので、お兄ちゃんが毎朝起こしてくれる日々が続いていた。

ただその起こし方が少し変わっていて、お兄ちゃんは俗にいうシスコン。

お兄ちゃんは顔が良くて勉強も運動もできて女の子からすごくモテるのに、なぜか女の子に興味を示さないようで、以前友達にこの話をしたところ、「流星先輩が女の子に興味ないのってめちゃくちゃ美月のこと大好きだからじゃん」とすごい顔で言われた。

シスコンというのが意外過ぎて想像つかないみたいだ。

ただこういった行動は昔からで、私にとっては普通になっているので嫌だとか変だとかそういう感情はない。

「早く起きて降りてこいよ」

そう言っただけお兄ちゃんは私の部屋から出て行った。

「ん〜……」

グーッと大きく伸びながら欠伸をして横になりながらのんびりするが、そこから起き上がるか二度寝に入るかの戦いが始まる。

これまでの対戦結果は7割二度寝が勝っている。

もし二度寝したとしても今は起こしてくれる人がいるが、これが一人暮らしなら私は寝坊多発で単位が足りなくなるだろう。

なんて考えていたらまた眠気が襲ってきてトロロンとなり、二度寝モードに入りかけた時だった。

「ほら」

「いたっ……」

さっき部屋から出て行ったと思ったお兄ちゃんが戻ってきて、私のおでこにデコピンをくらわせてきた。

その痛みで一気に目が覚め、私はちゃんと起き上がる。

「もう少しで朝ごはんできるからな」

そう言って今度こそ出て行ったお兄ちゃんは階段を降りていき、私は昨日準備していた服に着替えを始めた。

前日に気温と天気を確認して、それに合ったおしゃれな服装とアクセサリを身に付けて毎日ファッションを楽しんでいる。

今日は快晴で過ごしやすい気温なので、ひざ下丈の白シャツワンピースにベージュの薄いニットベストを着た。

メイクと髪型はご飯を食べてからするので、着替えを終えて一階のリビングへと向かう。既にお父さんとお兄ちゃんは四人掛けのダイニングテーブルに座っていて、お母さんがテーブルに朝食を並べているところだった。

「おはよ〜」

「おはよう、美月」

「今日は天気が良くて良かったなあ」

お父さんがテレビで流れている天気予報を見ながら呟いた。

今日は雲一つない快晴で、降水確率もゼロパーセント。

私の髪の毛はものすごくくせ毛で、雨の日はいりまくりで爆発するためまとめることが多いが、今日のような日は気にすることなく好きな髪型が楽しめるので晴れが好きた。

「ほら、美月も座って！」

お母さんに促されて席に座り、美味しそうな朝ごはんをみんなで食べ始めた。

なんとなく決まった席に座って朝ごはんを食べながら何気ない会話を楽しむ日常の幸せ。朝食は何かない限り四人で揃って食べていて、家族との時間を大事にしている。

というのも私の両親は以前仲たがいで別居したことがあり、私はお母さんとアパートで七年間暮らし、お兄ちゃんはお父さんとこの家で暮らした。

当時私は二歳、お兄ちゃんは七歳だったので、私は記憶がだいぶ薄れているところがあるが、お母さんが大変そうにしていたのはよく覚えていて、仕事に幼い私の世話にと過労が溜まって倒れたのを機にまた四人で暮らすようになったらしい。

元々の原因はお父さんが家事育児をしないことで喧嘩し、別居したことでお父さんも家事育児の大変さを知ったことだそうで、今ではお父さんは積極的に家事を手伝うようになり、二人はすっかり仲良しだ。

朝ごはんを食べ終わり、家を出る時間になったお父さんは、お母さんが作ったお弁当を持って会社へと向かった。

次にお兄ちゃんが家を出る。

お兄ちゃんはデザイン会社で働いていて、二年目ながら重要なプロジェクトに参加しているらしく、優秀な社員として活躍しているみたいだ。

私の授業が一限からある日はお兄ちゃんが出てから二十分後くらいにできるが、今日は二限から四限までと時間に余裕があるので、ゆっくり準備を進める。

メイクと髪をセットするために部屋に戻り、化粧品が詰まったポーチを持ってローテーブルの前に座った。

今までいろんなメイクを勉強したことで毎日メイクをすることが楽しくなり、ぼつちりメイクをしていくのが当たり前。

胸元まである栗色の髪はコテで緩く巻いてハーフアップにしてバレツタでとめ、穴の開いていない耳には小さいイヤリングを、指には控えめな指輪を左に二つ右に一つはめた。

そして白い肌を守るために日焼け止めは毎日欠かさず塗る。

そうこうしているうちに私も家を出る時間になり、お母さんが作ったお弁当をリュックに入れて家を出た。

私は子供が大好きで将来保育士になりたいと思い、保育のことが学べる短期女子大学に進学した。

大学は家から電車で通える距離にあり、家族みんなで仲良く暮らしながら大学生活を送ることができている。

大学行って勉強し、その帰りにバイトに行つて、帰ってきてからは学校から出された課題をしっかりと進めて。

そんな生活が始まって約二か月が経った。

思っていた以上に課題をこなすのは大変だが、授業にはしっかりとついていけているし、この生活にもだいぶ慣れた。

「美月おはよう〜!」

大学につくと仲のいい友達の声が掛けてくれて一緒に席に座り、雑談をしているとチャイムが鳴って先生が入ってくる。

大きな教室には席を少しずつ開けて人が座っており、私たちがいつも座るのは廊下側の真ん中辺り。

小学生から高校生までは窓側が人気だったが、今では日焼けをしたくないという理由で廊下側に座る人が多い。

一年生のうちは座学を中心に学び、基礎的な知識を身に付けていく。

最初専門学校に行くか大学に行くか悩んだが、『専門学校は卒業してから即戦力になるような現在の保育を学び、大学はこれからの未来を考えたことを学ぶ』という専門学校と大学の違いを聞いて私は大学に行くことを決めた。

今後より良い環境で子供達がのびのびと育つように、私たちが未来をちゃんと考えて作り上げていきたい。

いつも集中し続けて授業を受けているので、時間があつという間に過ぎていくが、友達は寝たり喋ったりして長く感じているみたいだ。

以前『先生の声が子守唄』なんて言っていたこともあった。

チャイムが鳴って二限が終わり、みんなでお昼ご飯を食べるために学食へ向かう。

私はほぼ毎日お母さんが作ったお弁当だが、友達は一人暮らししている人が多いので、学食で食べる人がほとんどだ。

ほぼ全ての学生がここに集まるので、お昼の時間はいつもガヤガヤと楽しそうに賑わっている。

一時間ほどのお昼休みを挟んで残りの二コマもしっかり集中して受け、今日はバイトがあるため友達と別れて外に出ると、晴天だった空には雲が出始めていて、降水確率ゼロパーセントを裏切るかのように雨が降りそうな空模様だった。

多くの人が街に出歩いていて、これからどこへ行くのか颯爽と歩みを進めている。

街の中心から少し離れたこの場所でも建物の多さや人の数はまあまあいて、シヨッピンモールやゲームセンター、いろんな飲食店が揃っているの、遊ぶにはちょうどいい。

そんな街を歩いてバイト先に向かってしていると、ポツポツと雨が降り始め、最初は気にしていなかったがすぐに強い雨に変わり、急いでリュックから折り畳み傘を取り出してさした。

先ほどまで人の話す声や足音などで賑わっていたこの街が、一瞬にしてザーという強い雨音にかき消され、まるで別世界に生まれ変わったようだ。

街には今日雨が降ると思っていなかった人が沢山いて、カバンを頭に乘せて走ったり屋根のある場所で雨宿りしていたりしている。

そんな雑踏に飲み込まれるかのように、たくさんの足の隙間から声を出さずに泣いている小さな男の姿が見え、私はその子がいる屋根の下へ入って声をかけた。

「僕、一人ですごしたの？ お母さんとはぐれちゃった？」

男の子の目線にしゃがんで優しく尋ねると、一生懸命涙を手で拭いながら頷いてくれた。「そっかそっか。じゃあお母さんが来るまでお姉ちゃんが一緒に待っててあげるから大丈夫だよ」

私は男の子の背中を摩りながらそっと寄り添い、寂しい気持ちや不安な気持ちが少しでも軽減されるようにもう片方の手で男の子の手を繋いだ。

小さくて暖かい手に胸がギュツとなり、不思議と守りたいという思いが込み上げる。

きつとこれが母性というものなんだろうな。

「名前はなんていうの？」

「ひぐちたいが……」

「たいがくん、かっこいい名前だね！ 何歳か言えるかな？」

「五歳」

繋いでいない方の手をパーにしなから教えてくれた。

五歳ということは年長さんくらいかな……？

「お姉さんと一緒にお歌歌おうか！」

小さい子供向けの童謡と一緒に歌い、たいがくんが少しでも楽しい時間を過ごしてお母さんと会えるように努めた。

大きな雨の音が周りの音を遮断して小さな世界に二人だけいるような気持ちになるが、逆

にそれが歌いやすい環境を作り出している。

一緒に歌い始めてたいがくんが笑顔になってきた頃、遠くから女性が傘をささずじぶ濡れの状態で走ってくるのが見えた。

「たいが……！」

その女性はたいがくんの名前を呼びながらその小さい体をぎゅっと抱きしめた。

「お母さん……！」

その女性はたいがくんのお母さんで、安心したたいがくんはお母さんに抱きしめられながら泣いていた。

「ここで待っててねって言ったのになんで動いちゃったの……！」

「だってお母さんが戻ってこないんだもん！」

たいがくんは泣きながら必死に自分の気持ちを伝え、お母さんはそんなたいがくんを優しく撫でながら泣きそうな表情でたいがくんの話を聞き、今度は立ち上がって私の方を見た。

「うちの子がお世話になりました」

頭を下げるお母さんに私はあわあわしながら頭を上げてくださいと言い、お母さんの目を見てたいがくんについて話した。

「たいがくんとつてもいい子でお母さんのこと待ってましたよ！ とても不安だったと思うんですけど、ちゃんと自分の名前も歳も言えて……。たいがくん、お母さんに会えて良かったね！」

「うん！ お姉ちゃんありがとう！」

たいがくんの肩に優しく手を置き、「雨が弱くなるまでもう少しここにいよっか」とお母さんが言う。

「どうやら傘を持っておらず、雨が落ち着くまでここで雨宿りをしていくようだった。」

「あの、もしよかったらこの傘使ってください……！」

「え、でもあなたは……？」

「もう一本折り畳み傘あるので大丈夫です！」

私は手に持っていた折り畳み傘をお母さんに渡し、一緒にさして帰る親子の後ろ姿を微笑ましく見つめ、角を曲がったのを見届けてから私は手で雨を塞いで濡れながらバイト先へ走って行った。

「馬鹿なくらい親切だな」

「何か言ったか？ **陽翔（ルビ・はると）**」

「いや、なんでもない」

取引先の会社を回っている時急に雨が降ってきて、**大樹（ルビ・ひろき）**の運転する車で

雨宿りをしている時だった。

大樹が近くの店で飲み物を買ってきていて、俺はスーツについた水滴を拭いていると、車の外で小さな男の子に話しかける女性がいた。

様子を見ていると手を繋いであげたり一緒に歌を歌って励ましたりして男の子の面倒を見ているようで、その女性の子供を見る目はとても優しく、車に中からでも優しく柔らかい雰囲気伝わってくる。

そのうち男の子の母親がやってきて、傘を持っていない親子に女性は自分の傘を差し出し、自分は濡れながらこの場から離れていった。

相手が濡れないように傘を持っていると嘘をつき、自分は雨に濡れるという女性の行動がなんとも馬鹿なほど親切で思わず口に出ってしまった。

「会社に戻るぞ」

「ああ」

大樹に促されてその女性を目で見送りながら俺は会社に戻った。

会社に戻れば忙しそうに働く社員の姿が目に入る。

パソコンを打って作業をする人、電話で対応をする人、会議で様々な案を出す人、資料を整理する人。

そんな大勢の社員をまとめ上げているのは俺の義父である黒瀬誠（ルビ・くろせまこと）。誰からも信頼され、仕事もできるすごい人だが、もうすぐ社長を次の代に交代するようで、その時期社長に選ばれたのが俺。

周りから見れば社長の長男が次期社長になるのは割と普通のことなのかもしれないが、義父というように俺と社長の血は繋がっていない。

俺は孤児院で育ち、社長に引き取られてから本当の子供のように大切に育ててもらい、その恩を返すために優秀な人間へと育った。

俺は社長のように温厚なタイプではなく、淡々と仕事をこなしていくタイプなので、社内には俺が社長になることを反対している者もいる。

しかも入社してまだ四年目だ。

「陽翔、この会社との取引についてだが……」

こいつは俺の秘書をしている小田切大樹（ルビ・おだぎりひろき）。

俺の近くで仕事のサポートをしたりスケジュールの管理をしたりしている。

実は俺と大樹は同じ孤児院出身で仲が良く、三年前にこの会社で再会した。

「本日入社いたしました小田切大樹と申します」

入社して新入社員が初めて挨拶をした時大樹がいることに気が付き、俺は思わず声をかけた。

「大樹、久しぶりだな。俺のこと覚えてるか？」

「社長の息子さんですよ。どこかでお会いしましたか……？」

大樹は俺に気付いていなくて、大樹を連れて会議室へと移動した。

大樹からしてみれば俺は偉いほうの立場で、入社して早々偉い人に会議室に連れてこられたというなんとも怖い状態だ。

表情が硬くなっている、緊張しているのがよく伝わる。

「大樹、孤児院出身だろ？」

「はい、そうですけど……」

「俺たち仲良く一緒に遊んだの覚えてないか？」

大樹は眉に皺を寄せながら考え、すぐに目を見開いて思い出したような表情になった。

「えっ、あの陽翔か!？」

大樹が思い出したところで俺たちは意気投合し、これまでのことを話した。

俺は大樹よりも先に引き取られて大樹がどうなったかは知らなかったし、大樹も俺がどんな人に引き取られたのかは知らない。

話を聞くと大樹は俺が引き取られてから二年後に引き取られて、優しい夫婦のもとで育った。

四年制の大学に行きたかった大樹は、夫婦に負担を背負わせないために高校生の頃から必死でバイトをして、自分で大学の学費を払ってこの会社に来たらしい。

バイトをしながらも偏差値の高い大学に行くために必死に勉強をして、いい会社に入社するために自分で学費を払いながら必死に勉強して、これまでものすごく苦労してきたことがわかる。

その苦労が報われたのか、大樹は今年入社してきた中では抜けて優秀だ。

俺は大樹と再会できて嬉しいし、これから一緒に仕事ができるというのも心強いと思っていた。

しかし大樹は……。

「会社の中の人に孤児院出身って知られたくないし、社長の息子が実は孤児院出身で血が繋がっていないということがバレるのはまずいから俺たちはあまり関わるべきじゃない」

そうやって俺と距離を取ろうとしていた。

そんな大樹に俺は孤児院のことを二人で内緒にすることを条件に秘書にならないかと提案を持ち掛け、信用できる人間を一人でも多く側に置こうとした。

というのもこの頃から社長が俺を次期社長にするのではないかと噂が流れていて、俺をよく思っていない人からの脅威に少し怯えていたために味方が欲しかったのだ。

大樹はその話を聞いて悩んでいる様子だった。

「少し考えさせてほしい。でも、新入社員がいきなり秘書なんてそれこそなんて言われるか……」

「優秀な社員を更に育てるためでもある。まあそこは俺から社長に言っておくから心配するな」

こうして大樹は今俺の秘書として働いている。

「陽翔、聞いているか？」

「ん、ああ悪い。少しぼーっとしてた」

「最近ぼーっとしてることが多いぞ。しっかりしろよ」

大樹とは距離が近いため、気軽にこういった注意をしてくれるのでありがたい。

それに優秀なうえ気が利くので、まるで漫画にでてくる秘書みたいだなと常々思う。

「今日の仕事は終わりだ。もう帰るか？」

「そうだな。最近よく眠くなるし今日は早めに寝ることにするよ」

大樹と共に地下駐車場に向かい、車に乗り込んで地上に出ると、先程降っていた雨はいつの間にか止んでいて、大きな水たまりがビル街の明かりを映し出していた。

街は帰宅ラッシュのためスーツを着た人たちが沢山歩いており、これから飲みに行く人やすぐ帰る人など様々だ。

中には子供を迎えに行った帰りなのか自転車の後ろに子供を乗せた母親や父親もいる。

その光景を見て昼間のあの女性をふと思い出し、濡れながらどこかに行ったようだったので、大丈夫だったのかとなぜか心配になりながら夜の街を車で走り抜ける。

一人暮らしをしているマンションに着き、大樹に明日の迎えの時間を告げて中に入った。いった。

誰もいない真っ暗な部屋の電気をつけ、今日の疲れを吐き出すかのように大きく息を吐きながらソファに勢いよく座る。

いつもソファでゆっくりしてからお風呂に入り、ご飯を作って食べるという生活を送っているが、毎日疲れて帰ってきてからのその行動はとも面倒くさいもので、誰かにご飯を作ってほしいと思うことが多い。

一連の生活行動を済ませ、すぐにベッドに入り込んだ。

そしてその夜は綺麗な月が雲から顔を出だし、カーテンの隙間からさす月明かりに照らされながらゆっくりと眠りについた。

「美月（ルビ・みづき）、今日の夜ご飯食べに行かない？」

「ごめん！ 今日バイトあるんだよね」

友達にご飯に誘われたが、今日もバイトがあるため断った。

五コマ目の授業が終わって外に出ると、空は青色に少しオレンジが侵食していて、徐々に暗くなってくる街に灯りが灯り始める。

バイト先に行く前に友達の誕生日プレゼントを買おうとショッピングモールへ向かった。女子に大人気なブランドコスメなので少し値段はするものの、パッケージがとても可愛くて使いやすいのでレビュー評価が高い。

女子同士のプレゼントによく選ばれているので、SNSで写真があげられているのをよく見かける。

友達には深い赤色のリップと欲しいと言っていたアイシャドウパレットを購入した。

「プレゼント包装をお願いします」

お洒落な箱とブランド名が書かれたショッパーに入れられて一緒に渡された。

持っているだけで女子力が上がった気分で、『安くて可愛い』がモットーの私はいつも安い化粧品しか買わないので、今だけ高い化粧品を買ったお洒落な大学生気分を味わうために手に持ってバイト先に歩き始めた。

いつもの日常に少しプラスされるだけでこんなにも気分が違うなんて。

私が知らないだけで、何気なく街を歩いている人たちにもこういう思いがあるのかもしれないと考える。

これからデートで楽しみにしている女子大生、小さな娘の誕生日プレゼントを大切に抱えて帰るサラリーマン、新作の漫画を買って急いで帰る高校生、自分へのご褒美に少し高い服を買った〇〇、久しぶりの外食を食べに来た夫婦。

ほんの少しでも特別な日を味わっている人がきつと沢山いる。

私もそのうちの一人で、気づけばどこかのCMのようにスキップをして、鼻歌でも歌い出しそうになりながら歩いていった。

キラキラと光る街の灯りと楽しそうに話しながら行き交う人々に混ざって、ふらつきながら壁に寄り掛かった男性が目に入り、心配になって近づいて声をかける。

「あの、大丈夫ですか……？」

その男性はとて驚いた表情をしたあと顔を逸らし、かぶっていた帽子のつばを持って深くかぶり直した。

顔色が悪い……。

体調が悪そうに見えたので鞆の中から口をつけていない水を取り出した。

「これまだ開けていないのでよかったです……」

「ありがとうございます……」

男性の背中に手を回して支えながらゆっくりとその場に座らせた。

「病院行きますか……？」

「いえ、すぐに連れが来るので大丈夫です」

男性の目線になって顔を少し覗きながら尋ねたが、男性は目を合わせることなく下を向いたままそう答えた。

私はその連れの人があるまでの間、男性が少しでも落ち着くようになると思い、背中をゆっくりさすり始めた。

それにしてもどうして周りの人は声をかけてあげなかったの……？

近くにこんなにも苦しんでいる人がいるのに……。

そうして数分がたった頃、近くの道端に黒い車が止まり、運転席から男性が降りてきた。

「うちのがお世話になりました。あとはこちらで対処するのでお任せください」

「この方が先ほど言っていた連れの方ですか？」

知らずに悪い人に引き渡してしまふことがないよう本人に直接確認を取る。

男性は頷いてから差し出された手を取り、支えられながら車に乗り込んでいった。

車を運転してきた男性は運転席に乗り、私に向かって頭を下げてから車を発進して街中に消えていった。

私は大丈夫かなと心配しつつ、ショッパーを握り締めてまたバイト先へと歩き始めた。

久しぶりの休日、俺は街に出歩いていた。

特に用事があるわけではなく、家でパソコンと睨み合いながら行う仕事の気分転換にと思いい、家を出てきた。

いつものかつちりとしたスーツとは真逆で、ジーパンにTシャツ、帽子とメガネというなんともラフな格好をしている。

会社では淡々と仕事をこなし、社員から少し怖がられている俺がこんなラフな格好をして街中をぶらついている所を見られるのが嫌で、顔を少しでも隠すためにメガネと帽子を身に着けた。

平日の夕方は学生が多く出歩いていて、制服を着た高校生やお洒落に着飾って楽しそうに話しながら歩く大学生に懐かしいと昔の自分を思い出していた。

そんな風にただ普通に歩いていただけ。

気温が高いわけでもなく体調が悪いわけでもない。

しかし俺の体は急に苦しみ始めた。

体の至る所に痛みをと酷いめまいに襲われ、息をするのも苦しくて次第に息が荒くなる。

こんなにも体の不調を感じたのは初めてだった。

苦しみながらも急いでスマホを取り出し、大樹（ルビ・ひろき）に迎えに来てもらうように電話をする。

「陽翔（ひろき）？ どうした？」

「大樹、今すぐ迎えに来てくれ」

「息がだいぶ荒いな。何かあったのか……？」

「急に苦しくなって……。〇〇駅のすぐそばだ、頼む」

電話を切ったのか座れる所まで移動しようと試みるも、今度は気持ち悪さが一気に押し寄せて歩いていることが困難になり、ふらふらしながらなんとか近くの壁に寄りかかる。

通行人は俺を横目に見ながら避けるようにして歩き、誰一人として声をかけてくれる人はいなかった。

いつも以上に孤独を感じて、心の中は不安でいっぱいだ。

大樹、早く来てくれ……。

「あの、大丈夫ですか……？」

後ろから声をかけられて振り向いて見てみると、この前の雨の日に見かけたあの女性だった。

馬鹿なくらい親切だなと遠目から思っていた子に自分が助けられるとは思っていないで、思わず顔を逸らしてかぶっていた帽子でさらに顔を隠した。

「これまだ明けていないのでよかったら……」

そう言っただけで女性は開けられていない水の入ったペットボトルを差し出した。

「ありがとうございます……」

俺が震える手でペットボトルを受け取ると、女性は俺の背中に手を回し、体を支えてくれながらその場に座らせた。

「病院行きますか……？」

「いえ、すぐに連れが来るので大丈夫です」

俺の顔を覗くようにしながら聞いてきたので、目を合わせることもなく下を向いて答える。声をかけてもらったのにおかしな態度ばかりとってしまっただけで申し訳ないが、なんとなく顔を見られたくなかった。

すると女性は背中をゆっくりとさすり始め、俺は少しでも体調の悪さが収まるようにその手にすがった。

さする手から優しさが伝わってきて、久しぶりに人から癒しと安心を感じた俺はそれをもっと感じるために目を閉じる。

女性の手に身を任せていると、近くの道に大樹の黒い車が止まり、中から出てきてこちらに近づいてきた。

「うちのがお世話になりました。あとはこちらで対処するのでお任せください」

「この方が先ほど言っていた連れの方ですか？」

大樹は俺を連れて行くとうそ言ったが、女性は不信に思ったのか直接俺に確認を取った。

俺はその問いに頷いてから大樹の手を取り、体を支えられながら車の後部座席に乗せられる。

大樹が運転席に乗り、女性に頭を下げて車を発進させた。

発信する直前、ちらっと窓の外の女性を見ると、心配そうな表情をしながらこちらを見つめていた。

ただこの車の窓ガラスは外から中の様子が見えづらくなっているため、女性から俺のこととはあまり見えていない。

女性から受け取った水を両手で握りしめながら背もたれに体を預けて力を抜く。

大樹に電話した時よりもだいぶ体調は落ち着いていた。

あの女性のおかげか？

「陽翔大丈夫か？ このまま病院に行くぞ」

「いや、もうだいぶ落ち着いたから大丈夫だ。 それよりさっきの子の後を追ってくれないか」

「は？ 何言ってるんだよ」

「頼む」

大樹は「はあ……」と大きなため息をつきながら先ほどの女性に気づかれないよう、ゆっくり後を追った。

五分ほどして、車は大通りより少し離れた道に止まった。

「あそこのカフェに入ったぞ」

客として入ったのか、もしくはバイト先なのか。

しばらく店の中の様子を窺っていると、エプロンを着て店の中で作業をし始めた。

ここでアルバイトをしているのか。

「あとは大丈夫だ。 休みの日に急に呼び出して悪かったな」

「お前が無事ならそれでいい。 本当にこのまま家に向かっていいのか？」

「ああ。 もしまた何かあればその時に病院に行くよ」

「そうか……」

車を発進させ、カフェを通り過ぎるとき、横目で女性の姿を焼き付けた。

私の働いているバイト先は大学から徒歩十分のところにあるこぢんまりとしたカフェで、週3くらいでシフトを入れている。

店長の**松江篤志**(ルビ・まつえあつし)さんとその奥さんの**実紀**(ルビ・みき)さんがお店を切り盛りしていて、バイトで働いている人は私を含めて三人。

サバサバしてお洒落な姉貴肌な大学三年生の**南野薫**(みなみのかおる)さんと、優しさを具現化したような爽やかな大学二年生の**相良駆**(さがらかける)さん。

私はよく二人に相談するし、薫さんも駆さんもよく悩みを打ち明けている。

とても居心地がいい場所です。私に働くことができていると思う。

ここに訪れるお客さんは少なく、ほとんどが顔見知りの常連さんで気軽に話しかけてくれるので、ここはとても温かい空間だ。

ただこの日は見たことのない男性のお客さんが来店していた。

深みのあるブラウンのジャケットとスラックスに白いTシャツを着ていて、首元にはシンプルなネックレス、腕には高そうな腕時計がつけられている。

黒い髪は綺麗にセットされていて、全体的にお洒落な雰囲気か漂っていた。

その男性は窓際の席でコーヒーマシンのブラックだけを頼み、時折窓の外で音を立てながら降る雨を見つめて時間を過ごしている。

そしてその日を境にその男性を見かけることが増えた。

何度も訪れるほどこの場所が心地いいと感じてくれたのは働いている身として嬉しい。

ただ気になるのが、その人が訪れる日は必ず雨が降っているということ。

毎日お店にいる篤志さんに話を聞いてみると、やはり雨の日に来てあの席に座っているようで、相変わらずコーヒーマシンだけを頼んで帰るそう。

「私的に美月（ルビ・みづき）ちゃんがお店にいる日はいつもより長くいる気がするのよねえ」

美紀さんがカウンターテーブルに頬杖をついて、ニヤニヤしながらそう言った。

『美月ちゃん狙いだったりして♪』となぜか上機嫌になりながら奥のキッチンに消えていった。

そんな美紀さんを篤志さんは微笑ましそうに見つめている。

美紀さんはすぐ美人な上に明るくて無邪気な性格をしていて、二人が出会った学生の頃から全然変わっていないらしい。

篤志さんが美紀さんを見つめる瞳はいつも愛おしそうで、大人しい性格の篤志さんはぐんぐん前に進んでいく美紀さんを見守って支えている。

以前二人の結婚記念日に五人みんなで祝いをした時、二人の出会い話を聞いたことがあったが、とても初々しくて純粋で、まるで漫画の世界から飛び出してきたかのような話だった。

二人が初めて出会ったのは大学一年生の時。

二人は同じ大学・同じ学科で勉強していたが、沢山いる学生の中で中心にいた美紀さんと大人しかった篤志さんは全く関わることなく半年が経っていった。

秋に行われた文化祭では学科の中でチームを何個か作り、そのチームごと出し物や出店をすることになっており、二人はそこで同じチームになった。

二人のチームはカフェをすることになり、ウェイトレス・ウェイターのような服を着て接客することに。

文化祭当日、接客に回された篤志さんはウェイターの制服に着替えたものの、暗い見た目が接客にふさわしくないと女子に罵倒され、「私たちも勝手に決めちゃったし」とかばった美紀さんが篤志さんのスタイリストをすることになった。

二人は教室を移動し、使っていない狭い教室で準備を始めた。

篤志さんは眼鏡をかけていて髪で顔が隠れている状態だったので、まず眼鏡を外して前髪を上げてみる。

その時美紀さんは、綺麗な顔をしていた篤志さんを見て一目惚れしたそうだ。

美紀さんはドキドキしながら篤志さんの髪をセットして、見事にボンパドールが似合うイケメンに変身させた。

その大変身に先ほど罵倒していた女子たちも黄色い歓声をあげて喜んでいて、イケメンウエイトレスを見にお客さんが沢山訪れたらしい。

その後篤志さんは女子から人気が出始め、焦った美紀さんはよく篤志さんに話しかけるようになり、猛アタックを始めた。

隣の席に座ったり、一緒にご飯を食べようと誘ったりとにかく色んな事をするのだが、篤志さんの反応はいつも優しく笑うだけ。

そこで気になった美紀さんは思い切っただう思っているのかを聞いてみることにした。

「あの、私のことどう思ってる……？」

「いつも楽しそうで可愛いと思うよ」

その言葉に胸が高鳴った美紀さんは勢いで「好き」と言っけししまい、恥ずかしさでその場から逃げ出すように走った時、後ろにある透明なガラス扉に勢いよくぶつかった。

痛がってしゃがむ美紀さんの視線に合わせて篤志さんもしゃがみ、優しく美紀さんの頭を撫でながら

「あとそういう危なっかしいところ、放っておけない」

と言っけ、篤志さんも美紀さんに惹かれてるようけ二人の距離はぐっけ縮まった。

こうして後に二人は付き合うようになり、結婚した今もこうして仲良く一緒にお店を営んでる。

意外にも先に好きになったのは美紀さんのほうで、その話を聞いた私は胸きゅんが止まらなかつた。

その話を聞いてから二人が話しているのを見ると、美紀さんからは小さなハートが沢山飛んでいて、篤志さんからは重いハートが飛んでいるのが見える、気がする。

「美月ちゃん、これ三番テーブルにお願いね」

美紀さんからコーヒを受け取っけ、運んだ先は窓際に座るあの男性。

窓の外を眺める横顔はとても整っているが、どこか悲しげな表情に一人の世界に閉じこもっているようにも見えた。

「お待たせいたしました、コーヒでございます」

トレーの上に乗せたティーカップを男性の前にゆっけりと置く。

カチヤンと食器がぶつかる音が鳴ると同時にその男性と目が合った。

「ありがとうございます」

柔らかな笑みを浮かべてそう言っけた彼に私は思わず尋ねた。

「あの、いつも雨の日にいらしてますよね？」

私はトレーを胸の前で持ちながら彼の返事を待った。

急な質問に彼は目を丸くして驚いたと思えば、すぐに笑っけ私の目を見ながら彼は答え

た。

「あ、バレてました？ 雨の日にとっても素敵なこのカフェを見つけて、なんとなく雨の日に来るのが習慣になっていいるんですね」

「そうなんです…。 お客様にそう言っていただけでとても嬉しいです！ ぜひごゆっくりしてってくださいね」

初めて言葉を交わせたことになんだか喜びを感じ、密かに気持ちを高鳴らせながらその日は働いた。

「陽翔（ルビ・はると）、また行くのか」

俺は十七時という定時でしっかり上がるために、最近はいつにも増して仕事に熱中していた。

特に雨が降ると分かっている日は気分が上がるので、次の日の仕事に手を付けるくらい作業が弾む。

というのも最近雨の日にあの女性が働いているカフェに通っていて、何度かシフトが被っている日に行くことができ、いつも同じような時間帯に入っていることが分かったので、しっかり定時で帰れるように毎日一生懸命働いていた。

そして今日は四日ぶりの雨が街に降りそそぎ、ビルの下にはいろんな色をした傘の華が咲いている。

「ああ、別にいいだろ。 仕事も終わらせたしこの後予定もない」

「だけどお前には…」

「わかってる。 じゃあ先に帰るな、お疲れ様」

大樹（ルビ・ひろき）の言葉を聞くよりも先にその場から離れ、そんなことよりも早くあのカフェに行きたいという自分の気持ちに従い、そそくさと会社を出た。

途中大きな駅のトイレに入り、持ってきていた洋服に着替え、髪型もラフな状態にセットしなおす。

そうすれば会社の人にもばれにくいし、仕事とプライベートの切り替えがしっかりできて気持ちに余裕がでるからだ。

カフェにつく頃には強く降っていた雨は優しい雨に変わり、店先のランプについた大きな雫は灯りを吸収してそのまま地面へと落ちていく。

木でできた暖かな扉を開けると、扉の内側についていた鈴が鳴ってお客さんの来店を知らせると同時に、店の中からはほのかにコーヒーの匂いが漂っていい気分をさせていた。

カウンター席とテーブル席に分かれていて、オレンジ色の暖かい光に包まれた店内はとも心が落ち着く。

所々に植物が置いてあって、ガラスでできたおしゃれなペンダントライトが各テーブル

とカウンター席の天井から下げられている。

海外のように洒落っていて、尚且つ木のぬくもりも感じられる空間は来るだけで気分が上がるので、このカフェは本当に素敵は場所だと思う。

「いらっしやいませ！ お好きな席へどうぞ！」

この日俺を出迎えてくれたのは、この店長の奥さん。

聞こえてくる店員さん同士の会話や、店員さんと常連客の会話で知った。

いつも明るくお客さんに接しているので色んな人からの人気が高いが、その後ろで優しく笑いながらも目を光らせている店長を俺は見落としていない。

いつも座る窓側の席に向かい、手に持っていた鞆は椅子の下に置いてある籠にしまった。何度かこの店であの女性を見かけてはいるものの、まだ一度も接客をしてもなかったことがなく、接客してもらえるようにタイミングを狙って注文を頼むものの、中々俺に来てくれない。

「ご注文お伺いいたします！」

今日も注文を聞きに来たのは奥さんだった。

「コーヒーのブラックお願いします」

「かしこまりました、少々お待ちください！」

今日もまた接客してもらえないかと半ば諦めながら窓の外を眺めた。

そもそも俺はなぜこんなにも執着しているのか。

きつと雨の日に見た優しさと、実際に触れて傍にるのが心地いいと感じたから近づきたいと思っている。

あの女性とどうこうなりたいというわけではなく、優しさと癒しに触れたくてここに何度も訪れていて、“雨の日に来るお客さん”と印象に残るように決まって雨の日に来るようにならしていた。

普通の人であれば雨の日は気分が下がるし、これは科学的にも証明されている。

しかし俺の場合はここに来る理由になるので、むしろもつと雨が降ってほしいくらいだ。

そういえば今日一人会社を辞めていったが、俺が次期社長になると正式に発表されてから辞めたのはこれで四人。

どの社員も俺が社長になるのを反対している人だった。

相手から向けられる敵意になんとなく気づくので、社内情勢がわかる。

どの人も辞めていく理由がちゃんとしていたが、それは嘘で本当は俺が嫌だから会社を辞めたのだと思わずにはいられなかった。

俺の周りには敵が多い。

信じる人、切る人を慎重に選ばなければすぐに潰れてしまう。

そんな世界に生きる俺は、常に気を張って生活しているうちに人間不信になりかけていた。

孤独に生きるというのはどんなに完璧な人間でも心細く感じる時があるが、俺もまたそ

のうちの一人なのだ。

「お待たせいたしました、コーヒーでございます」

そう声をかけられて視線を窓の外から店員さんに移すと、そこにいたのはあの女性だった。

急な接近に驚いたが、バレないように平然を装う。

トレーから取り出したティーカップをゆっくりとテーブルの上に置く行動をじつと見つめ、置いた際にカチャンと食器がぶつかる音がした直後、ぱちつと女性と目が合った。

「ありがとうございます」

いい印象が与えられるようにできるだけ自然で柔らかい笑顔を意識する。

今日は接客をしてもらえて、しつかりお礼を言えたということで、小さな一步を踏み出せたとそれで満足していた。

「あの、いつも雨の日にはいらしてますよね？」

ただ予想外な彼女の問いかけに俺は驚き、一瞬間まってしまった。
まさか彼女の方から話しかけてくるなんて。

空になったトレーを胸の前で持ちながら返事を待っていて、俺はすぐさま笑顔で答えた。

「あ、バレてました？ 雨の日にとっても素敵なのこのカフェを見つけて、なんとなく雨の日に来るのが習慣になってるんですね」

前から考えていた嘘をいかにも本当であるかのように話す。

彼女に嘘をつくのは少し後ろめたさがあるが、時にはつくべき嘘もある。

「そうなんです…。 お客様にそう言うただけでとても嬉しいです！ ぜひごゆっくりしてってくださいね」

何も疑うことなくそう言うって彼女はまた仕事に戻っていった。

そしてあの日街で助けたのが俺だということにおそらく気づいていない。

俺はこの一瞬で彼女と大きく近づけたことに嬉しさを感じ、誰からも見えない角度を向いて少し口角をあげた。

あのお客さんが来店したのは一週間前。

もっと話してみたいと思っていたが、雨が全く降らず彼はカフェに来ていなかった。

あんなに嫌だった雨を望んでいるなんて、少し前の自分では絶対ありえない。

「美月、何かいいことでもあった？」

夜ご飯を家族みんなで食べている時にお母さんが急に言ってきたので、心臓がドキッとねた。

「特に何もないよ」

ご飯を一口食べて何もないように答えた。

「絶対何かある。あ、好きな人でもできた？」

「ごほっごほっ」

お母さんの発言にスープを飲んでいたお兄ちゃんがむせて、苦しそうに咳をしている。そんな大袈裟に反応しなくてもいいのに……。

「好きな人だあ？ ちゃんとした男か俺が見定めてやる」

「もう、そんな人いないから！」

お兄ちゃんのこと好きだけど、過保護すぎるところが少々厄介。

今まで好きになった人は全員お兄ちゃんにダメだと落とされていて、一人も合格した人がいない。

そのせいで私は今まで彼氏がいたことがないのだ。

でもお兄ちゃんの人を見る目は合っていて、どの男の人も何かしらだらしな部分を持つていた。

ある人は浮気性で、ある人はお金にだらしなくて、ある人はものすごいマザコンで。友達にいるときは気づかなかった裏の顔にお兄ちゃんは気づいている。

「流星（ルビ・りゅうせい）も彼女の一人や二人すぐできるだろ」

お父さんの発言はちよつとよろしくないけど、お兄ちゃんは本当にモテるからすぐできそう。

「まじで女興味ねえ」

「美月と結婚するとか言い出さないでよ」

お母さん、結婚はないと思うけど私を結婚させずにずっと一緒に暮らしたいって言いそうで怖いです。

でももし貰い手がいなかったらお兄ちゃんと暮らしてもいいかな。

「美月が幸せならいいんだよ」

子供の頃から『美月の幸せが俺の幸せだ』とよく言っていて、その度にお兄ちゃんが私のことを大切に思ってくれているのが身に染みる。

だから私もお兄ちゃんに事が好きだし大切なんだ。

「いらっしやいませ！ あ、お久しぶりですね」

二週間ぶりに雨が降り、彼がまたカフェを訪れてきた。

私のシフトと雨が重なるなんてほんと奇跡だと思う。

「やっと来れました。仕事の方も少し忙しくて、やっと落ち着いた時期に入ったのでちょっと良かったです」

いつもの窓側の席に案内しながら話を聞くと、どうやら仕事が忙しかったようで、雨が降ってもここには来られなかったそうだ。

「あの、お仕事は何されてるんですか？」

「サラリーマンって感じですかね」

詳しい職種は言わずにサラリーマンで濁されたので、何をしているのか気になってしまったが、これ以上踏み込むことはできなかった。

そしていつものようにコーヒーのブラックを頼み、篤志さんからできたののコーヒーを受け取って、それを彼のもとへ運んだ。

「お待たせいたしました。コーヒーでございます」

「ありがとうございます。このコーヒー本当に美味しいんですね」

「そう言っていただけで嬉しいですよ！ 店長が喜びます」

篤志さんが笑顔になっているところが想像できて、私もそれが嬉しくて笑いながら言った。

篤志さんこだわりのコーヒーも、実紀さんが考えて作ったスイーツもとても美味しい。

私も薫さんも駆さんも大好きだ。

「美月ちゃん、休憩入っていいよ」

彼と話していると、篤志さんがトレーにミルクティーとチーズケーキを乗せてこちらに来て、そのままテーブルの上に置いた。

えっ、ここで……？

「今日はかなり空いてるから大丈夫だよ。ゆっくりお話しするといい」

篤志さんはそう言ってカウンターのほうに戻っていった。

まさかの展開に目をパチクリさせながらも、失礼しますと彼の前の席にゆっくりと座った。

「みづきさんって言うんですね。漢字はどう書くんですか？」

「美しい月って書いて美月っていいですよ」

自分で美しいっていうのはなんだか恥ずかしい。

店長がいれてくれたミルクティーをスプーンで混ぜ、ふーっと冷ましてからゆっくりと飲み込んだ。

コーヒーがこだわりなのに、コーヒーが飲めない私はいつもミルクティーをいれてもらっている。

そして大好物のチーズケーキもいつも出していただいて、実紀さんに申し訳ない気持ちでお礼を言うと、「美月ちゃんいつも美味しそうに食べてくれるから嬉しいのよね」と言ってくれるので、本当に実紀さんへの感謝が止まらない。

ケーキの先をフォークで一口サイズに切りとって口の中へと運んだ。

「あの、お名前をお伺いしてもいいですか？」

「まだ自分の名前言っていませんでしたね。俺の名前は陽翔って言います」

陽翔さんの優しい笑顔はまるで雲間からさした日の光のようで、「ちなみに漢字は太陽の陽に翔って書きます」と丁寧に教えてくれた名前ととても合っている。

そしていつも雨の日に来るので、陽の下で明るく笑う陽翔さんを見てみたいと唐突に思った。

「いつも思ってたんですけど、それってくせ毛ですか？」

陽翔さんは微笑みながら自身の綺麗で真っ直ぐ伸びた黒い髪の毛を指さし、目線は湿気で酷くうねっている私の髪の毛にいつている。

「そうなんです、生まれつきで……。普通の日でさえ苦労するのに、雨の日なんて特に最悪ですよ……」

アイロンで頑張って伸ばしてもうねりは残るし、汗とか湿気で濡れるとうねうねになるし、良い感じにセットで来ててもそのうち戻っちゃうし……。

いいことなんて一つもないから縮毛矯正をしたんだけど結構値段するし……。

気にしなければなんてことないんだろうけど、自分の見た目を気にする年頃だから仕方がない。

「ふわふわしていて可愛いと思いますよ。まあ、本人は大変だし嫌に感じるかもしれないですけど……」

ナチュラルに可愛い発言を受けてドキッとしたが、陽翔さんはいたって普通なので、私も平然を装ってミルクティーを一口飲む。

陽翔さんは一つ一つの動きがとても綺麗で、コーヒーを飲むというだけの動作もまるでドラマのワンシーンのよう。

動きだけでなく顔もとでも整っているので、思わず見入ってしまった。

「ん？ どうかしましたか？」

じっと見ていることがばれて、陽翔さんが首を軽く傾けてこちらを見ていた。

「いえっ！ あの、動作がすごく綺麗だなんて思ってた見ちゃってました……！」

「別にそんなに必死にならなくても……」

焦った私は勢いよくそう答えると、その必死さにクスクスと笑われてしまった。

「親がそういうのはちゃんとしておきなさいって感じだったから身に染みてるのかな」

子供のころからそう教育されてきたのならこの綺麗さは納得できる。

子供の頃はめんどくさくて嫌になりそうだけど、大人になるとその大事さを実感するところが出来るし、やってきてよかったってなると思う。

教育の違いって大きいな……。

将来子供の教育に関わっていく立場になると思うと、よく考えて子供たちと接していかなければならぬと改めて感じる事が出来た。

三十分ほど話をして私の休憩が終わる頃、陽翔さんに電話がかかってきて急に会社に行くことになったそうで、帰らなければならなくなったために急いで会計を済ませる。

「また来ます」

扉を開けて外に出る直前にふっと振り返り、私の目を見ながらあの優しい笑顔でそう言っただけで帰っていった。

くそ、大樹のやつせっかく美月ちゃんと話せたのに会社に戻って来いってなんだよ。まあでも俺を呼ぶってことは何かあったんだろな。

美しい月で美月って、月のように静かで美しい美月ちゃんピッタリだ。そんなこと本人に言ったらきつと気持ち悪いと思われるから言わなかったけど。

カフェから少し歩いたところに大樹が車で迎えに来ていて、俺は憂鬱になりながらも車に乗り込んだ。

「なんだよその恰好。もしかしていつも着替えて行ってるのか？」

「ああ。仕事服で行きたくないし社員に見られたくないからな」

せっかくの時間を邪魔されたことに若干機嫌を悪くしながらも、これから会社に行くというので急いでスーツに着替えて髪型もできるだけ元に戻した。

「で？ 何かあったんだ？」

「社長が俺ら二人を呼んでる」

社長が……？

俺だけじゃなく大樹も呼ばれたのか。

社長に呼ばれるのはとても珍しいし、育ての親と言っても上司なので緊張はする。

「陽翔は次期社長についてだろ。俺の方が何言われるか怖いって」

「何かやらかしたのか？」

「真面目にお前の秘書やってたわ」

「だったら大丈夫だろ。自分がやってきたことに胸張れよ」

大樹は入社当時から俺の秘書として働いてきて、元から優秀だったのに今では完璧に近いくらい成長した。

本当に頼もしい相棒と呼べる存在。

会社に着き、エレベーターに乗って社長室のある階に移動した。

社内にはほとんど人が残っておらず、静かな中緊張しながら社長室へと歩いていて、お互い黙ったまま歩く音とドクドク鳴る心臓の音だけが耳に響いている。

扉の前につき、コンコンとノックをすれば中から「どうぞ」と社長の声が聞こえて、平静を装って中に入った。

深いグレーの絨毯が敷かれていて、手前には来客用のソファとテーブル、そしてその奥に社長のデスクが置かれている。

社長が座る場所の後ろは大きな窓になっていて、そこからは高層ビルが立ち並ぶ景色を見ることができ、夜には綺麗な夜景を独り占めできる。

大きな本棚がいくつも並べてあり、そこには仕事に関する資料や仕事に必要な知識を学ぶための本など、社長が学んできたものが詰まっていた。

「社長、お呼びでしょうか」

窓の外の沈みかける夕日のオレンジと、これからやってくる夜の二つの色染まった景色

を立ちながら見ていた社長が、俺の呼びかけで大きな革のデスクチェアに腰を掛けた。

一步下がった位置に大樹が立っていて、いかにも秘書らしい振る舞いにさすがだなと心の中で思う。

「次期社長を陽翔にするという話のことだが、来年度から社長としてこの会社を任せたいと思う。そして**小田桐（ルビ・おだぎり）**には陽翔が社長となった後も秘書として支えてほしいと思っている」

来年度から俺が社長……。

それに大樹もそのまま俺の秘書として就いてくれる。

「了解いたしました」

とてもいい形で社長としてこの会社を繋いでいけることに大きな感謝を感じ、その気持ちも込めながら深く頭を下げた。

後ろから「ありがとうございます……」と囁み締めるように大樹が呟き、同じく深く頭を下げる。

「それのだが、この部屋にある資料を二人に活用してほしいと思っとな。自由にここに入っつていいよう手続きをしておいた。来客がない時間は好きに使うといい」

社長室に自由に入入りできて勉強させてもらえるなんて本当に感謝しかない。

絶対社長の期待に応えて、俺を拾って育ててくれた恩を返すんだと改めて意思を固めた。

一緒に席に座って話してから一か月くらいが経ち、雨の多かった時期は過ぎて暑い夏がやってきた。

毎日太陽の光と気温に襲われながらもすっかり大学で勉強をして、その帰りにバイトに通う。

あれから陽翔さんは何回か来店していて、そのたびに色々な話をしてすっかり仲が良くなった。

陽翔（ルビ・はると）さんは現在二十五歳で、詳しくは聞いていないがサラリーマン的な仕事をしているらしく、仕事のほうがすごく忙しくて滅多に来られないようで、せめて雨の日だけは通うように自分で決めているそうだ。

こういうことはあまりよくないかもしれないが、実はこっそり連絡先を交換していて、たまにくる陽翔さんからの連絡を心待ちにしている自分がいる。

ただ忙しい相手に連絡を送りすぎるのも迷惑だと思うので、迷惑にならない程度に簡潔に文章をまとめて送るようにしていた。

そんな私の様子になぜかお兄ちゃんは気づいたようで、どうということなのかと問いただ

され、嘘がつけない私は陽翔さんとの今までのことを正直に話すと、お兄ちゃんからは「**美月（ルビ・みづき）**を狙ってきた気持ち悪い男だからやめておけ」といつものように言われた。

それでも私は陽翔さんが悪い人だとは思っていないし、陽翔さんのことが気になっていると自分でちゃんとわかっている。

その先どうなるかはこれからもつと陽翔さんを知ったうえで、自分で判断して付き合い方を考えていきたい。

今日はシフトが入っていないものの、比較のお客さんが少ない曜日でもあるので、カフェで勉強しようと思って訪れていた。

そして実は夕方から雨がふる予報が出ていて、私は密かに期待しつつ、本来の目的は勉強であるということを自分に言い聞かせる。

カウンターの端の席を借りて教科書とノートを開いて勉強を始めた。

一年の前期は座学が多く、覚えることが沢山。

書いて覚えるタイプの私は習ったことをノートにまとめて、復習もしながら頭に入れていく。

夏休みが開けてから幼稚園と保育園でそれぞれ二週間ずつの実習が始めるため、それに向けて一層勉強に励んでいた。

入学する前に想像していたよりも学ぶ種類が多く、教育の基礎的な考えや成り立ちを学ぶ教育原理、子供の育ちと子育て支援を目的・課題とするときの基本法則・要素を学ぶ保育原理などの他に、人間性と社会性を支える基礎的な教養を学ぶ情報処理、レポート・考察分の書き方と文書作成の基本的作法など、前期だけでもいろんな勉強をしている。

課題も勉強も毎日大変だけど、ここで学んだことが子供たちの役に立つのだと思えば苦しい気持ちは消えていく。

一度集中すると声をかけられるまで続けているので、**駆（ルビ・かける）**さんがミルクティーを置きに来た時にもう三時間経っていることを知って素直に驚いた。

はつと陽翔さんのことを思い出していつもの席を見るとそこには誰も座っておらず、その先に見える窓の外ではパラパラと雨が降っていた。

そんな私に気づいたのか実紀さんが近づいてきて、「今日あのお客さん来てないみたいよ」とこそっと教えに来てくれる。

今日陽翔さん来なかったんだ……。

今日も来てくれるだろうと思っただけで期待していたため、会えないことに少し寂しさを感じた。

いつものバイトが終わる時間帯になり、そろそろ帰ろうと荷物をまとめてみると、扉の鈴が鳴ってお客さんが来たことを知らせる。

「いらっしゃいませ〜……あっ」

バイトの接客がしみ込んでいるので、思わず声を出してしまった。

そんな私をみながら駆さんがクスッと笑いかけて横を通り過ぎ、お店に来たお客さんの案内をするために入り口に向かう。

私も帰ろうと鞆を持って入り口に向かったとき、今入ってきたお客さんを見て思わず声が出た。

「たいがくん……?」

以前雨の日にお母さんとはぐれて泣いていたところに遭遇したあのたいがくんだ。今日はしっかりとお母さんと一緒に手を繋いでいる。

「あ、あの時の……」

お母さんが先に声をかけ、お互いに会釈を交わす。

私はたいがくんの目線になるためにゆっくりとしゃがみ、笑顔で話しかけた。

「たいがくん覚えてるかな?」

そう聞くとたいがくんは声は出さずにうんと頷いて教えてくれる。

子供は難しいもので、一度仲良くなっても次にあった時また距離ができてくるので少し寂しい。

「この前は本当にありがとうございました。あの、これ……」

お母さんが鞆の中から取り出したのは、あの時私が貸した折り畳み傘だった。

「もしどこかでお会いしたら返そうと思ってずっと持ち歩いていたんです。でもまさかここで会うなんて……」

私もまさかたいがくんとお母さんにバイト先で遭遇するなんて思っていなかった。

「咲良（ルビ・さくら）〜！ やつと来てくれた！ それにしてもたいがくん大きくなったわね！」

後ろから実紀（ルビ・みき）さんが勢いよくやってきてお母さんに抱き着くわ、たいがくんを撫でるわで私は頭が混乱した。

「実紀、相変わらず変わってない……」

お母さん、もとい咲良さんは実紀さんを見て苦笑いしていた。

え、二人は知り合いなの……?

「この二人は高校の時から親友なんだよ」

篤志（ルビ・あつし）さんもこちらにやってきて、頭の上にはてなを浮かべる私に説明してくれた。

世界って狭いなあ……。

「咲良と美月ちゃんって顔見知りなの?」

そう聞かれて咲良さんがあの日のことを実紀さんに話すと、なぜか実紀さんは私に抱き着いてきてお礼を言われた。

私の親友とその子供を助けてくれてありがとう、と。

私はこの時実紀さんが言った言葉に込められた想いを知らず、お礼を言われてただ頷い

ていた。

そして実紀さんに誘われて私も一緒にお話に参加することに。

「たいがくんに最後に会ったのは赤ちゃんのときだもんねえ。今何歳になったの？」

「もう五歳よ。ここまで長かったような短かったような……」

咲良さんはたいがくを細目で愛おしそうに見つめながら言った。

子供の成長は早いもので、あつという間に大人が思う以上の成長をする。

それが他人の子供であればなおさらだ。

「何かあつたらすぐに言ってるね？ いつでも相談にのるから」

「ありがとう実紀。実紀も一人で抱え込まないでね？」

実紀さんはいつも明るく元気なので、悩みなんてほとんどないと思っていた。

でも明るく振舞っている人ほど何かを抱えていることがあって、実紀さんの言葉に衝撃が走った。

「私は大丈夫よ！ 自分の子供が産めないぶん、咲良やたいがくを大切にできるから」

子供を産めない……？

産めないということは実紀さんの体に原因があるということなのだろうか。

実紀さんは子供が大好きで、たまに訪れる子供を見ては優しい笑顔で見つめていた。

だから私は早く実紀さんと篤志さんの子供が産まれて、仕事を続けながらも我が子に愛情を注ぐ実紀さんを支えたいとまで考えていた。

心の底から子供が欲しいと思っっているはずの実紀さんは子供を産むことが出来ず、親友とその子供をとっても大切にしている。

だからさっきのお礼には我が子を助けてもらったかのような感謝が込められていたのか。

「せめて咲良とたいが君は私に守らせて」

実紀さんは少し悲しそうな笑みを浮かべ、切実な想いを語った。

一時間ほど話してお開きになったが、帰ってから実紀さんのことが頭から離れず、実紀さんのことを考えながらその日は眠りについた。

社長からあの話をされて数日後、俺と**大樹（ルビ・ひろき）**は仕事が終わってからさっそく社長室で本を読んでいた。

ビジネスの本からリーダーシップの本まで様々なことを学べる本が並んでいる。

本棚から次の本を取りだし、立ったまま本の内容をペラペラと見ていると、急に視界が歪んでめまいに襲われた。

グラグラと揺れて立っていられなくなった俺はその場にしゃがみこんだ。

「陽翔？」

横にいた大樹が本を置いて俺の傍に駆け寄ってきた。

大樹に支えられながらなんとかソファまで移動し、全体重をソファに預けて目をぎゅつと瞑る。

目を瞑ってもグラグラは収まらず、次第に気持ち悪さが込み上げてきた。あの時と同じような症状を発症しており、頭の中で俺を優しく撫でてくれた美月ちゃんを思い出す。

ふーっと深く息を吐いて、ゆっくり息を吸って吐いてを繰り返していると、少しずつ症状も和らいできて、五分ほどでなんとか鎮まった。

「まだ顔色悪いな。今日といいこの前といい大丈夫か？」

大樹が心配した様子で俺の顔を覗き込み、おでこに手を当てて熱はないことを確認する。

「病院行ったほうがいいんじゃないか？ これから忙しくなるだろうし。どちらにせよしっかり治せよ」

「ああ……」

疲労ではないかと考えていたが、この前のこともあって一度病院に行くことにした。

明日仕事が終わってから病院に行くのだが、なんと明日は雨が降る。

せっかく美月ちゃんと話せて仲が縮まってきたのに、自分の体調不良でその機会が減るなんて最悪だ。

どんなに忙しくても、雨の日は必ず行くようにしていたのに……。

美月ちゃんは「どうして来ないんだろう？」と考えてくれるだろうか。

いや、そもそも明日必ず美月ちゃんがいるとは限らない。

もうこんなことが二度とないように今回でしっかり治そうと思い、明日はちゃんと病院へ行くことを決めた。

仕事が終わわり、大樹に乘せられて病院に来た。

病院に来るのは久しぶりで、緊張しているわけではないものの、少しドキドキしている。

病院には様々な人が入院・診察にやってくる。

点滴スタンドを引きながら歩く人、車いすに乗って移動している人、頭に熱さまシートを貼ってお母さんに抱っこされている子供、副作用で髪が抜けてしまったのか帽子をかぶっている人、生まれたばかりの赤ちゃんなど。

命のやりとりが行われる病院が、俺は少し苦手だった。

「黒瀬（ルビ・くろせ） 陽翔さくん！」

受付を済ませて待合室で待っていると、看護師さんに名前を呼ばれて診察室に案内される。

診察室にいた先生は俺と同じくらいの年齢に見えて、見た目はかなり厳しそう。

そんな先生に病状を伝えると、言われた言葉は少し意外なものだった。

「血液検査、ですか？」

「はい。具体的な原因がわからないので血液検査をしましょう。結果は四日後くらいに

わかるので、それ以降の日にもまた病院に来てください。」

看護師さんに血液を採決してもらい、今日はめまいを抑える薬をもらって帰宅ということに。

「どうだった？」

俺が診察室から出てくると、一緒に来てくれた大樹がすぐに近づいて聞いてきた。

「原因がわからないから血液検査で診るって。結果は数日後にわかるみたいだ」

検査というと何か重い病気にかかっているのではないかといつもより心配になって、いろんな可能性を考えてしまう。

「そうか……」

大樹も心配してくれているのか、声がいつもより下がっていた。

こんな時こそ美月ちゃんに会いたいと思うが、そう思う自分が以前より弱くなっていると感じて、そのたびに社長になることを考えて気を引き締めるようにしている。

明日の天気予報は曇りで雨が降るかかわからないが、今回ばかりはこの不安を少しでも取り除きたいと思い、仕事が休みなのもあって明日雨が降らなくてもカフェに行こうと決めた。

実紀さんの話を聞いた翌日、大学が休みだったがバイトのシフトが入っていて、いつもより早い時間にお店に行っていた。

一番気温が高い時間帯で、まだ外は明るく真っ青な空が広がっている。

休みの日ということもあって、いろんな年代の人たちが街を歩いていた。

そんな中バイトをする私は、実紀さんのことを考えながら忙しく動いており、チラチラと実紀さんを見てはハツとして接客をするというのが続いていた。

今日は暑いのか珍しく人が多く出入りしていて、いつもの静かな空間ではない。

「美月ちゃん！ これ八番テーブルにお願い！」

「……はい！」

実紀さんからデザートの特イラミスを受けとり、八番テーブルに座るお客さんに運ぶ。

少しぼーっとしていたのが実紀さんに伝わったのか、全てのお客さんに運び終わったところで裏に呼ばれた。

「美月ちゃんたまにぼーっとしてるけどどうしたの？」

「いや、その、ええっと……」

実紀さんが子供を産めないことが気になって：なんて言えるはずもなく、言い訳を考えたものの何も出なかった。

「もしかして昨日の話気にしてる？」

実紀さんから言われて否定ができない私は、視線を下に向けながらゆっくりと頷いた。

もし実紀さんを傷つけてしまったらどうしよう……。

「気にしてくれてありがとう」

想像していなかった言葉に私はバツと顔を上げて実紀さんを見ると、いつもの笑顔で私を見ていた。

きつとあまり人から触れられたくない部分なのにお礼を言うなんて。

「結婚する前に病気で子宮を全て摘出しているの。それがわかって篤志は結婚してくれただ。確かに私も篤志も子供は欲しかったけど、ずっと引きずっていても何も変わらない」だから少し違う他の沢山の幸せと向き合っている、と実紀さんは言った。

「幸せの形は人それぞれだから、美月ちゃんも自分なりの幸せを沢山見つけるんだよ？」

実紀さんの言葉に泣きそうになるのを必死にこらえて、「はいっ」としつかり返事を返した。

裏から戻ってきたときにちょうどお店の扉が開いて、お客さんを迎えようと歩いていく。

「いらっしゃいま、せ……」

まさか来るとは思っていなかった人の来店に、思わず出かけた声が消えていった。

今日雨はまだ降っていないし、時間もいつもよりかなり早め。

「ほら、お客さんだよ？」

後ろから来た実紀さんに背中をトンッと押されて、一度立ち止まった歩みをまた動かし扉へ向かった。

私が目の前で立ち止まると、彼はいつものように明るく笑って「こんにちは」と挨拶をしてくれる。

「いらしゃいませ」

それに答えるように私も笑顔で挨拶をする。

いつもより混んでいるお店の中で唯一空いているのはあの窓側の席。

そこに案内して、いつもと同じ注文を受けて、また私が彼の元へコーヒーを運ぶ。

「今日陽翔さんが来るとは思っていませんでした」

机に置くと同時にそう話しかけると、陽翔さんは少し困ったように笑いながらコーヒーを手を取った。

「仕事が休みだったので来ちゃいました。今日はすごくここに来たい気分で……。それ

にしても今日は込んでますね」

「そうなんですよ。久しぶりに忙しくて」

私も陽翔さんもお客さんと賑わう店内を見渡しながら話す。

この様子だとまたすぐお客さんに呼ばれそうだ。

「今日はゆっくりお話しできないんですね、残念です」

「あ、あの！ 私あと三十分くらいで終わるんですけど、もしよかったら途中まで一緒に帰りませんか……？」

私と話したいと思っていることに嬉しくなり、私も陽翔さんともっと話したいと思って

いたことから、勇気を出して誘ってみた。

陽翔さんは目を丸くして私を見ており、ピタッと動きが止まっている。

「あの、陽翔さん……？」

目の前で手を振って現実に引き戻そうとすると、ハッとして瞬きを繰り返した。

「もちろん喜んで」

今までで一番明るい太陽のような笑顔を向けられ、ドキッとした私は急いで仕事に戻った。

あの笑顔はすぎるよ……。

「美月ちゃん、顔が赤いけどどうかした？」

カウンターのほうに戻った時に篤志さんにそう言われ、急いで否定した私はだいぶ様子が変だったと思う。

ただこの後一緒に帰れることがものすごく楽しみで、ずっとにやけるのを我慢しながら仕事をした。

「お待たせしました」

バイトが終わり、陽翔さんが待つ店の外へ行くと、陽翔さんは笑顔で私を迎えてくれた。

「バイトお疲れ様。 帰る方向はどっち？」

「こっちです」

指さす方向に二人で歩き始め、自然と隣に並んでいるのが少し恥ずかしい。

私の歩くスピードに合わせてくれていいのか、先に行くことなくびったり隣で歩いている。

それに自然と陽翔さんが車道側を歩いていて、やっぱり紳士だなと常々思う。

話したいと思って誘ったのにもかかわらず、何を話そうか頭の中がぐるぐるしていた。

「美月ちゃんって大学で何の勉強してるの？」

「幼児教育の勉強をしています」

陽翔さんから話を振ってくれてとても助かった。

こうして改めて見るとやっぱり大人の男性なんだなとよく感じる。

大人の余裕が出ているというか、纏っている空気がそもそも違う。

「幼児教育かぁ。 美月ちゃんはいいい先生になりそうだね」

「なれるといいんですけど」

自分にあまり自信がないので、視線を下に向けながら少し笑って答えた。

子供たちのことを考えて必死に勉強しているけど、それがいい先生になれるかどうかはまた別の話。

気持に行動がついていかなのはよくあることだ。

朝から曇っていた空が次第に黒くなってきて、ポツポツと少しずつ雨が降ってきた。

「雨だ……」

陽翔さんが手で雨が降っていることを確認する。

私のかばんの中を探り、この前咲良さんとたいがくんに返してもらった折り畳み傘を取り出した。

「傘、さしますね」

「俺が持つよ」

陽翔さんがスツと私から傘をとり、二人が濡れない場所に傘をさした。

折り畳み傘という狭い中での相合傘はとても距離が近くて、たまに腕が触れ合っただけに妙な意識をして体を縮こませている。

「緊張する？」

「……！」

少し見上げて陽翔さんを見ると、余裕そうな笑みを浮かべて私を見ていた。

いつもと違っていじわるな大人感に翻弄されそうになりながら、「そんなことありません！」と意地を張って強がった。

本当は心臓がバクバクだ。

「そっかぁ。俺は緊張してるんだけどね」

え……？

全く緊張しているように見えないので信じられないが、ちらっと見てみるとほんのり耳が赤くなっていることに気付いた。

「嘘です。私も緊張します……」

私も正直な気持ちを言うと、陽翔さんはふはっ！とどきり明るい笑顔を見せてくれて、その笑顔にまた胸が高鳴った。

見た目はかっこよくて素敵な大人な男性なのに、笑うと青年のように無邪気で可愛い。

そのギャップにやられない人はいないだろう。

「ん？　なんか猫の鳴き声聞こえない？」

そう言われて耳を澄ますと、微かに猫の鳴く声が聞こえた。

鳴き声的にたぶん子猫だ。

周りを見渡してみても子猫の姿は見当たらず、すぐ横の公園に入ってみると、土管の中に段ボールを見つけた。

もしかしてと思いその段ボールに近づいて中を見ると、一匹の子猫が体を震わせながら鳴いていた。

青みがかかったグレーの色とトラのような縞模様をしていて、目は珍しい青色をしている。

とても小さくて生まれてからまだまもないようだった。

「捨てられたんですかね……」

「……」

私はその子を抱き上げ、温めるように腕の中に抱いて撫でた。

生まれたばかりなのに一人ぼっちで怖かっただろうな……。

「拾ってあげたいですけど家はお父さんもお母さんも猫アレルギーなんですよね……」

「……俺が責任もって飼うよ」

陽翔さんは私の腕の中にいる子猫を優しく撫でながら言った。

「え、いいんですか……?」

「うん、一人暮らしだしこのまま放っておけないしね」

陽翔さんなら安心して任せられると思い、抱っこしていた子猫を託した。

「名前決めないでだな。……ブランとかどうだろう?」

ちなみにインドネシア語で“月”って意味だよ、と付け足して言われ、まさかと自分でいように解釈して嬉しくなっていた。

「すごくいいと思います……!」

嬉しさのあまり勢いよく返事をしてしまい、また陽翔さんに笑われた。

その後近くの駅まで行ってそこで別れ、陽翔さんはブランと一緒に帰って行った。

美月ちゃんと別れた後に近くの動物病院に行き、ブランの状態を見てもらったり必要なものを聞いたり、ペットショップでいろんなものを揃えたりしてからマンションに帰った。

最初はそわそわしていたものの、次第に慣れて部屋の中を歩き回るようになった。

ブランはサバトラという種類で、人には友好的で大人しい性格だそうだ。

ご飯を食べさせるために、買ってきた猫用ボウルにミルクとウエットフードを入れる。

すぐには食べなかったが、匂いをかいで一度口にすると勢いよく食べ始めた。

特に健康状態には問題ないようで、このまま元気に育ってくれば俺も美月ちゃんも嬉しい。

公園でブランを見たとき思わず昔の自分と重ねてしまい、このまま放っておくことなんてできなかった。

俺には育ててくれた人がいたけど、この子はこの先どうなるかわからない。

だったら俺が責任を持ってこの子を育てていこうと心に決めた。

ピコンとスマホの通知音が鳴り、見てみると美月ちゃんからメッセージが届いていた。

『今日は一緒に帰れて楽しかったです! ありがとうございますございました! ブランの様子はどうでしょうか? 陽翔さんなら安心して任せられるので、ブランのことよろしくお願いします』と。

俺はメッセージと一緒にブランの様子を送ろうと、元気よくご飯を食べているブランの写真を撮った。

「こちらこそありがとう、また今度ゆっくり話そう。ブランの様子だけど、元気にご飯を食べてるよ、と」

美月ちゃんにメッセージを送り終わった後、ブランの部屋になるゲージを作って寝床や

トイレを設置し、作り終わる頃にはブランもご飯を食べ終えていて、そっと抱き上げてゲージの中に入れた。

俺はパソコンで色々なペットのグッズを見ていて、日中ブランが寂しくないようにおもちゃと、一人でいてもしつかりご飯が食べられるように自動給餌機と自動給水機を購入した。

時刻は十九時前とちょうど夜ごはんの時間帯。

ただ今日は食欲があまりわかず、ゼリーと栄養ドリンクだけで済ませた。

ブランの様子を確認してからお風呂に入り、湯船につかりながら今日のことを思い出して余韻に浸っていた。

まさか美月ちゃんから一緒に帰りませんかと誘われるなんて考えてもいなかったし、想定外すぎて固まってしまったのを覚えている。

いつも愛想がいいように作り笑いをしているが、今日は久しぶりに心から笑えた気がしたし、俺にブランという家族が出来た。

これも全て美月ちゃんのおかげ。

最近の俺の幸せは、全部美月ちゃんからもらっている。

美月ちゃんから離れた俺はどうなるんだろうとか、その後の俺の幸せはないのかとか、不安になればなるほどマイナスなことを考えてしまう。

最初はただの興味本位で近づいたのに、今となっては彼女に惹かれて求め始めていた。

だけど俺は美月ちゃんと望む関係にはなれない。

そうわかっていても会いに行くことをやめられないから、この気持ちをずっと隠し通す覚悟で美月ちゃんと関わっていきこうと固く決めた。

のぼせる前にお風呂から上がり、冷蔵庫に入っているミネラル水を飲む。

ブランはというと、寝てはいないものの猫用のベッドに横になっているので、安心してきたのではないかと思う。

ブランにとって俺は親で、頼れるのも俺しかいない。

だからありつただけの愛情をブランに注いであげたいし、寂しい想いもさせたくない。

ゲージ越しに撫でようと指を近づけると、ブランはゆっくり近づいて匂いを嗅ぎ、指に顔を擦りつけてきた。

あまりの可愛さに胸がキュッと締め付けられる。

ブランと遊びたい気持ちもあるが、明日からまた仕事で朝が早いので、今日はもう寝ることにした。

ベッドに入り、目覚まし時計をセットしている時にスマホが鳴り、見てみると美月ちゃんからの返信だった。

『元気そうでよかったです！ 陽翔さんもお仕事お忙しいと思うので、お体には気を付けてくださいね。 おやすみなさい』

寝る直前にまで癒しを与えてくれる美月ちゃんに心の中でありがとうと思いつながら、部

屋の電気を消して眠りについた。

前期が終わり、長い夏休みが始まった。

大学生初めての夏休みということまで心がウキウキしているが、やはり課題はかなり多いので、遊んでばかりいられない。

課題については計画的に進められるほうではあるので、夏休み終わりに慌てることはほとんどないので大丈夫だと思う。

ちなみに夏休みの予定はいつも通りバイトと、半年ぶりに親友と遊ぶだけ。

まあ友達に誘われればその都度遊んだりはするかもしれないけど。

あと私は夏休みの間にか陽翔（ルビ・はると）さんに会えないかと考えていた。

この時期は滅多に雨が降らず、お店に来る機械はほとんどないので、それ以外のところでは会う約束をしなければ最悪会うことができない。

とても忙しそうなのがわかっている手前私から誘うということは難しいのに、会いたいと思う気持ちは止められなかった。

少し様子を見てから誘ってみようかな……。

さっそく部屋で課題を進めていると、お母さんが扉をノックして部屋に入ってきた。

「美月、明日日葵（ルビ・ひまり）ちゃんとお泊りでしょ？ 早く寝なさいよ！」

「わかってます〜」

子供が良く言う「これからやろうと思ってました〜」的なニュアンスで返事をした。

さっそく明日は親友である皆川日葵（ルビ・みなかわひまり）と泊りがけで遊びに行く。

プリクラを撮ったり、洋服や化粧品を買ったり、カフェでゆったりしたりとやりたいことが盛りだくさん。

そしてその後はちょっと奮発してお洒落なホテルに泊まって、次の日は大人気のテーマパークに遊びに行く。

楽しみすぎて今日も明日も眠れなそう。

コンコンとまた扉がノックされ、返事をして入ってきたのはお兄ちゃんだった。

「美月早く寝ろよ。ただでさえ遠足前とか眠れないタイプなんだから」

「もう何歳だと思ってるの！？ それにさっきお母さんにも言われたし！」

お兄ちゃんはこちらからかうように笑いながらそれだけ言って部屋から出て行った。

本当にいつまでも子ども扱いしてきて困る。

確かに小学生の頃遠足の前の日に眠れなくてお兄ちゃんに寝かしつけてもらったことがあるけど……。

「もう寝ようかな」

お兄ちゃんに言われた通りきつと寝付くまでに時間かかるだろうし、寝不足になると顔の治安が悪くなってしまう。

荷物の準備はもう終わっているしあとは本当に寝るだけなので、明日のためにも今日は早く寝ることにした。

昨日の夜は案の定寝付くことが出来ず、一時間以上かけてやっと寝ることができた。それでも十分な睡眠時間は取れたので問題はない。

「おはよ〜」

いつもの時間に起きて家族で朝ご飯を食べ、私はゆっくりメイクをしたり髪をセットしたりと準備を進めた。

いつもより気合を入れて丁寧にメイクをし、少しでも可愛く見えるように髪はふわふわに巻く。

メイクが上手くいっただけでいつもより可愛くなれたと感じて嬉しくなる。

だからメイクが好きなのだ。

「お兄ちゃん準備できたよ〜」

日葵との集合場所までお兄ちゃんに送ってもらうので、荷物を持ってお兄ちゃんの部屋に入った。

なにやらパソコンで作業をしていたようで、もしかしたら仕事をしていたのかもしれない。

「おお。 いつにも増して可愛いな」

お兄ちゃんはパソコンから目を離し、私をまじまじと見ながら言った。

こういう言葉をいつもサラッと言うからすごい。

こんなの女の子に言ったら大体の子は一発でお兄ちゃんに落ちるだろう。

「じゃあ行くか」

壁に掛けてあった車のカギをサッと取り、私が持っていたキャリーケースも自分が持つのが当たり前のように持ってくれる。

よく見ているとお兄ちゃんの短所は全く見つかからない。

「ん？ どうした？」

「…：なんでもない」

なんだよと笑いながらヘアセットが崩れない程度に私の頭を撫でる。

お兄ちゃんは頭のとっぺんからつま先まで女子の理想がぎっしり詰まっているんだ…。

「二人とも気を付けて行けよ」

日葵と待ち合わせの駅で無事合流し、お兄ちゃんに見送られながら改札を通った。

日葵の実家はこっただけど私の家からは離れている。

それに県外の大学に進学した日葵は現在一人暮らしをしていて、昨日帰ってきたばかりだそうだ。

「美月と遊ぶのが楽しすぎて昨日寝れなかったんだよね！」

「私も一緒！」

子供のころから同じ時間を一緒に過ごしてきて、言いたいことやタイミングが重なることが多い私たちは、一緒にいて楽しくないことなんかないくらい大の仲良し。

久しぶりに会ったので話が止まらず、電車の中でもずっと会話が盛り上がっていた。

「大学どう？ 順調にいつてる？」

「うん、覚えることが多くてなかなか大変だけど楽しいよ。 日葵のほうが大変でしょ？

看護なんて勉強も実習もやばそうだよ」

看護の大学に進んだ日葵は毎日難しい勉強をした後、疲れた体に鞭を打って一人暮らしで必要なお金を稼ぐために週五でバイトを入れていて、きっと毎日ヘトヘトになって帰ってきているはずだ。

「めちゃくちゃ大変だけど少しでも多くの人の役に立てればいいなって思うから頑張れるよ」

日葵も私と同じで人のために何かをするのが好きなので、お互い支え合って成長してきた。

日葵のそういうところが好きだし、心から信頼できるとても大切な友達。

そんなこんなで学校の話や身の回りの話などをしているうちにあっという間に時間が経ち、降りる駅に着いたのでロッカーにキャリアケースを預けて身軽になったところで私たちは街に遊び出た。

「プリクラ撮るの久しぶりだな〜！」

高校生ぶりのプリクラに日葵はテンションが上がっていて、数年前よりも進化した加工技術を見て「すごっ！」と声を上げていた。

やはり周りには中高生が多くて、まだ十代の私たちでも歳を感じてしまう。

自分たちにもあんな頃があったんだなと幼いころの自分を思い出し、もっと色々遊べばよかったと少し後悔した。

「どのプリ機が盛れるんだろ？」

「私もよくわからないからとりあえずここ入る？ 人気そうだし」

今のプリ機事情がわからない私たちは、見たところ人気そうなところで撮ることにした。お金を入れて画面を色々操作し、中に人がいないことを確認してカーテンを開けて入っていく。

気分が上がるような可愛らしい音楽が流れていて、ここにいるだけで女子力が上がりそう。

荷物を置いて、カメラのレンズに映り込んで髪を整えたり、立つ位置を確認したりして準備を整えた。

そしてアナウンスと同時に撮影がスタートする。

「ポーズとか思いつかないからこれの通りにやろう！」

画面に表示されたモデルさんの真似をして、最初は片手で小顔ポーズ。

今撮った写真が画面に表示され、そこには加工で少し顔が変わった自分が映し出されていた。

「美月めちゃくちゃ盛れてるじゃん！ 可愛い！」

「日葵も盛れ盛れだよ！」

いつもより可愛くなれてテンションが上がり、魔法にかかったような気分になる。

無難にピースをしたり、ちよつと変顔を試みたり、ギューツとくっついてみたりと存分に撮影を楽しんだ。

「やっぱり別人になれるって楽しいね！」

撮った写真に落書きやメイクをしながら日葵が声を弾ませて言った。

写真の中の日葵は心から楽しそうな笑顔をしていて、名前の通りひまわりのよう。

日葵は毎日大変そうにしているので、笑顔が見られて安心した。

「少し見ないうちに美月変わったなあ」

「ええ？ そんなことないよ。 日葵こそさらに美人になってるじゃん」

大学に入ってからオシャレもメイクも気を遣うようになったけど、そこまで大きな変化はないと自分では思う。

私に比べて日葵は年々大人っぽさが増していき、モデルさんでもおかしくない顔とスタイルをしている。

こんな美女を男子たちが放っておくわけがない。

「日葵モテるでしょ？」

「いやいやモテないよ」

半笑いしながらそう言って出てきたプリクラを取ると、半分に切って私に渡してくれたので、財布の中にしっかりとしまった。

「美月こそモテるでしょ？」 そういう人いないの？」

「モテないよ！ まあ、いないことはないんだけど……」

頭の中に陽翔さんが思い浮かんでもごしながらそう言うと、日葵はにやにやしながら近づいてきて、「あとで恋バナしようか」と耳打ちをする。

恋バナが好きなのは大きく頷き、次にシヨップینگモールに向かった。

朝九時、今日はせっかくの休日だというのに俺は出かける準備をしていた。

普段なら家でゆっくり過ごしているが、今日は一日予定が入っている。

「ニャ〜」

ブランが鳴きながら近づいてきて、足に体を擦り付けてきた。

「おはよう、ブラン」

グレーの綺麗な毛並みを優しく撫で、喉を擦ればゴロゴロと音を立てて気持ちよさそうに目を瞑った。

この数日でだいぶ慣れてくれて、夜一緒に寝ようとベッドまで付いてくる。

まだ体が小さい子猫と寝ると潰してしまう可能性があるのですが、しっかりゲージの中に戻して別々で寝ている。

台所に行く俺の後ろをついて歩いてくるので、お腹が減っているんだと思いご飯を用意した。

子猫用のウェットフードをボウルに入れていつも置いている場所に持っていくと、勢いよく餌を食べ始めた。

体調などに問題がないことを確認して、自分自身の準備も始める。

今日の予定は、午前中に病院に行つてこの前の検査結果を聞き、午後からは実家に帰って憂鬱な顔合わせが始まる。

実は俺には婚約者がいて、今日初めて会うことになっている。

父の仲がいい友人が大きな会社の社長をしていて、この二人が手を取ってさらに会社を大きくしていこうと話をしたそうだ。

そこで次の代である俺と、向こうの社長の娘も親睦を深めようと婚約者(仮)で話が進められた。

俺は別に反対はしなくて、男手一つで俺を育ててくれた父への恩返しとして会社のためにもその話を受け入れた。

でも今は……。

ゆっくりと準備をしていると、病院に行く時間が迫って来たので、荷物を持って玄関に向かった。

ブランは寂しいのかいつも玄関まで付いてくる。

「ブラン、行ってくるな」

しゃがみこんでブランの頭を撫で、玄関の扉を開いて俺は家を出た。

いつもは大樹が車を出してくれるが、今日は一人で行くのでタクシーを使う。

大樹には今日検査結果を聞きに行くことを言っていないし、父には体調が悪くて病院に行ったことすら報告していない。

余計な心配をかけたくなって、周りには秘密にしていた。

「〇〇大学病院までお願いします」

タクシーに乗り込んで行き先を運転手に伝え、不安で心臓が早く動くのを感じながらタクシーに揺らされて徐々に病院に近づいていった。

大丈夫、きっとなにもないと自分に言い聞かせて心を落ち着かせる。

目を瞑りながらゆっくり呼吸をして座っていると、あっという間に病院に着いてしまい、タクシーから降りて自動ドアの先へ重い足を踏み入れた。

この前と同じように受付を済ませて待っていると、看護師さんに名前を呼ばれて診察室へ案内される。

「血液検査の結果ですが、気になる点がいくつかあったので、精密検査をしたほうがいいと思います」

「そう、ですか……」

その後先生から血液検査の詳しい結果と、これからする精密検査の説明をされ、時間的に今日できるので精密検査をしていくことになった。

ただ今回の検査も結果は数日後に分かるということで、また結果を聞きに来ることになる。

やはりどこか悪いのか……。

検査するために服を着替え、看護師さんに案内されながら様々な検査を受けた。

「お疲れさまでした」

すべての検査が終わった時には午後の二時になっており、三時からの顔合わせに向かうのにちょうどいい時間だった。

とりあえずめまいを抑える薬だけもらって帰ることに。

色んな検査をして少し疲れたが、正直これからの顔合わせのほうが疲れる。

みんなに気を使って、爽やかな笑顔を張り付けて。

またタクシーを捕まえ、運転手に住所を伝えて車が走り出した。

先ほどと違って緊張や不安はないものの、憂鬱な気持ちで胸の中が埋め尽くされている。

ああ、美月ちゃんに会いたいな……。

「ただいま」

実家に付き、大きな門を通って無駄に豪華な玄関の扉を開けると、靴が沢山置かれてあり、女性の靴も並べてあった。

「おかえり兄さん！」

「**凧**(ルビ・なぎ)……」

俺の義弟である凧が明るく大きい声で俺を出迎え、勢いよく近づいてきたかと思えば、急に胸倉を掴んで耳打ちをしてくる。

「おせえんだよくそが」

先ほどとは違ってかわって、低く可愛いさの欠片もない声で言ってきた。

凧と俺はかなり仲が悪く、俺が家を出て一人暮らしを始めたのも兄弟仲が理由の一つに含まれている。

俺がいなければ凧は一人愛され、凧が優秀な次期社長として良い立場に就けた。

凧は大学四年生だが、優秀であるがゆえにうちの会社に就職することは決まっています、少しづつ仕事にはまっています。

社員にも今のうちから気に入られようと猫を被っていて、凧を将来の社長にしたいという声もあがっていた。

凧の様子を見るからに相手が先に到着してしまっているようで、凧が素早く離れた後にリビングからお父さんが出てきて俺を出迎えてくれた。

「おかえり陽翔。もう三人とも来ているから少し早いけど始めているよ」

「俺がもう少し早く着けばよかったですね、すみません」

謝りながら靴を脱ぎ、父と凧の後ろについてリビングへと入っていった。

娘さんを真ん中にその両親がソファに座っていて、俺に気が付くと軽く会釈をして愛想のいい笑みを浮かべる。

「初めまして。黒瀬（ルビ・くろせ）陽翔です」

俺も自然な笑顔で好青年を演じながら挨拶をし、娘さんの前に座るよう促されて、俺を真ん中に向き合うようにして六人がソファに腰掛けた。

初めて見た印象は控えめそうな雰囲気、膝の上で手を重ねながらそわそわしている。

「黒瀬の息子はどちらも優秀に育ったな」

「そっちこそ美人な奥さんと娘に恵まれているじゃないか」

父親同士の会話を中心に、たまに相槌を打ったり愛想笑いをしたりしながら早く終われと心の中で思っていた。

凧も完璧な仮面を被っているいい息子を演じ、俺よりも気に入られようとしているのがわかる。

いっそのこと凧が気に入られて凧と結婚してほしい。

そうすれば俺は……、なんて叶いもしないことを考えていた。

「陽翔、せっかくだから二人でディナーを楽しんでくるといい。このホテルのレストランを予約しておいた」

「ありがとうございます」

やはり事は俺の思うようには進まず、逆の方向へ歯車は回りだす。

娘さんも顔を赤くしてお礼を言っており、その様子に益々気が重くなっていった。

夏休みということで、ショッピングモールの中は沢山の人で溢れかえっていた。

友達同士で遊びに来ている人、家族でショッピングを楽しんでいる人、カップルで楽しそうに話している人など様々だ。

これは迷子のお知らせ沢山ありそうだな……。

「端から端まで見てみて、良さそうなどこあったらそこ見ようか」

自分に合わなそうなところはスルー方式で広いショッピングセンターを見ていくことにして、色んな服屋さんやアクセサリーショップなどを見て回り始める。

普段あまり買い物に來ない私はウキウキしていて、それが日葵にも伝わったのか笑われてしまった。

「このワンピース美月に似合いそう！」

「絶対このセットアップ日葵に似合うって！」

お互いに自分に合う服よりも、相手に似合う服を見つけてしまうところがやっぱりいいなど感じる。

日葵に進められて気に入ったものは即買ってしまうし、日葵が見ていないうちにプレゼントとしてアクセサリーも購入した。

ホテルに行った時サプライズで渡して喜んでくれる日葵を想像して笑みがこぼれる。

「にやにやしてどうしたの？」

「いや？ 日葵と一緒にいるのやっぱり楽しいなって思ってる」

小さなサプライズがバレないように本音で誤魔化すと、「え、なに、好き」と抱きしめられた。

たくさん人がいるところで抱きしめられるのは同姓でもかなり恥ずかしくて、急いで日葵を引きはがした。

途中メンズフロアにも足を踏み入れ、ふと目に入ったお洒落な時計を見て、陽翔さんに似合いそうだなと無意識のうちに考えては、値段を見て我に返るという行動を繰り返していた。

日葵は真剣な表情でハンカチやネクタイなどを見つめていて、すごく悩んでいる表情をしていたので話を聞いてみると、誰かへのプレゼントを考えているようでした。

なぜかその誰かは教えてくれなかったけど、とても真剣だったので相談に乗りながら一緒に悩んで革のカードケースを選んで購入した。

そんな日葵が少し気になったが、今は特に追及はせず自然と違う階に移動した。

その後もかわいい服やアクセサリー類、メイク用品など様々見て回り、両手いっぱいしヨッパをさげてショッピングモールを後にした。

歩き疲れた私たちは、事前に行きたいと調べていたカフェに訪れ、どちらもアイスココアを頼んで一息ついていた。

このカフェはSNSで可愛い・映えると話題になっていて、店内には女性のお客さんが沢山来店していて、みんなお洒落なメニューを頼んでは写真を撮って楽しそうにしている。

このカフェで特に人気なのは、夏限定自家製ソースを使用したかき氷と、クリームの部分が立体になって動物が描かれているカプチーノで、今は夏ということもあってかき氷を頼んでいるお客さんが多い。

私が働いているカフェとお店の雰囲気はだいぶ違って、暗めで落ち着いた空間のバ

イト先のカフェと比べて、このカフェは白地の壁にライトブラウン色をした木の床となり明るめだ。

余裕のある四人テーブルの椅子に置いたショッピングバッグを見て、自然と笑みがこぼれる。

日葵が選んでくれた服とアクセサリに、店員さんと相談しながら選んだメイク用品。今日の買い物だけでいっきにオシャレ度が上がったような気がして、早くこれらを身にまとって陽翔さんに見てもらいたいと思っていた。

それに、こんなに物を買ったのは本当に久しぶりで、ストレスが溜まっていたわけではなけれど、なんだか気持ちが悪くスッキリとしている。

「さてと、美月お楽しみの恋バナしよっか」

目の前に座る日葵が頬杖をついて、フツと笑いながら話し始めた。

日葵に会ったら陽翔さんのことを話そうと決めていたので、テーブルに置いていた腕を膝の上へと移動させ、「実は……」とこれまでであった陽翔さんのことを話す。

陽翔さんが雨の日に来ること、何度か話して連絡先を交換したこと、自分から誘って一緒に帰ったこと、猫を拾ってくれたこと、陽翔さんが猫につけた名前の意味。

日葵は時折楽しそうにニヤニヤしながら話を聞いていて、話しているのが少し恥ずかしくなってきた。

全て話し終えた頃には私のアイスココアは全部無くなっていて、新しくリングジュースとチーズケーキを頼んだ。

「なるほどね。それで？ 美月は陽翔さんのこと好きなの？」

「気になってるって感じかな……」

完全に好きとは言い切れないし、もっと陽翔さんのことを知りたいと思っている。

それに六歳年上ということもあって、悪い人じゃないかとか、遊ばれてないかとか見極めをしているところだ。

いい人しか見えないからほぼ信じちゃってるけど……。

「美月が付き合いたいって思うなら私は応援するし、もし相談事があったらいつでも連絡して」

「日葵ありがとう」

頼りになる日葵にそう言われて、半べそをかいたようになりながら答えた。

「それよりも最大の関門は流星くんだよねえ」

「そうなんだよ……。今までお兄ちゃん通った人いないから今回こそはって思うんだけど……」

「そこは美月の頑張りど陽翔さんって人がどれだけ信頼を勝ち取るかだよね」

流星くんはなあど顎に手を当てながら考える日葵を見ながら、先ほどショッピングモールのメンズフロアで真剣に悩みながらプレゼントを買った日葵を思い出す。

もしかしたら日葵も何か悩みがあるんじゃない？

「ねえ日葵？ 日葵は好きな人いないの？」

そう聞くと日葵は考えるのをやめ、苦笑いしながら俯いた。

その様子から日葵にもそういう人がいるのだと察し、きつとプレゼントはその人に向けたものだと考えた。

「美月のこと驚かせようと思って言ってなかったんだけど、実は三か月前に彼氏ができたの」

そこから日葵はこの三か月の間にあったことを教えてくれた。

彼氏さんの名前は**柚流（ルビ・ゆずる）**くん。

二人の出会いはそのそれぞれの友達を通じて出会い、お互い惹かれ合うのに時間はかからなかったそうだ。

素直になれないツンデレな日葵と、心の芯から優しく素直な柚流くん。

今まで変な男に引っ掛かることが多かった日葵にとって、柚流くんは心のオアシスと言えるくらい心地が良くて、この人ならと思ひ惹かれたそう。

実は柚流くんも日葵に一目惚れをしていて、出会って二週間という速さで二人は付き合い合ふことに。

ツンツンな部分も受け入れて「可愛い」と言ってくれる柚流くんに日葵は更に惹かれていき、二人の仲は更に深まっていった。

しかし、三か月を迎える前あたりからお互いの勘違いなどですれ違いが起ることが多くなり、現在大喧嘩中なんだそう。

しかもこの喧嘩の原因はほぼ日葵。

お互い連絡は一切取っていない状態で、このままだと別れてしまうのが目に見える。

「柚流と仲直りしたいし、これからだっで一緒にいたい……。 そう思うのになかなか素直になれなくて謝れないんだよね……」

「謝った時に渡そうと思ってさっきプレゼント買ってたんだよね？」

日葵は俯いたまま頷き、箱で包装されたプレゼントを見つめていた。

普段素直になれない人間が、自分の想いを相手に伝えるのはかなり勇気があることで、その一歩を踏み出すのに時間がかかる。

本当は謝りたい、でも……と葛藤に悩まされ、そんな自分が嫌になって動けず、結局受け身になってしまうのだ。

日葵はそんな自分を変えようと今必死に動こうとしている。

私に出来ることは日葵の背中を押して、前に進ませてあげること。

「日葵の性格上、自分の気持ち伝えられないことが多いと思うの。 柚流くんからすると、想いを伝えてもらえないのは不安要素になると思うんだよね」

日葵は私の話を泣きそうな目をしながら真剣に聞いてくれている。

「今回謝ることと、日葵が柚流くんのことをどう思ってるかを伝えるのが大事だと思う。

難易度が高いのはわかるけど、ちゃんと自分の口から想いを伝えてあげないといつか柚流

くんは日葵から離れちゃうよ？」

自分が経験したわけじゃなくて想像からの言葉だけど、少しでも日葵の背中を押せたらと必死に言葉を考えて日葵に伝えた。

日葵は唇を噛み締め、拳にぎゅっと力を入れながら自分の中の葛藤と闘っているようで、あとは日葵次第だと思っただけで見守る。

「お待ちせいたしました、りんごジュースとチーズケーキでございます」

先ほど頼んだメニューが届き、店員のお姉さんにありがとうございますと言って受け取る。

先ほど陽翔さんのことを話した恥ずかしさで喉が渇き、それを潤すようにストローで冷たいりんごジュースを吸い込んだ。

ほのかに果肉を感じ、きつとこれも自家製なんだと考える。

チーズケーキを食べようとフォークを掴んだ時、日葵が顔を上げて鋭い目をしながら私を見ていた。

「美月、私ちゃんと謝るし想いも伝えるよ」

日葵が覚悟を決めたようで、きつと大丈夫だと思った私は「そっか」と笑って答えた。

「ほら、日葵も食べよ？」

フォークを日葵に渡し、少し先にチーズケーキを一口食べた。

全体的にしっとりとした口当たりで、フワツとチーズの香りが広がってとてもおいしい。日葵も一口サイズに切ってそれを口に運ぶと、パァー！という効果音が聞こえてくるほどわかりやすそうに表情を変え、とても美味しそうに食べていた。

日葵の気持ちが固まってくれてよかった……。

「そういえばこの前さあ……」

それぞれの生活で起こった話や、趣味の話などいつも通りの明るい会話が弾み、気づけばホテルにチェックインする時間が迫ってきていたので、カフェを出てロッカーに預けていたキャリーケースを取ってからホテルへ向かった。

「うわ！ 見た目からオシャレすぎる……。後でSNSに上げよう」

日葵はホテルの写真を撮り、SNSに上げるために色んな撮り方をしていた。

大きな建物が綺麗にライトアップがされていて、夜になればもっと光が映えるんだろうなと思いつつ見上げる。

ハワイに生えていそうな南国の木が並んでいて、まるで海外にでも来たかのよう。

でもほのかに和を感じる要素もあって、日本の人も海外の人も楽しめそうなのも良いホテルだ。

そしてこのホテルのすぐ近くに海があり、もう少しで夕日が水平線に入り込むところ。

あとで撮った写真を送ってと日葵にお願いして、写真撮りに夢中な日葵の荷物をみている。

「ねえ美月見て！ めちゃくちゃいい感じに撮れてる！」

テンションの高い日葵が写真を見せてきたので、綺麗に撮られた写真に目を向けた。

日葵はセンスがいいので、たくさんいいねをもらいそうな写真をばんばん撮る。

「すごい感じ！ 建物の中もすごいんだろなあ」

「確かに！ 早く中入ろっ！」

日葵は駆け出しそうなほどの勢いで歩き始め、「荷物忘れてる！」と叫んで呼び止めると、苦笑いしながら荷物を取りに来て今度はゆっくり歩いた。

テンションがあがると周りが見えなくなる癖は子供のころから治っていない。

一度猫を追いかけるのに夢中で、猫が飛び越えた大きな川を日葵もそのまま飛び越えようとしたものの、距離が足りずに川に落ちてしまったことがある。

そのくらい日葵はおてんば娘だ。

ホテルの中に入ってロビーにつくと、そこはまるでパーティー会場の様で、深紅色の絨毯と見上げるほど高い天井、室内なのに水が流れていて非日常を存分に味わえる空間になっている。

「すご……」

日葵も言葉を失って、自分の目でこの景色をまじまじと眺めていた。

呆気にとられている私たちにホテルの人が近付いて声をかけてくれて、フロントでチェックインを済ませてからまたロビーに戻ってこの空間を味わった。

「ここ日本だね？」

「多分……」

すっかり感覚がおかしくなってしまった私たちは、ありったけの語彙力をかき集めても小学生のような感想しか出なくなってしまった。

そろそろ部屋に行こうとエレベーターに乗り、記載された番号の部屋へと向かう。

このホテルの部屋はいくつか種類とレベルがあって、一番豪華な部屋にはリビング・ベッドルーム・和室・露天風呂などが備えられている。

私たちが泊まる部屋は一番豪華ではないものの、かなり贅沢した部屋になっており、洋室にツインベッドと室内にシャワーブース、広いテラスには二人が余裕で入れる露天風呂付きで、おまけにオーシャンビューを楽しむことが出来る。

「この瞬間が一番ドキドキする……」

部屋の前に付き、鍵を持った日葵がゴールドのドアノブに手をかけた。

サイトで写真は見たものの、実際見るとまた違って感じる。

「開けるよ……？」

「うん……！」

ドクドクと心臓の音が耳に聞こえてきそうなほど胸は高鳴っている。

ドアノブを下に押し勢いよく扉を開けると、オレンジの暖かな光が私たちを迎え入れてくれた。

玄関でスリッパに履き替え、ゆっくり奥に進んでいくとブラウンカラーの引き戸があり、いったんここに荷物を置いて今度は私が先頭で扉を開けることに。

息を飲み込んで「バツ！」と扉を開けると、おしゃれなリビングが目の前に広がった。

「すっごー！」

「え！ 豪華すぎる……！」

ダークブラウンに統一された家具がよりおしゃれに高級感を演出していて、ここに住みたいと思うほど。

そのリビングの奥には檜で作られた大きな露天風呂が設置されていて、そこから見える海は絶景そのものだ。

日葵と一緒にテラスまで出てきて、身を乗り出すようにして目の前に広がる海を眺めた。潮の香りに乗せた風と、ザーザーと心地よい波の音で海を感じて心が洗われる。

そしてリビングの左側には大きなベッドが二つ並んでいて、気持ちが落ち着く暖かな光に包まれている。

「美月どっちで寝たい?!」

興奮気味に日葵が尋ねてきたので、「どっちでもいいよ」と笑いながら言うと、「じゃあ私右側!」と叫んでベッドにダイブしていった。

私は玄関に置いていた荷物をリビングまで持ってきて、邪魔にならない場所でキャリーケースを広げる。

いつものホテルならキャリーケースで道がふさがってしまうが、ここは余裕で広げることが出来てそれだけでテンションが上がった。

「夜ごはんどこで食べようね?」

「今のうちに周辺調べておこうか」

このホテルでも食えることが出来るけど、あまり食にこだわらない私たちはここでの食費を遊ぶお金に回し、夜ごはんは近くの飲食店で済ませることにした。

荷物を整理し終わって、ソファに腰掛けて飲食店を探し始める。

「こっちはこないの?」

「私服でベッド上がるのなんか嫌なんだよね」

潔癖症ではないけれど、外の空気に触れた服でベッドに入るのはなんとなく嫌に感じる。

家でもそうだけど、パジャマじゃないとベッドにはあがらない。

「じゃあ私もそっちに行く」

日葵がベッドから降りて私の隣にぴったりとくっついて座る。

彼氏にもこのくらいの距離感で素直でいらればいいのにねえ……。

「あ、ことかどう? 新鮮な海鮮類が食べられるんだって!」

「美味しそう! サザエのつぼ焼きとか最高過ぎない?」

「美月ってたまにおじさんっぽいよね」

日葵がわざと引くようなそぶりを見せながら笑って言った。

確かにジャーキーとかサラミとか酒蒸しとか好きだけどそんなに気にしてはいない。

好きなのに周りを気にして食べないというのはとてももったいないと思うし、なにより食べたいと思う自分の気持ちに逆らえない。

「じゃあ美月も食べたがってるしここに行こうか」

日葵が見つ付けてくれたお店に行くことにし、しばらくのんびり過ごしてから部屋を出た。

先方の車でホテルに向かうことになり、俺と娘さんは二人で車に乗った。

シーンとした空気を変えなければとなんとか会話始める。

「父が急にすみませんね」

「い、いえ……！ 全然大丈夫です」

急に俺が話しかけたからなのか、顔を赤くして焦ったように笑いながら胸の前で手を大きく振っている。

好きな食べ物は何ですか？

趣味は何ですか？

休日は何をして過ごされているんですか？

などと当たり障りのない質問をしてなんとか会話を盛り上げた。

仮であっても相手は結婚するかもしれない女性。

お互いに今のうちから相手を知って、仲を深めていかなければいけない。

「陽翔さんってどんな人なのか全然わからなくて緊張していたんですけど、すごく優しい方で安心しました」

「そう、かな……」

多くの社員から怖がられている俺は、自分が優しい人間だとはあまり思っていないかった。

今は愛想よく偽りの自分を混ぜて話しているから優しく見えるのかもしれないが、普段の俺を知ればきつと見る目が変わる。

美月ちゃんも俺のことを優しいと思ってくれているのかな……？

あの子ならどんな俺でも受け入れてくれるんじゃないかと思っているけど、もし幻滅されて嫌われたら……と考えると絶対見られたくない。

「どうかされましたか……？」

ハッとして何でもないですと答える。

目の前に婚約者(仮)がいるのも関わらず、無意識に美月ちゃんのことを考えてしまっていた。

だめだな、今日は美月ちゃんのことを考えようにならないと。

お互いに質問をしたり軽い世間話をしたりしていると、ようやくホテルについたよう車がゆっくと停車した。

外装がとてもお洒落で、あらゆるところでライトが光っているうえに素晴らしいほどのオーシャンビュー。

もう少しで夕日が全て海の水平線に隠れようとしている。

外国を感じさせるこの景色と造りは女性にとっても人気がありそうだ。

すっかり娘さんをエスコートしながらホテルの中に入り、受付で名前を言うとホテルスタッフに案内されて最上階のレストランへ行くことになった。

広いロビーに敷かれた深い赤色の絨毯はふわふわと柔らかく、歩きやすいなんて考えながらホテルスタッフの後ろをついて行っている時だった。

「日葵はたくさん食べるのになんでそんなにスタイルが良いの？」

「いやいや美月こそ理想的なスタイルしてるから！」

聞きなれた声と名前が聞こえてそつと前を見る。

これから俺たちが乗るエレベーターのほうから二人の女性が歩いてきて、顔を伏せながらチラッと見てみるとその女性は間違いなく美月ちゃんだった。

どうしてここに……？

いや、それより今の状況を美月ちゃんに見られるのはまずい。

なんとか美月ちゃんから見えづらそうな方向に顔を向けて、俺に気づきませんようにと心の中で強く願った。

美月ちゃんの楽しそうな声が大きくなってくるにつれて俺の心臓もうるさくなる。

やがて前から聞こえてきていた声は隣を通って後ろへと移動した。

気づかれなかったとホッと胸をなでおろし、軽く息を吐く。

付き合っているわけではないのに、違う女性という場面を美月ちゃんに見られるのがまずい思ったり罪悪感を感じたりするのは、きっとそれほど想いを寄せてしまっているから。

今日は美月ちゃんのことを考えないようにしようって決めたばかりなのに……。

そんなことに今気づいてしまつて頭の中は美月ちゃんदैいっばいだつた。

そうか、俺は美月ちゃんのことを好きなんだ……。

自分の気持ちに驚いて思わず口元に手を寄せた。

そこからの記憶は正直あまりなく、何を食べてどんな会話をしたのか覚えていない。

気づけば自分の家に着いていて、ジャケットをソファに脱ぎ捨て、ベッドに寝転がりながら天井を仰いでいた。

今まで“好き”という感情をあまり持つてこなかった俺は、今の自分の気持ちに戸惑っていた。

いつからこの気持ちが生えていたのか、これからどうすべきなのか。

いくら好きだと思つても婚約者(仮)がいるうちは望む関係にはなれない。

でも今後一切の関りを絶つということは考えられなかった。

いつも気を張りつめて仕事をしている俺にとって、あのカフェと美月ちゃんは唯一の癒

して温かい場所。

これまでの自分の行動を振り返ってみると、だいぶ思わせぶりの態度を取ってしまったている。

美月ちゃんに期待を持たせてしまうのはよくないし、会うたびに想いが募れば苦しくなるのは自分だ。

「諦めるしかないのか……」

せめて結婚することが決まってしまうまでは美月ちゃんに会いたい。

自分のわがままだし良くないことと分かっているけど、この気持ちに嘘をつくことはできなかった。

いつか別れが来るとわかっているのなら、その覚悟を持ってこの恋を全うしよう。

「ごめんね、美月ちゃん……」

そう呟いてゆっくりと目を閉じ、そのまま深い眠りについた。

「美味しかったね〜！」

先ほど外から帰ってきて、今はリビングのソファでゆっくりしているところ。

採れたて新鮮な貝や魚などをその場で炭火焼きをして食べることができ、私も日葵もお腹がはち切れそうなくらいたくさん食べた。

その後は少しお腹を楽にするために二人で夜の砂浜に行き、「ロマンチックだね〜」なんて話しながらゆっくりと散歩を楽しんできた。

「お風呂入ろっか〜。一緒に露天風呂入る？」

日葵がニヤニヤしながら言ってきたので、上等だと言わんばかりに私もノリノリで「日葵と一緒に風呂楽しみだな〜」なんて答える。

二人で笑い合いながらお風呂の準備をして、シャワーブースで体を洗ってから綺麗な海が見える露天風呂へと向かった。

今日の月はほぼ満月に近い形をしていて、その青く輝く光を大きな水面に映している。

海に向こう側にある街が明るく光っており、活気に溢れていることがここからでも分かった。

心地よい波の音を聞きながら、月明かりに照らされて、気持ちのいい温泉に浸かっているのは私服のひと時で、言葉では言い表せない幸せを感じていた。

「やばい、心地良すぎてこのまま寝ちゃいそう……」

「わかる……」

日葵は浴槽のふちに両腕を置き、そこに顎を乗せて気持ちよさそうに目を瞑っている。放っておけば本当にそのうち寝てしまうだろう。

私も肩まで湯船に浸かりながら目を瞑り、周りの音に耳を傾けては寝そうになっていた。

すっかり温まって本当に寝てしまわないうちにお風呂から上がり、部屋に備え付けてあった浴衣を身にまとってソファで涼む。

スキンケアとヘアケアを怠らせずにいつも通り行い、一区切りついたところでようやくベッドに寝転がった。

「幸せすぎてどうにかなりそう」

日葵は隣のベッドに座り、美容ローラーで顔をマッサージしながらしみじみと言った。

確かに今日一日中ずっと幸せで、そんな幸せを大好きな人と共有できることが心の底から嬉しい。

「そうだね」

軽く笑いながらそつと呟くように答える。

明日行くテーマパークではお揃いのカチューシャをつけたり、いろんな場所でたくさん写真を撮ったりと楽しみなことが盛り沢山だ。

そのためにも早く起きてメイクも髪もバッチリ決めていかないと。

時刻は十時をまわっており、そろそろ寝ないと明日の朝起きられなくなってしまう。

ただでさえ私は楽しむことがあると寝付けないのに。

「あと二十分後に消灯です」

「え！ 早くない!？」

のんびりとしていた日葵は慌ただしく急ぎだし、ドタバタと部屋の中を走り回った。

そんな日葵を横目に、今日撮った写真を何枚か陽翔さんに送る。

カフェのチーズケーキ、海に沈みそうな夕陽、ホテルの部屋、夜ご飯に食べた色んな海鮮類。

なんとなく写真を送っているが、心の奥底では自分の良い思い出を陽翔さんにも感じてもらいたいという想いがあるのかもしれない。

陽翔さんと気持ちの共有がしたいと思い始めている私は、知らぬ間にこんなにも陽翔さんのことを考えて、もつと近づきたいという心の変化が表れていた。

次に会えるのはいつだろう……？

会えたらまたゆっくりお話がしたいな。

確証のない次を望み、勝手に心を弾ませている私を日葵が微笑みながら見ていることに気付かず、「はい寝ますよ〜」といったの間にか寝る準備が整った日葵によって部屋の電気が消され、私たちはそつと眠りについた。

ピピピピ、ピピピピ……。

ベッドの横に備え付けてある目覚まし時計の音で目が覚める。

時刻は午前五時三十分。

窓の外はほんのり明るく太陽が出てきたばかりで、いかにも『朝』という光景だった。

そして朝から波の音が聞こえてきて、贅沢な朝だと大きく伸びをしながら思う。

「日葵」

私は基本的に目覚めがよく、目覚ましの音に気付くしぱっと起きることが出来るが、対して日葵は起きるのが苦手で簡単には起きないし、起きてからもぼーっとしてなかなか動かない。

だから日葵が一人暮らしをするという話を聞いた時、そこが一番心配になった。

目覚ましの音に気付かないで早起きなんてできるのか、もしくは起きられるように何か対策をしているのか。

彼氏の柚流くんに電話などで起こしてもらっている可能性もある。

今はそんなことよりなんとかして日葵を起こさないとテーマパークの開園時間に間に合わなくなってしまう。

早く並んで早く入って少しでも長く遊びたいと言っていたのは日葵だ。

「日葵！ 起きて！」

大きく体を揺らすも、日葵はぐっすり眠っている。

今度は部屋の電気を一番明るくし、日葵の上に乗って思い切り体重をかけた。

布団の中でもぞもぞと動きながら「う〜ん……」と言って起きたかと思えばまた寝る体制に入る。

もう一押しで起きそうな感じがしたところで、私は妙案を思いつく。

フェイスタオルを水で濡らし、それを思いきり日葵の頬にくっつけた。

すると日葵はかなり驚いたようで、「えっ……？」と何が起こったのかわからない様子で少し湿った自分の頬を触っている。

「時間だから早く起きて！」

いまだに困惑している日葵の両腕をグイッと引っ張ってなんとか体を起こす。

やっと起きた日葵は大きく伸びをして、寝ぐせのついた髪を軽くなでながらぼーっとしていた。

流石にもう寝ることはないだろうと思った私は自分の準備に取り掛かり、服に着替えて顔を洗ってメイクを始める。

日葵はそのころにようやく動き出したが、まだ眠そうにしている目が半分しか開いていなかった。

朝ごはんはパーク内で食べるので、時間いっぱいここで準備していくことが出来る。

いつも以上にメイクに気合を入れ、髪はカチューシャに合うようにコテでフワフワに巻いた。

日葵がメイクをしているのと同進行で私が日葵の髪を巻く。

痛みを知らないほど綺麗な黒髪は艶やかに光り、思った通りの巻き髪に仕上がってくれた。

着ている服は違うけど、私たち二人を後ろから見ればまるで双子の様。

この姿で日葵と並んで歩いたり、映えるスポットで写真を撮ったりすると考えるとワクワク

ワクとドキドキが湧き上がってくる。

さすがの日葵も今は目が覚めていて、私はほとんど綺麗に仕上がっていく日葵の様子を隣で見ている。

こういう化粧品を使っているのか、ここにこの色を塗るのかなどメイクの知識を取り入れていく。

日葵はメイクをしながら効果ややり方などを教えてくれた。

「よし、完了!」

私も日葵も準備が終わり、名残惜しいけどこの部屋に別れを告げる。

絶対またここに泊まりに来ようと心に決め、忘れ物がないかしっかりと確認して部屋を出て行った。

その後フロントでチェックアウトを済ませ、ホテルの近くの駅に向かうため外へと出る。

外に出た瞬間風に乗って潮の香りがして、綺麗な空気と共に大きく吸い込んだ。

「日葵……!」

さあ行こうというときに少し離れたところから日葵を呼ぶ声が聞こえ、その方向を見る
と一人の男性が立っていた。

「柚流!? なんでもここに……」

日葵を呼んだのは日葵の彼氏である柚流くん。

喧嘩中で連絡は取ってないはずなのにどうしてここに来ているのだろう……?

「日葵の SNS 見ていっしょにしていることが分かって……。色々考えたんだけど、やっぱりこの

ままの状況が続いて自然消滅とか嫌で……」

柚流くんは日葵に会うために、日葵と仲直りをするためにわざわざここまで来たのだ。

日葵は急な柚流くんの登場に戸惑っていて、胸元に手を当ててぎゅっと握っている。

「日葵……」

昨日カフェでちゃんと謝って自分の想いも伝えると強く心に決めていたので、きつと大丈夫。

日葵は不安そうに私のことを見てから、柚流くんと向き合うために歩き出した。

日葵、頑張れ……。

「柚流、ごめん……!」

深く頭を下げてはつきりと謝る日葵に、柚流くんは驚いていて、おどおどしながら頭を上げるように日葵の肩に触れる。

「本当はずっと謝らなきゃって思ってたんだけど、私にとって素直になることが難しくって、いつか柚流から仲直りしてくれるって逃げてた」

涙声になりながらもしっかりと自分の想いを伝える日葵。

柚流くんはそんな日葵をしっかりと見て、真剣にその想いを受け止めていた。

「私にとって柚流は凄く大切な存在でこれからも一緒にいたいって思ってるし、柚流以外の人なんて考えられない。だから、仲直りがしたいです……」

話し終えた日葵の様子を見て、柚流くんは「はあ……」とため息をついた。

「やっと日葵の気持ちが開けた」

柚流くんは優しく笑いながらそう言い、日葵は驚いたように顔を上げた。

「日葵は気持ちを話すことが苦手だって知ってたけど、俺のことをどう思っているのか聞けないのは不安で、今回の喧嘩は俺からは何も言わないようにしようって思ってたんだけど……」

結局我慢できなくてここまで来ちゃった、と柚流くんは照れながら笑った。

日葵はその言葉を聞いてまた下を向き、肩を震わせて泣いているようで、また柚流くんがおろおろとし始める。

日葵は勢いよく柚流くんに抱き着いて泣き、抱き着かれた柚流くんは優しく日葵の頭を撫でた。

その光景を見て改めてこの二人はお似合いだなと思い、財布に入れていたパークのチケットをそっと取り出す。

「日葵、ちゃんと仲直り出来て良かったね……!」

幸せムードに包まれる二人にゆっくりと近づいて声をかけると、涙で顔を濡らした日葵が今度は私に抱き着いてきた。

よしよしと私も頭を撫でて日葵をなだめると柚流くんが目が合い、お互い困ったように笑いあった。

「日葵、あれ渡したら?」

仲直りしたときに渡そうと思ってショッピングモールのメンズフロアで買った革のカードケース。

あ、と思い出したように日葵は声を上げ、いそいそとカバンの中からプレゼント包装されたカードケースを取り出した

「これ、仲直りした時に渡そうと思ってただけ……。 すっかり忘れちゃってた」

両手で箱を持ち、控えめに差し出す日葵。

柚流くんはそんな日葵の表情とプレゼントを交互に見つめ、ゆっくりと手を伸ばしてプレゼントを受け取った。

「開けてもいい……?」

日葵は柚流くんの目を見てうんと頷き、少し照れ臭そうに微笑んでいる。

シュルッと紺色のリボンをはどき、高級感漂う黒色の箱をゆっくりと開けると日葵が柚流くんの事を想って選んだ革のカードケースが入っており、柚流くんはそっと手に取ってまじまじと見つめた。

誰も話さない時間が流れて、ほのかな波の音とささやかな風が体を包む。

私はそっと二人から視線を外して、少しだけ揺れている小さな赤い花に目を向けていた。

小さい体で目一杯栄養と太陽の光を取り込み、美しい花を咲かせて人々の生活に彩を添えている。

花の力ってすごいんだなと思っていると、視界の端にいた柚流くんが突然動き、日葵をぎゅっと抱きしめていた。

「えっ!?! ちょ、柚流どうしたの!?!」

戸惑う日葵を抱きしめ続ける柚流くんと、顔を赤くしながらあたふたしている日葵。

日葵は私に助けを求めるかのような視線を送ってくるが、私は幸せそうな二人を見て笑うだけ。

一分ほど経ってようやく柚流くんは日葵から離れ、肩に手を置きながら日葵の目線に合わせる。

「日葵……、大好き」

最高に穏やかで甘い微笑みを浮かべながら柚流くんは言った。

お菓子よりももっと甘いピンク色の空気が二人を包み込み、経験したことのない甘さに私は開いた口が塞がらない。

抱きしめられて顔を赤くしていた日葵は、そんなことを言われて居ても立っても居られなくなったのか、後ろを向いて顔を隠しながらしゃがんだ。

日葵の顔を見ようと柚流くんは動き回り、顔を隠している手を持ち上げて顔を覗き見ている。

本当に茹でたタコのように赤く染まっっていて、柚流くんは日葵を見て可愛いと連呼しており、日葵は照れを通り越して涙を流していた。

「も、日葵泣きすぎ」

笑いながら私も日葵に近づいてそっと頭を撫でる。

「だって柚流があ」

「はいはい」

駄々をこねる子供のように泣く日葵を軽くあしらいながら、先ほど取り出したパークのチケットを二人に差し出す。

二人は頭の上にハテナマークを浮かべたような顔をして私を見た。

「二人で行ってきて」

「え? 美月何言ってるの?」

「仲直りしてここでバイバイするの? それよりもこれから二人で一緒に行ってきた方が本当の仲直りになるし、なにより私が行ってきてほしいって思うの」

この二人にもっと幸せになってもらいたいと思った私は、パークのチケットを柚流くんに譲り、二人で行ってきてほしいとお願いした。

仲の良い日葵とは予定が合えばいつでも行けるし、お互い楽しむために満喫できる。

でも今の日葵と柚流くんはただ遊びに行くだけじゃなく、本当に仲直りをもっと仲を深めるために行ってほしい。

「でも、せっかく色々準備したのに……」

「そうだよ、前から楽しそうに計画してるみたいだったし、俺たちは大丈夫だから二人で行

ってきてよ」

それでも私は首を横に振り続けた。

何を言われても一緒に行くつもりはない。

こんなに幸せに溢れた二人をここで離れたくないという勝手な私のわがまま。

しかし二人も中々頷いてくれず、私は強引にチケットを日葵に渡してからすぐに歩き出した。

「美月！ 美月も頑張っつてね！」

大きな声でそう言ってくれた日葵に笑顔で手を振り、幸せそうな二人を見届けて私は一人帰っていった。

父親に言われた婚約者(仮)と食事の為行ったホテルで美月ちゃんと会い、そこで“好き”という気持ちを自覚してから一週間。

自分で色々考えたものの、考えれば考えるほど好きの気持ちが高まり、会いたいという感情が頭を支配していた。

雨が降らなくても会いに行きたいところだが、通り過ぎてもストーカーのようで気持ち悪いだろう。

ここ一週間で何日か通っているが、美月(ルビ・みづき)ちゃんと日にちは被らず会えていなかった。

今日もお店に行ったものの店員さんに美月ちゃんがないことを伝えられ、申し訳ないが食べずにお店を出てきてしまった。

傘をさして帰ろうと歩き始めた時、少し先に美月ちゃんが立っているのが見えて、幻じゃないか凝視しながら近づく。

「お久しぶりです」

優しい表情をしながら声をかけてくれて、そこで本物だと認識する。

あれほど会いたいと思っていたのに、いざ目の前に現れると少し戸惑ってしまうのは何故だろう。

「美月ちゃん久しぶりだね。これからバイト？」

できるだけ自然に、いつも通りに装って話を進めた。

「いえ、バイトではないんですけど……。なんとなく来ちゃいました」

美月ちゃんのなんとなくの気持ちで会うことができ、心の中で密かにありがとうと呟いた。

美月ちゃんからフワッと柔らかい花の香りが香り、何も考えず髪に顔を近づけて匂いを

嗅ぐ。

「すぐくいい匂いがする。何かつけてる？」

「あっ、はい！ この前初めて香水を買ってつけてみたんです……」

美月ちゃんは顔を赤くしながらそう言っていて、自分の行動を考えるとやばいことをしてしまったと思い、さりげなく美月ちゃんから離れた。

照れた表情を浮かべる美月ちゃんがとても可愛く、どうしていいかわからない。

好きになった、つまりは恋をしたということにまだまだ実感が湧かず、このことを周りの人に知られたらどう思われるだろう。

特に俺のことをよく思っていない社員。

この数か月で俺をよく思っていない社員たちが不思議なほど会社を辞めていった。

これで俺が社長になることでとやかく言われることはなくなると思うが、あまりにも不自然でおかしい。

そのことを考えながら仕事を進めていたが、忙しさをそれどころではない日々が続き、野放しになっていた。

ただこの件に関して俺にデメリットは今のところなく、調査をするより会社の利益を考えることに目を向けた方が良いのではと考え始めている。

社員に反対派があるくらい冷酷だと思われている俺が、今好きな女性を目の前に戸惑っているなんて知られたら……。

美月ちゃんは俺の唯一の弱みかもしれない。

「そういえばお泊まりは楽しめた？」

美月ちゃんが遊びながらもいろんな写真を送ってくれて、次はどんな写真がくるのか密かに待っていた。

沢山のショッピングバッグ、お洒落で美味しそうなスイーツ、海を眺めることができる素敵なホテル、そこから見える綺麗な夕日、目の前で焼かれている海鮮類。

どれも美月ちゃんにとっての思い出で、それを俺に共有してくれていることが最高に嬉しかった。

「はい！ もう最高に楽しかったです！ 友達と一緒にパークは行けなかったんですけど、私は大満足です！」

「一緒に行けなかった……？ 何かあったの？」

実は……と美月ちゃんが微笑みながら教えてくれた。

友達が彼氏と大喧嘩をしていたが、その彼氏がわざわざホテルまで謝りに来て、それを見た美月ちゃんは二人のためにパークのチケットを譲って一人帰ってきたそうだ。

初めて見た時からどこまでも優しくいい子で、何回か話してからもその印象は全く変わらない。

「本当は行きたかった？」

絶対楽しみにしていたはずだし、やりたいこととか友達と話していたに違いない。

美月ちゃんは「ん〜……」と口をきゅつと結びながら考え、

「本当は一緒に行きたかったですけど、友達が幸せになってくれたら私も幸せなのでいいんです。それに仲が悪くならない限り一緒に行けますから！」

と無理した様子もなく明るい笑顔で答えた。

きつとこれは心の底からの言葉で、自分の幸せより他人の幸せを願う子なんだと思う。

それがわかると余計に美月ちゃんが喜んでくれることを俺がしてあげたくなくなった。

「美月ちゃん、これから時間大丈夫？ もしよかったらご飯食べに行かない？」

たった今思いついたのが、美味しいご飯をご馳走してあげること。

それに折角久しぶりに会ったのだから、もつと一緒にいたいしいろんな話をしたい。

「え、いいんですか？ 是非行きたいです！」

思っていたよりもすぐく乗り気で、すぐにスマホで連絡を入れているようだった。

断られなくてよかった……。

行くことが決まると、俺もすぐに大樹に迎えの電話を入れる。

「大樹（ルビ・ひろき）、あのカフェに今すぐ迎えに来てくれ。 ああ、あの店まで頼む」

俺が行きつけの店で、しっかり個室だから周りを気にせずに済む。

値段は少し高めだが、味は最高だし、店自体が隠れ家のようになっているので芸能人も通

っていて、たまに通路を歩いているときにすれ違うことがある。

人使いが荒いと言われたが、店まで安全に行くには信頼できる大樹の運転が一番だ。

プライベート、しかも大樹が反対している美月ちゃんと一緒にご飯に行くために呼んで

申し訳ないが、今は自分の心に正直に動きたい。

「あの、お迎えさんがいるんですか？ もしかして陽翔さんってお金持ち……？」

そうか、普通は迎えとか呼ばないのか。

思っていないかったミスに焦るも、運転が上手い友達だと濁してなんとかその場を逃れた。

そういえば前に街中で体調が悪くなって美月ちゃんに助けてもらったとき大樹の顔を見

られている。

もしも美月ちゃんが覚えているようだったら何とか濁して誤魔化すしかない。

社長であるということがバレてもそこまで大きな支障はないが、社長としてではなく普

通の一人の男性として見てほしい。

「そういえばブランはどうしてますか？」

俺のミスで少し変な空気が流れていたが、美月ちゃんが新しい話題を振ってくれたおかげで空気が変わった。

「元気だし順調に育ってるよ。 ただ家にいる時間が少ないから寂しい想いをさせている

かもしれない」

拾ってきた頃と比べるとサイズも大きくなったし、毛並みもとても綺麗になった。

できるだけストレスを感じないようにさせたいが、仕事で家にいない時間が多くてどう

しようか悩んでいた。

寂しいのか、俺が家に帰るとたくさん鳴きながらすり寄ってくる。

たくさん構っても足りないようで、朝家を出る時も準備を邪魔してきて少し大変だ。

「あ、そうなんです…。 仕事で家にいられないのはしょうがないですけど、ブランの気持ちを考えて何かしてあげたいですね…。」

美月ちゃんはうーんと顎に手を置きながら考えてくれている。

今まで動物を飼ったことがない俺はどうしたらいいかわからないことだらけで、もともとある足りない知識と動物病院で聞いたことをもとに世話をしてきた。

ただそれだけでは対処できないこともあり、悩むことがしばしば。

「あ、これとかどうですか？」

美月ちゃんが首を軽く傾けながらスマホの画面を見せてきた。

そこには猫の性格に合ったおもちゃをや、飼い主の匂いがするものを置いておくなどのことが書いてあった。

ネットで調べて情報を得るというのを完全に忘れていて、ネットを使えば大抵のことは人に聞かなくても自分でわかって解決することが出来る。

「わざわざありがとう。 明日から早速やってみよう」

そんなことを話していると時間はあっという間に過ぎ、大樹から近くについたと連絡が入った。

言われた場所に向かうと、運転席から降りてスマホを見ている大樹がいた。

「大樹、悪いな」

「全くだ。 今後こういうことで俺を使わないでくれ」

眉間に皺を寄せながら言っていて、本当に嫌そうにしている。

この様子じゃ二回目はなさそうだな。

「ほら、早く行くぞ」

大樹がいつものように後部座席の扉を開け、車に乗るよう促す。

その光景に美月ちゃんは驚きながらも、「失礼します」と小さな声で呟いて、傘を窄めながらそっと車に乗った。

そんな美月ちゃんを密かに可愛いと思いつつ俺も隣に乗り込み、大樹の運転でゆっくりと車は進みます。

今のところ大樹のことは覚えていなさそうでした。

いつもこの時間なら仕事帰りに大樹の運転で家に帰っていて、疲れたと思いつつ何も考えずぼーっと車に乗っているだけだが、今日は隣に美月ちゃんがいるだけに疲れをあまり感じていないし、美月ちゃんを見ながら街の風景も目に入ってくる。

「緊張してる？」

「はい……。 ずっとドキドキしっぱなしです…。」

両手を握りながら太ももの上に置いて、背筋をピンとしているところから相当緊張していることがわかる。

好きな子はなにをしても可愛いと感じるもので、こうして目の前で緊張している美月ちゃんが可愛くてしょうがない。

「緊張しないでっというとな難しいかもしれないけど、リラックスして全然大丈夫だからね」

「はい、ありがとうございます……」

あ、これはリラックスできそうにないな。

まあでもお店についてから落ち着いてくれたらそれでいい。

大樹がいるということ車で車の中ではあまり話さずに目的地のお店までたどり着いた。

美月ちゃんよりも先に降りて、雨に濡れないように傘をさしてから扉を開ける。

「陽翔、帰りはどうするんだ？」

「悪いけど帰りもお願いしていいか？」

「ああ、分かった。早めに連絡くれよ」

そこで大樹とは別れ、緊張する美月ちゃんをエスコートしながらお店の中に入って行く。

お店の扉を開けて美月ちゃんを通し、店員さんに案内された席に着いたら、美月ちゃんの椅子を引いて座らせる。

「すごいですね……」

「ん？ 何が??」

美月ちゃんを座らせて、自分も席に座った時に美月ちゃんにそう言われた。

美月ちゃんは周りを見渡しながらそわそわしている。

「まずお店がすごそうなオーラ出てますし、陽翔さんの振る舞い方もすごくてどうしたらいいかわからないです……」

「ここはよく来る店だから俺に任せてくれれば大丈夫だよ。それに完全個室だから周りを気にせずゆっくりしてほしいな」

高めの店だがコース料理ではなく、居酒屋やファミリーレストランのように食べたいものをオーダーしていく。

ちよつと贅沢したいけどコース料理は苦手だという人にはお勧めだ。

好きなものを頼むようにと美月ちゃんにメニュー表を渡すと、「美味しそう……」と声を漏らしながらメニューの写真にくぎ付けになっているようだった。

このお店は少し特殊で、値段が書いているメニュー表と書いてないメニュー表が用意されており、予約の時にどちらのメニュー表を置くか決めることが出来る。

今美月ちゃんが持っているメニュー表には値段は書いておらず、俺が持っているメニュー表には書いてある。

相手が値段を気にせず好きなものを食べられるように配慮されているのだ。

もちろんどちらのメニュー表にも値段が書いてあることも可能だ。

「あの、値段が書いてないんですか……」

「うん、気にしないで」

「えっ」

「今日は御馳走させてよ。俺から誘ったし美月ちゃんに美味しいもの食べてほしいんだ」
そう言っても美月ちゃんは「でも……」と申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「美月ちゃんの時間をもらってるんだから俺に格好つけさせて」

「……すみません、ご馳走になります」

目を閉じながらペコッと頭をさげても尚、まだ申し訳なさそうな表情でこちらを見ていた。

困るくらい本当にいい子で、その優しさと健気さに参りそうになる。

俺もメニューを見て食べたいものを決め、美月ちゃんのもと一緒にメニューを頼んで、先に来たドリンクを飲みながら最近の話などを始めた。

今夏休み中だという美月ちゃんは、大学から出された課題を順調に進めながら、久々の長期休みを謳歌しているそう。

「友達と海とか行くの？」

「海は行かないですけど、プールに行ってきますす！」

「楽しそうでいいね。変な男に捕まらないように気を付けるんだよ？」

美月ちゃんは綺麗な顔をしているからきつと声をかけられる。

たまにいる変な輩にちよつかいを出されなかつても心配だ。

美月ちゃんと話しているとあつという間に時間は過ぎ、頼んでいた料理が運ばれてきた。

店員さんが料理名を言って机に置いたときに、美月ちゃんはすっかり「ありがとうございませ」と言っていて、こういうところがいいなと思いつながら運ばれてきた料理と美月ちゃんを見る。

さっきまでの緊張はどこへ行ったのか、料理を見た途端目をキラキラさせて顔がパツと明るくなった。

その様子に思わずフツと笑ってしまい、それに気づいた美月ちゃんはなぜ俺が笑っているのか分からないようで、困り眉になりながら首を傾げている。

「出来立てなんだから早く食べなよ」

「えっ？ でも、え……？」

あからさまに困惑しながらも箸を手取る美月ちゃんが面白くて、さらに笑ってしまう。何でもないと行って俺も頼んだ料理を食べ始め、今まで以上に濃い会話を存分に楽しんだ。

お店を出ると一日中降っていた雨は止んでいて、街ゆく人は畳んだ傘を片手に颯爽と歩いている。

普段来ることがない街なので、緊張とワクワクが入り混じった気持ちになりながら陽翔さんの隣を歩いていた。

電車で帰ると言った私を「駅まで送る」と、さぞ当たり前のように言っていて今送ってもらっている。

この街が似合う陽翔さんは素敵な大人の男性。

普通の大学生の私が、そんな人と今隣り合わせで歩いているのが不思議だ。

「陽翔さん、ご馳走様でした。すっごく美味しかったです……!!」

「美月ちゃんの口に合って良かったよ」

私の口に合うも何も、こんなに美味しいものを私が食べていいのかという気分で、今まで食べた中で一番と言えるほど美味しい料理に私の頬はとろけてしまった。

楽しくて幸せな余韻に浸っている間に駅についてしまい、あっという間に別れの時間になってしまった。

しかもちょうど電車が来る時間で、今行けばすぐに乗って帰れる。

「今日は時間とってくれてありがとうございます」

「こちらこそありがとうございます！ とても楽しかったです！」

そうは言ったものの、まだ帰りたくないという気持ちが自分の足を引き止める。

「……どうしたの？」

「……一本見送ろうかなって」

忙しいことはわかっているが、せめてあと数分一緒にいさせて欲しい。

そんな私のわがままを陽翔さんはどう思うのか。

「はあ……」

陽翔さんはため息をつきながらその場にしゃがみ込んでしまった。

迷惑だったかもしれない、どうしようと焦る私を、陽翔さんは頬杖をつきながら見上げて一言。

「それはずるいよ」

少し頬を赤らめながら困ったように笑う陽翔さんに胸がギュッと締め付けられ、私まで顔が熱くなってきた。

駅には沢山の人が歩いているはずなのに、周りの音も人の雑踏も何も感じられず、まるで私たちの周りにだけ見えない壁があるよう。

今の私には陽翔さんしか見えないし、陽翔さんの声しか聞こえない。

その後陽翔さんも立ち上がって数分話していたが、嬉しさと照れでまともな話が出来なかった。

その時の感情でいっぱいいっぱい、話したことがどこかに飛んでいる。

そんな数分は言葉の通り秒で過ぎていき、もう次の電車がくる時間になってしまった。

「じゃあそろそろ行きますね」

「うん、暗いから気を付けて帰ってね」

名残惜しい気持ちをぐっとこらえ、改札を通過して電車が来るホームへ向かった。

今日のあったことを思い出してはにやけそうになり、とにかく余韻に浸りながら電車に

乗って家までの道を歩いた。

思わずスキップしてしまいそうなくらい今日がすごく幸せで、今ならどんなに大変なことでも乗り越えられそう。

「ただいま」

家族にバレないように一回玄関前で深呼吸して落ち着き、いつも通りを装って家の中に入った。

そしてそのまま自室に入り、鞆を床に置いてから勢いよくベッドにダイブして、置いてある抱き枕をきつく抱きしめる。

心の底からあふれてくる幸せと好きの気持ちを発散させるように、そのままゴロゴロと転がっていた。

その時突然ガチャと扉が開き、ビックリしてそちらに目を向けるとお兄ちゃんが眉を顰めて立っていた。

「ずいぶん幸せそうだな」

「それは楽しかったから当たり前じゃん」

「男か？」

一番知られたくないお兄ちゃんにそう言われてドキッと心臓が飛び跳ね、すぐさま違うと反論した。

「いつもなら絶対私服でベッドに上がらないのにな」

お兄ちゃんに言われて気付いたが確かにそうだ。

いつもならお風呂に入ってパジャマに着替えないとベッドには上がらない。

今日は幸せのあまり何も考えず気持ちのままにベッドに上がってしまった。

どうしよう、もう言い訳が出来ない……。

「……何かあったらすぐに言えよ」

それだけ言ってお兄ちゃんは部屋から出て行った。

これまでのお兄ちゃんとはどこか違う気がして、どうしたんだろうと不思議に思う。

ただすぐに「まあいいか」と幸せの余韻がお兄ちゃんの変化に勝って、ベッドから降りてお風呂に入る準備をした。

今日は病院に検査結果を聞きに行く日。

今回もタクシーに乗って一人で病院へ向かっている。

以前よりも不安は増しており、手は冷たくなって喉が締め付けられているように苦しかった。

いつもと変わらない街並みなのに、俺の目には今の光景が違って見えていた。

笑顔で歩いている人が全員悩みのない幸せな人生を送っているように見え、自分はこん

なにも不安で悩んでいるのにと最低な考えをし始める。

ただそんな自分が嫌になり、重い気持ちを吐き出すようにため息を吐いたとき、スマホが震えて画面にメッセージが表示された。

「美月ちゃん……」

メッセージを送ってきたのは美月ちゃん、いつもと変わらない明るい言葉に加えて一枚の写真が送られてきた。

それはとても可愛らしい服を着た美月ちゃんの写真で、友達が綺麗に撮ってくれたと書いてある。

どんよりとした暗い気持ちが少し晴れたような気がして、心の中で「ありがとう」と呟いてゆっくりと目を閉じ、病院に着く時を待った。

「お客さん、着きましたよ」

運転手に言われて閉じていた目を開き、お金を払って病院の入り口前に立った。

不安と緊張で押しつぶされそうだが、ゆっくりと深呼吸をして少しでも気持ちを落ち着かせて病院の中へ足を踏み入れた。

受付をして待合室で少し待っていると名前を呼ばれ、心臓をバクバクさせながら診察室へ入る。

椅子に座るよう促されて「失礼します」と言って座ると医師と目が合った。

「この前行った精密検査の結果ですが、黒瀬さんは全身性エリテマトーデスという病気だと思われまます」

「え……」

俺が、病気……？

医師が告げた検査結果に何も考えられなくなった俺は、ただ浅い呼吸を繰り返すだけの人形のようになっている。

もしかしたら何かの病気かもしれないと不安になりながら来たが、告げられた病気は今まで聞いたことのないもので、原因不明の難病だと教えられ、どん底に突き落とされたこれらの絶望に襲われていた。

全身の様々な場所・臓器に多彩な症状を引き起こし、発熱・全身倦怠感などの炎症、関節・皮膚・腎臓・肺・中枢神経などの内臓の様々な症状が一度に、あるいは経過とともに起こるものらしい。

知らない病気なため、どのくらい辛いものなのかわからないが、話を聞くとかなりきつそうだ。

今のところ完治はしないらしく、長く付き合っていく必要がある。

いつの間にかそんな病気にかかっていたことが恐ろしく感じた。

「薬の処方と、定期的に病院で治療することになります」

病気のことを説明されても治療方針を聞いても、自分がそういう状態であることが信じられなかった。

体調に変化は出ているが、“自分は病気である”という実感が湧かない。

今すぐ駆け出して誰もいないところで叫びたいという気持ちをぐっと堪えて、なんとか先生の話の聞こえと心臓をバクバクさせながら耳を傾けた。

処方される薬と病院での定期的な治療で症状を抑えていくが、それでも突然病状が悪化する場合もある。

そうなった場合は長期入院をしなければならないそうだ。

病気が進行すればもちろん今以上に症状が辛くなるし、それがどのくらい苦しいものなのかわからない。

仕事ができなくなるかもしれないし、何よりこの状態で美月ちゃんに会うことが出来るのかどうか。

それに加えて薬の副作用もあるようで、覚悟して治療をしないと心が折れてしまいそう。

『仕事ってそう簡単に休めるものではないと思いますが、自分の身体を一番に考えてしっかり休んでくださいね』

ついこの前美月ちゃんに言われたばかりなのに。

ごめんね、美月ちゃん……。

その後俺は放心状態になりながら処方された薬を受け取って、気づいたら自分の家のベッドに仰向けで寝そべっていた。

「にゃ〜」

ブランがベッドに登ってきて俺の顔の近くで鳴いている。

俺は何も言わずにそっとブランを抱きしめ、沈んだ気持ちを忘れるかのようにそのまま眠りについた。

夏休みも後半に差し掛かった頃、課題を終わらせた私は毎日のようにバイトに力を入れていた。

今のうちからお金を貯めておきたい、というのは建前で、少しでも陽翔さんに会える機会を私から作りたかったというのが本音。

薫（ルビ・かおる）さんと 駆（ルビ・かける）さんが実家に帰省していて夏休みほとんど入れないということもあり、私のシフトを増やしてもらった。

「美月（ルビ・みづき）ちゃん、せっかく大学生の夏休みなのに遊ばなくていいの？」

「はい、そんなに友達と遊ぶタイプではないですし、みんな後半になると課題で焦るみたいなので」

お客さんがいない店内で、カウンター越しに実紀さんとそんなことを話していた。

夏休み明けみんな大丈夫かなと思いつながらふと窓の外を見たとき、ガラスに水滴がついていて、思わず「あ、雨だ……」と呟く。

雨が降っただけで陽翔（ルビ・はると）さんの事がよぎり、わかりやすく気分が上がる私はもはや重症。

そんな私を見た実紀さんはニヤニヤしながら「青春してるねえ」とどこか楽しそうに言うてきた。

そう言われるのは少し恥ずかしいけど、好きな人がいる今は毎日が幸せで楽しい。

「前なら雨が降ったら嫌そうにしていたのに、今はすごく嬉しそうにしている美月ちゃん可愛い！」

「ええ?! そんなに分かりやすいですか……?」

「誰が見てもまるわかり」

実紀（ルビ・みき）さんがパチッとウインクをして言ったので、余計恥ずかしさが増した。

そんなに分かりやすく陽翔さんにバレてないのかな……。

今日もしかしたら陽翔さんが来るかもしれないと内心ワクワクしながらも、それがバレないように普段通りに仕事をこなしていった。

「お疲れさまでした〜」

もう私は上がる時間になり、いつも陽翔さんが来る時間はとうに過ぎてているが、来る気配は全くなかった。

きつと今日は仕事が忙しくて来られなかったんだと思い、今日はこのまま帰ることにして裏で着替えて店を出る。

次はきつと会えると思いつながら来る日も来る日も楽しみにバイトをしていたが、陽翔さんはなかなか来ず、メールの返信もない。

期待していたぶん少し残念だが仕事ならしょうがない、そう思っても心の奥にある寂しいという気持ちはなかなか消えず、マイナスな感情が心に溜まっていくのを感じた。

ここまで何の音沙汰もないと段々心配になってきた私は思いきって電話をかけてみることに。

二十一時半という仕事が終わって落ち着いていそうな時間を選び、初めての電話ということもあって緊張しながら通話ボタンを押す。

五回ほどコールが鳴った後、「もしもし」と低すぎず高すぎない心地よい陽翔さんの声が聞こえた。

もしかしたら出てくれないかもしれない……ということも考えていたが、声を聞くことができると胸を撫で下ろす。

「陽翔さんお久しぶりです……! 最近お忙しそうにされているので少し心配になってかけてしまいました……!」

「美月ちゃん……、心配してくれてありがとね。カフェにも行けてなかったし、メールの返信もできなくてごめん」

「いえ、陽翔さんが大丈夫そうならいいんです。」

「最近仕事が一気に忙しくなってきた、仕事を疎かにしないように我慢してたんだ。でもようやく落ち着いてきて俺もちょうど連絡をしようと思ってたから嬉しかったよ」

迷惑ではなく嬉しかったと言われて、私はわかりやすく顔がにやけた。

彼女でもないのに心配で電話をかけるなんてお節介じゃないかと悩んでいたが、陽翔さんのその一言で安心する。

少しだけ声が暗いように聞こえたが、疲れがでていているんだろうとあまり気にしなかった。

「美月ちゃんは最近どう？ 課題は終わった？」

「はい！ 課題は終わって毎日のようにバイトしてます」

陽翔さんに話題を振られて少し笑いながらそう答えると、無理してない？と今度は逆に私が心配されてしまった。

私の方が心配してるのに……。

「大丈夫ですよ！ むしろ楽しいので充実してます」

陽翔さんに会えないのは寂しいけど、あの空間はいつも暖かく私を迎え入れてくれるし、小さな悩み事もくだらない話も気兼ねなくできる。

家族の次に家族と呼べるような場所と、素敵で大好きな人たちだ。

「それなら良かった。無理しすぎて体を壊さないようにね」

「それは陽翔さんのほうですよ！ 十分気を付けてくださいね！」
念を押すように強めに言うと、陽翔さんは「わかったよ」と笑いながら答える。

本当かなあと思いつながらこれ以上は何も言わなかった。

「あ、今週の日曜日空いてる？ もしよかったらどこかに出かけたいなって思ってる……え？」

これってもしかしてデートのお誘いだったりする……？

全く思っていなかった展開に思考が一時停止し、言葉が何も出なかった。

この前のご飯のお誘いもすごく嬉しかったのに、今度は一緒にお出かけできるなんて。

「い、行きます……！」

勢いよく誠心誠意込めて返答をすると、陽翔さんはくっくっつと喉を鳴らしながら笑っていた。

恥ずかしくなった私は「笑わないでください！」と必死に訴えかけるも、陽翔さんの笑いは止まらない。

全く笑いやまない陽翔さんに「もう切りますからね！」と言うと待つて待つてと止められる。

「詳しいことはメールで決めてもいい？」

「……分かりました」

少し笑いながら言う陽翔さんに私は少し不貞腐れながら答えた。

「そんなに不貞腐れないで」

喋り方で不貞腐れているのがばれ、それで私と陽翔さんの感性が少し通じ合っている感じがして嬉しくなる。

区切りがいいところで電話を切り、陽翔さんと会える未来を想像してニヤニヤを堪えながら眠った。

その後の私の夏休みは陽翔さんとの思い出いっぱいになった。

水族館に行ってコツメカワウソのぬいぐるみを買ってもらったり、向日葵が咲き誇る花畑に連れていってもらったり、一緒にプリクラを撮ったり、お洒落なカフェで待ち合わせをして散歩を楽しんだり、アート施設に行つて不思議な空間を体験したり、夜の海から街の景色を楽しんだり……。

陽翔さんのお陰で、人生で一番充実した最高の夏を過ごすことができた。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、明日からまた学校が始まるなんて信じられない。

でもこの夏の思い出を糧にまた勉強を頑張っていこうと決めた私は、気合を入れ直して明日からの学校生活に向けて準備を始めた。

ようやく美月ちゃんと仲が縮まってきたかと思えば、俺の病気が発覚したうえに山ほどの仕事。

会いたいのに会えないもどかしさに悩まされながら、少しでも早く仕事を終わらせて美月ちゃんと会う時間を取ろうと決め、カフェに行かずメールもせず、ただ必死に仕事を終わらせることだけ考えた。

全ては美月ちゃんと会う時間のために。

いつからかそう思いながら課されものをこなすようになっていた。

体調が悪いのを隠しながらなんとか仕事をし続けて落ち着いてきたその日の夜。

ベッドに横になりながら美月ちゃんにメールを送ろうとした時、着信音と共にスマホが震えた。

そこに表示されていたのは「美月」の二文字で、美月ちゃんからの突然の電話に驚いた俺は、起き上がって自分を落ち着かせてから応答ボタンを押した。

「もしもし」

「陽翔さんお久しぶりです……！ 最近お忙しそうにされているので少し心配になってかけてしまいました……」

久しぶりに話す美月ちゃんは変わらず明るく、俺の心配をして電話をかけてくれたように思わず顔がにやける。

どんよりと重い雲で覆われた俺の気持ちに、美月ちゃんの暖かい光りがさしたようで、今までの疲れと悩みがいつきに消えていくような感覚になった。

「美月ちゃんは最近どう？ 課題は終わった？」

「はい！ 課題は終わって毎日のようにバイトしてます」

そう話す美月ちゃんはとても生き生きとしていて、この子にはきつと明るい未来が待っているかと勝手に推測する。

毎日充実しているようで、明るく笑う美月ちゃんの顔を想像して心が温かくなった。

美月ちゃんの心配をすれば、俺の病気を知っているのかというほど体調を心配してくれるので、話を替えるためにずっと考えていたことを話す。

「あ、今週の日曜日空いてる？ もしよかったらどこかに出かけたいなって思ってる」

きつと行くと行ってくれるだろうと思っていたが、無言の時間が少し流れて一気に不安になる。

どうしたんだろう……とっていると、「い、行きます……！」と元気で勢いのある返事が返ってきて、呆気にとられて俺は思わず笑ってしまった。

この前ご飯に誘った時も勢いよく返事を返してくれたし、その反応の良さに毎回驚きと嬉しさを隠せない。

笑い続ける俺に、「笑わないでください！」と恥ずかしそうに言う美月ちゃんが可愛くてついからかいたくなってしまう。

そんな俺に怒ったのか「もう切りますからね！」と言ってきたので、待って待ってと止める。

「詳しいことはメールで決めてもいい？」

「……分かりました」

声色や言い方から不貞腐れているのがよく伝わる。

不貞腐れる美月ちゃんをなだめた後、電話を切って再びベッドに横になった。

ようやく美月ちゃんに会えるんだと嬉しくなり、楽しい一日にしてあげたいと思った俺はスマホで色々調べて気づいたらそのまま寝落ちしていた。

せめて会えなくなるくらい病状がひどくなる前に、たくさん美月ちゃんとの時間を過ごしたい。

そこから俺は美月ちゃんの残りの夏休みをもらうつもりで、遊びに行つてはまた次の予定を決めて、を繰り返しているところに出かけた。

いつの日を思い出しても俺の頭の中の美月ちゃんは常に笑っている。

水族館ではイルカショーを見ながら楽しそうな表情を浮かべ、花畑では向日葵に負けないくらい明るい笑顔を見せてくれ、俺にとって初めてで慣れないプリクラを撮り、お洒落なカフェが似合う彼女と散歩をし、アート施設でその景色の凄さに目をキラキラさせ、潮風に吹かれながら綺麗な夜景を見る。

いろんな表情を見せてくれた美月ちゃんを俺はすっかり頭に焼き付けた。

体調がすぐれない日が続いてきたが、美月ちゃんにバレることなく一日を過ごすことができたと思う。

俺の体はこれからどうなっていくのか。

それは誰にもわからないが、動けるうちは自分の思ったようにやりたい。
またそのうち仕事が忙しくなると思うと少し憂鬱だが、美月ちゃんと撮ったたくさんの
写真を眺めながら重い体を休めるために眠りについた。

「美月（ルビ・みづき）行くぞ〜」

「は〜い」

今日は大学もお兄ちゃんの仕事も奇跡的に休みだったので、久しぶりに二人でショッピングに行くことに。

お兄ちゃんが運転する車の助手席に乗り、置いてある私専用のピンクのうさぎクッションを膝の上に乗せた。

いつもそれを抱きしめながらお兄ちゃんの車に乗っている。

車の中でお互い何を買いたいのか、どのお店に行きたいのかを話しながら目的地を決めていて、毎回同じところにならないようにお兄ちゃんの色んな所に連れて行ってくれる。

今日は今まで行ったことがないオフィス街と呼ばれる街でショッピングすることに。

最近新しい商業施設が出来たらしく、そこを中心に街を回っていく。

お兄ちゃんの運転は急ブレーキや急発進がないし、カーブもゆっくり緩やかに曲がるので安全で乗りやすい。

私の好きな音楽を流してくれるし、温度調節も確認しながらやってくれて乗り心地は本当に最高だ。

商業施設から近い駐車場に車を止めて歩いてお店に向かうと、平日なのにオープンしたばかりということもあって、どこもかしこも人人人。

広くてすべてのお店を見て回ればヘトヘトになってしまうので、行きたいお店をピックアップしてそこだけに行く。

メイク用品のお店でずっとほしいと思っていた化粧下地とアイシャドウ、雑貨屋さんで部屋に置きたいディフューザーと机における女優ミラー、服屋さんでは可愛くてオシャレな秋服を六着ほど、アクセサリー屋さんではリングとカチューシャとネックレス。

これら全てをお兄ちゃんが買ってくれた。

いつも買わなくていいと断ってはいるものの、それを無視してカードで一瞬にして払ってしまう。

そして服などが入った大きい荷物はいつも持ってきてくれて、本当に男としてのレベルが高い。

「足痛くないか？」

「んー、少し疲れてきたかも。この近くにお洒落なカフェとかないかな？」

お兄ちゃんはスマホで近くにカフェがないか探し、お店のお写真や口コミを見ながらちようどいいカフェを見つけてくれた。

そこまでは徒歩十分くらいなので、このまま歩いて行くことに。

たくさんの人とすれ違いながら外に出ると正面にテレビカメラが構えており、私たちを見るや否やこちらに近づいてきた。

「すみません、インタビューいいですか？」

「は、はい……」

突然のことと思わずはいと答えてしまった。

「こちら〇〇テレビなのですが、街中のカップルにインタビューしておりまして、いっぱい荷物を持っていますが、何を買われたんですか？」

「えっと、服と化粧品と雑貨とアクセサリーを買いました！」

「なるほど、その荷物を彼氏さんが持っているんですね……！ イケメンです！」

ん？

彼氏???

どうやら私とお兄ちゃんをカップルだと思っっているらしく、そのままインタビューが続いていく。

「お二人は付き合っただのくらいなんですか？」

「いや、あの……」

兄妹だと伝えようとするが、圧が強くてはつきりと言い出せずにいた時、ずっと黙っていたお兄ちゃんが口を開いた。

「すみません、俺たち兄妹なんです」

「ええ！ そうなんですか!?? すごく美男美女の兄妹ですね……！ ちなみに……」
カップルではないと言ったのになぜかそのままインタビューが続き、もはやももとのコンセプトとずれ始めている。

「すみませんが行くところがあるので失礼します」

お兄ちゃんが私の肩をぐっと引き寄せ、どんどん質問してくるインタビュアーたちを押しつけてその場から離れた。

しばらく歩いて人通りも落ち着いてきたところでお兄ちゃんは立ち止まり、私の両肩に手を置きながら話す。

「ああいうのはちゃんと断れよ」

「うん、おにいちゃんありがとう」

もしお兄ちゃんがいなかったら、きっと私は聞かれたこと全て答えていた。

ようやくインタビューできそうな人を見つけて、勇気を出して声を掛けただろう相手のことを考えると断りづらいし、気分を下げるようなことはしたくないと思ってしまう。

「美月は他人に優しすぎるから心配なんだよ」

「私もう大学生だから大丈夫だと思うけど、いつも心配してくれてありがとう。それより早くカフェに行こうよ」

この話は終わりと話をそらしてカフェに向かおうとする。

お兄ちゃんもそうだなと言って、再びカフェに向かって歩き始めた。

このカフェは大きなビルの一階に位置していて、私たちのように私服の人もちらほらといれば、この辺りで働いているであろう人たちがスーツやオフィスカジュアルを身にまわっている。

カツカツと靴音を鳴らしながら忙しそうに歩いている人たちの中を、私とお兄ちゃんはゆっくり歩いて休日を満喫していた。

そのことに少し申し訳なさを感じて、心の中で「お仕事頑張ってください」と念じている。

この辺りで一番大きいであろうビルの近くに来た時、そのビルの前に黒塗りの車が止まり、スーツを着た人が運転席から降りて後部座席の扉を慣れた手つきで開けた。

その様子から、凄い人なんだろうなああと呑気に思いながらなんとなくその光景を見る。

後部座席から降りてきた人もピシッとスーツを着ていて、雰囲気からその人の威厳を感じる。

しかし少しずつそこに近付くにつれて、その二人に違和感を覚えた。

二十メートルほどの距離までくると顔が見えてきて、そこで私の予想はぐっと確信に近づく。

いつもの優しそうな空気はどこにもなく、真顔で冷たい様子の彼に私は戸惑った。

「美月？」

急に立ち止まった私にお兄ちゃんが声を掛けるも、聞こえた声はすぐどこかに流れて行き、目の前の彼にしか意識がいかなかった。

普段とあまりにも違い過ぎて、もしかしたらすぐく似ている人かもしれない、そうであってほしいと心の底から願いながら二人の様子を探っていると、彼がふとこちらを見る。

パチツと目が合った瞬間、心臓がばくばくとして呼吸が浅くなった。

やっぱり陽翔さんだ……。

私と目が合った陽翔さんは、驚いたのか大きく目を見開き一瞬いつもの様子に戻るが、お兄ちゃんが私を背中に隠したことで私たちの視線は外れた。

陽翔（ルビ・はると）さんは近くにいた大樹（ルビ・ひろき）さんに声を掛けられると、

また先程の冷たい表情に戻り、そのままビルの中に入っていく。

その横顔はどこか悲しそうに見えて、胸が締め付けられるように苦しくなった。

以前、もし陽翔さんがお金持ちとかすごい人でも気にしないと置いていたが、いざその陽翔さんを目にすると、あまりの別人さにどうしていいかわからない。

陽翔さんの後ろ姿を見送った後、涙が出そうになるのを必死に堪えてその場に立ち尽くす。

「帰るぞ」

お兄ちゃんが私の腕を強く引いて駐車場に向かい、私は下を向いたまま連れられ、車の中でどちらも話さないまま家に帰った。

すぐ自室に籠った私は、鞆を放り投げてベッドに倒れ、自然とあふれ出てくる涙を止めることなく泣き続けた。

どうして私はこんなに泣いているのだろう。

陽翔さんが冷たそうだったから？

私が知らない陽翔さんだったから？

色んな感情と色んな陽翔さんが頭の中でごちゃごちゃになって、どれが本当の気持ちでどれが本当の陽翔さんなのかわからなくなってしまった。

「うう……」

嗚咽をこらえながら涙がおさまるのを待ち、思いのまま泣き続けた。

どのくらい泣いていたのか分からないが、私は泣き疲れて寝てしまっていたようで、窓の外は真っ暗になり、枕もとにあるスマホの着信音で目が覚めた。

表示されていたのは陽翔さん。

ドキッとして体を起こし、両手でスマホを手取る。

出たい気持ちと出たくない気持ちがせめぎあい、どうしようどうしようとスマホとにらめっこしている間に着信は切れた。

どこかほっとした気持ちになりながら再びベッドに横になる。

きつとひどく目が腫れているんだらうなと冷たい自分の手を目に置いて、腫れが少しでも引くように冷やした。

しばらくして、コンコンとノックをしてすぐ部屋にお兄ちゃんが入ってきた。

「美月、昼間のあの男が好きなのか？」

「……うん。なに、やめておけって言うの？」

「ああ、そうだな。こんなに泣かすやつに大事な妹はやれない」

「ほっといてよ！ 私はお兄ちゃんの所有物じゃないしお節介も大概にして！」

思ってもいないことが口からポンポン飛び出し、言葉のナイフになってお兄ちゃんに刺さる。

「ああそうかよ。じゃあ好きにしろ！」

お兄ちゃんはボタン！と勢いよく扉を閉めて部屋を出て行ってしまった。

初めてお兄ちゃんと喧嘩をしてしまったことにショックを受けながら、先程自分が投げかけた言葉の最低さに後悔する。

どうしてあんなことを言ってしまったのか……。

悩みでいっぱいになってどうしたらいいかわからなくなった私は、**日葵**(ルビ・**ひまり**)に相談したいと思い、すぐに電話をかけた。

「もしもし」

「日葵、どうしよう」

鼻声で話す私に日葵はゆっくり話を聞いてくれて、どうしたらいいかを一緒に考えてくれた。

「美月と流星（ルビ・りゅうせい）くんの喧嘩の原因になった陽翔さんのことから解決した方がいいんじゃないかな？ 美月の気持ちの整理がしつかりついてから話したらいいと思うよ？」

「なるほど……。日葵に言われた通りとりあえず気持ちの整理してみる」

困った時いつも一緒に悩んで答えを導いてくれて、もしそれがダメだったとしても次を考えてくれる。

日葵に相談すれば解決しないことはないんじゃないかというほどだ。

「それにしても美月も大変なことになったね」

「うん……。でも日葵もこの前のこと乗り越えたんだもん、私もちゃんと向き合って乗り越えなきゃ」

「それでこそ美月だね」

それから私は自分の気持ちと向き合うために陽翔さんとはしばらく会わないことを決め、バイトのシフトも減らした。

薫（ルビ・かおる）さんも 駆（ルビ・かける）さんも戻ってきたので丁度良かったと 篤志（ルビ・あつし）さんは言ってくれて、実紀（ルビ・みき）さんは私の元気がないことを指摘して励ましてくれたので、二人には感謝しかない。

陽翔さんからいくつか電話とメッセージがきたものの、全て無視した数日後には何も来なくなかった。

バイトのシフトと雨が被ることはなかったが、急に来るんじゃないかと思いつながらドキドキしていたが、陽翔さんは来なかった。

今日は新しく契約を結んだ会社との大事な会議の日。

うちの会社に来てもらっての会議になるので、こちらは遅れてはならない。

時刻は集合時間三十分前になっていたが、俺はまだ家を出られずにいた。

「はぁ、はぁ……」

いつも以上に体が辛く、なかなか治まらない苦しみに、ベッドに敷かれた白いシーツを握りながら耐えていた。

スマホには大樹からの着信が一時間も前から表示され続けていて、早く出なければという焦りも出始める。

何とか処方された薬を飲んでベッドに寄りかかり、落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせてゆっくりと深呼吸を繰り返して、薬の効果が出るのを待った。

薬の効果が出始めるのは最低でも十五分。

その時点でどんなに急いでも会議の集合時間に間に合わないことを悟った。

スーツを着て髪も整えたのにすっかり汗で乱れてしまい、これでは大樹に怪しまれてしまうと思った俺は、なんとかゆっくり立ち上がって洗面台の前に立つ。

青白い顔色で苦しそうに息をする俺の姿はまさに病人だった。

少しずつ弱っていく自分に恐怖を感じながら、近くに置いてあるタオルで汗を拭きとり、乱れた髪を違和感ないように直す。

そのうち薬が効いてきたのか少しずつ症状は治まっていき、息苦しさは消えていった。

大樹になんて言い訳をしようか考えながら、急いで身支度を済ませて家を出た。

マンションの目の前に大樹はいて、車から降りて電話をかけ続けている。

「悪い……！ 酷い腹痛に襲われてトイレから出れなくて……」

「一時間もか！？ いや、今はそんな事より急いで会社に向かうぞ！」

そう話しながら大樹が開けた後部座席に乗り込む。

焦りからイライラしている大樹に心の中で謝りながら、体をリラックスさせるために大樹が飛ばす車の中で背もたれに身体を預けて力を抜いた。

「何か変なモノでも食ったのか？ 一時間も下し続けるなんて災難だったな」

「ああ、死ぬかと思ったよ……」

嘘と真実を練り混ぜながら話し、遅れてしまったことを謝りながら大樹の機嫌を取った。

集合時間から遅れること二十分。

ようやく会社に着き、正面に車を止めていつものように大樹が後部座席の扉を開けてくれる。

普段の自分を消すように仕事モードに切り替え、車から降りてふと周りを見渡した。

視線の先で驚いた表情を浮かべる彼女がいて、わかりやすく動揺した俺はふっといつもの自分に戻ってしまう。

「美月ちゃん……」

小さな声で彼女の名前を呼んだ時、隣にいた男が美月ちゃんを後ろに隠して俺をきつく睨んだ。

誰だ、あの男は……。

「何してる陽翔。 先方を待たせているんだ、行くぞ」

「……ああ」

大樹に急かされてそのまま会社に歩き出し、俺のこの姿に戸惑う美月ちゃんと隣にいた男のことが気がかりになったまま、その日は何とか仕事をこなした。

夜八時ごろ、大樹に送られて家に帰ってきた俺はすぐ美月ちゃんに電話をかけた。

ずっと黙ってきた仕事について、そして俺の立場について正直に話そうと美月ちゃんが出てくれるのを待つ。

しかし聞こえてくるのは電話をかけるときの音だけで、「ただいま電話に出ることが出来ません」とアナウンスが流れて、ようやく電話を切った。

話すのなら直接会ってちゃんと説明をして、黙っていたことを謝りたい。

今度美月ちゃんに会いにカフェに行こうと決心しつつ、とりあえず美月ちゃんと連絡を取りたいと思い、メッセージと電話を何回かしたが返事はゼロ。

さらに翌日から急に仕事量が増えて、カフェに行くどころではなくなってしまい、一刻も早く美月ちゃんに会って謝りたいのに、この大量の仕事が終わらせないと会えないもどかしさにストレスを感じ始めた。

陽翔さんと会わず、連絡も一切取らなくなってから二週間。

大学に行ってたまにバイトをして、まるで陽翔さんと会う前の生活に戻ったよう。

以前の私は周りに恵まれて十分幸せだったのに、今の私は何か物足りなさや寂しさを感じていて、陽翔さんと出会ったことが自分の中で大きなことだったんだと知った。

物足りなさや寂しさは陽翔さんと過ごす時間で、陽翔さんがカフェに来たり、メッセージのやり取りをしたり、たまに一緒にお出かけをしたり。

そういったことが日常になっていくことに気付いた時には、陽翔さんに会いたいと思うようになっていた。

今日は四日ぶりのバイトがあり、ラストの七時まで働いて今は帰っている途中で、ガヤガヤと賑わう人混みの中を一人歩いている。

赤信号で止まった時、ずり落ちてきたリュックを背負いなおして青信号で再び歩き始める。

少し長めの横断歩道を渡り終わり、パッと顔を上げると正面からスーツを着た男性二人組が歩いてくるのに気付いた。

何となくあの二人なんじゃないかと思ひ、ちらつと顔を見ると全然違う人で安心した。

会いたいと思っているはずなのに、陽翔さんじゃないことに安心しているのはなぜなのか。

気持ち矛盾して勝手に自分で混乱していた。

モヤモヤした気持ちのままでは気持ち悪くて、急いで帰ってまた日葵に相談してみようと歩き出したとき、たくさん人が行き交う中で一人だけはつきりと姿が浮き出て見えた。

こんなに大勢の人ばかりも鮮やかな街も一瞬にしてぼやけて背景になり、その人だけをただ見つめる。

スーツ姿にしっかり整えられた髪、冷たそうに見えて本当は優しい彼。

その隣には「ただの運転が上手い友達」と呼ばれていたあの人も一緒にいる。

私に気づいてほしい、でも見つかりたくない。

いろんな想いがごちゃ混ぜになって私はその場に立ち尽くした。

少しずつ近づいてくる彼との距離に比例して、私の心臓はどんどん早くなっていく。気づかれる前にそっとこの場を離れるべきか、逃げずにちゃんと話して向き合うべきか、本心と決意が頭の中でグルグルしてどちらにも決まらない。

そうこうしているうちに距離はどんどん縮まっていき、遂に彼の視界に私が映ったように、彼も私と同じように立ち止まった。

久しぶりに見た彼は何だかやせたような気がする。

私に気づくや否やすぐにこちらに歩いてきて、びっくりした私は決意よりも本心が勝つてしまい、踵を返して早足で逃げだした。

人ごみのなかをなんとか上手くすり抜け、人通りの少ない所に辿り着く。

「はぁ、はぁ」

緊張と急いだことで息が上がり、落ち着かせようと一回立ち止まった。

「美月ちゃん！」

彼に名前を呼ばれてすぐに後ろから勢いよく抱きしめられ、まさかこうなると思っていなかった私は「えっ……？」という反応しかできなかった。

今まで上に近い距離感にドキドキを隠せない。

「お願いだから俺の事を避けないで欲しい」

声色から切なさ在必死さを感じ、胸がギュツと締め付けられるように苦しくなる。

人が少ないとはいえ街中で抱きしめられているのに、周りの事なんて気にならないくらい今に意識が向いていた。

会っていなかった時間を埋めるかのように、陽翔さんの抱きしめる腕に力が入る。

「陽翔さん、ずっと連絡を無視していてごめんさい……。自分の気持ちの整理をしたくて、陽翔さんとはばらく会ったり連絡を取ったりしないようにしていたんです……」

首元に置かれた陽翔さんの腕に両手で触れながら、私が何を思っていたのか話した。

すると陽翔さんは抱きしめていた腕を緩め、向かい合わせになるように私をゆっくり回転させる。

お互い何も話すことなく見つめ合い、目の前にいる彼の存在をただ感じるだけ。

「陽翔」

そんな時間を過ごしていた時、陽翔さんの名前を呼ぶ声が聞こえ、そちらを見ると大樹さんが不機嫌そうな表情で立っていた。

「ここじゃ人目に着くから場所を変えようか」

大樹さんのことは気にせず、そう優しく言ってくれた陽翔さんに安心感を覚え、頷いてついていくことにした。

「おい陽翔……！」

「大樹、会社まで送ってくれるか」

「は？ 何言ってるんだよ、嫌に決まってるだろ……！」

「なら上司命令だ。車を出してくれるな？」

「……っ、わかったよ」

大樹さんは車を取りにいくためにすぐにこの場から離れる。

部下に力強く指示を出す上司の陽翔さんがとてもかっこよくて、何かあった時守ってくれそうだと感じた。

普通なら上司に強く命令されるのは嫌だけど、陽翔さんがそれをやっても全く嫌な感じがしない。

「ごめん、怖がらせちゃった？」

「いいえ、むしろかっこよかったです……」

陽翔さんはきよんとした表情の後、少し照れながら「カッコよくないでしょ」と明るく笑った。

いつも通りの陽翔さんも、仕事モードな陽翔さんどちらも好き。

心配することがないくらい陽翔さんを受け入れてちゃんと会話できている。

「ちゃんと話すよ、俺のこと」

陽翔さんが話してくれると信じていた私は、やっと本当の陽翔さんを知れると思うと嬉しくなり、軽く笑いながら「はい」とゆっくり頷いた。

「あの日、ここで会ったね」

機嫌が悪い大樹に乗せられて会社前に着き、美月ちゃんと二人だけ降りて大樹は先に帰した。

会社に来るたびあの日のことを思い出し、胸を苦しませながら過ごすこと二週間。

あの時悲しませてしまった彼女が今は横にいる。

「行こうか」

今日は俺と大樹が最後に出てきたので、今会社には誰もいないはずだ。

カードキーをかざして自動改札のようなどころを通り、エレベーターに乗って社長室のある階まで一気に登っていく。

美月ちゃんはこの会社の大きさにかなり驚いているようで、さっきからずっときよろきよろしている。

目的の階にエレベーターが止まり、ひらくボタンを押して美月ちゃんを先に下ろした。

柔らかい絨毯が敷かれた廊下をゆっくり丁寧に歩く姿がなんとも可愛らしい。

「さ、入って入って」

「え、こっつて……」

突然社長室に案内されたことに驚く美月ちゃんの背中を押して中に入れると、想像通り「わあ……！」と感激の声を上げた。

この社長室からは最高に綺麗な夜景を見ることができ、いつかこの景色を美月ちゃんに

も見せてあげたかった。

絶対に喜んでくれると思っていたから。

「陽翔さんすごいです！ 限られた人しか見られない景色ですね……！」

「喜んでもらえたかな？」

「はい！ とても！」

満面の笑みで笑いかけてくれて、俺もたまらなく幸せになった。

窓に近づいて夜景を眺めている美月ちゃんの隣に並ぶ。

無数の建物の光が暗い夜を鮮やかに彩り、人間の技術と生活がこの大きな景色を作り上げている。

違う建物から見れば、このビルも夜景の一つになっているのだろう。

いつもはこの景色を見ても単純に綺麗だなと思わないが、美月ちゃんが隣にいと特別なものに成り代わる。

この景色を楽しむ美月ちゃんもまた、俺の目に映る綺麗な光景の一つだ。

「俺はね、この会社の時期社長なんだ」

俺の生い立ち、育てられた環境、会社に入ってから様々な出来事、会社での自分と周りからの目、社長になること。

病気の事を抜いてほとんどのことを話した。

「美月ちゃんに仕事のことを話さなかったのは、俺自身を見て欲しかったからっていうのと、仕事での俺を知って欲しくなかったから」

大きい会社の時期社長で、仕事中は冷たくて、社員の中には反発してくる人もいて。

社長になるという立場を知られたら、美月ちゃんが離れていくのではないかとずっと考えていた。

「不安なんだ、何もかも」

社員が離れていき、美月ちゃんまで離れていけば俺に残るものは何もない。

誰とも血の繋がりが無い俺は結局孤独だ。

「陽翔さんを独りにはさせません」

強い眼差しで俺を見て、決意するかのように言い放った美月ちゃんはどんな光よりも輝いて見えた。

月のように静かに美しく光り、そつと優しく見守ってくれると思っていたのに、今は太陽のように熱く言葉を伝えてくれて、温かく包み込んでくれる。

力強くも優しい魅力に吸い寄せられるように、俺は美月ちゃんを抱きしめた。

「俺、美月ちゃんだけには嫌われたくない」

美月ちゃんの肩に顔を埋め、すがるかのようにそう言葉にした。

そんな俺を美月ちゃんは優しく抱きしめ返してくれて、その温かさに胸が熱くなる。

俺のことは受け入れてくれる美月ちゃんにこそ婚約者がいることを話すべきだと思い、俺の気持ちと一緒に話した。

「実は、俺にはお義父さんに決められた婚約者がいる。前まではその人と結婚して、会社の社長になるんだって思っていたんだけど……。美月ちゃんに出会ってからその生き方に不満を感じるようになったんだ」

自分が望まない人と結婚して、このままずっと会社のために働いて、本当の幸せを知らなまま生きていくのは嫌だ。

好きな人と一緒にいるときに感じる幸せをずっと味わっていたい。

それを教えてくれた美月ちゃんと俺は生きていきたいといつかから思うようになっていた。

でも簡単に解決できる問題ではないということも分かっていて、どうすればいいのか悩む毎日。

他人のために生きるのか、自分のために生きるのか。

「その件に関して私はあまり言えませんが、陽翔さんの人生なので、陽翔さんが後悔しないように生きて欲しいです」

美月ちゃんがくれた言葉はもつともな回答だった。

自分の人生、後悔しないためには……。

私の肩に顔をうずめ、少し弱ったような言葉を口にする陽翔さんをそっと抱きしめ返し、大丈夫と伝えるように優しく背中を撫でた。

私が傍に居てあげたいという想いが加速し、陽翔さんにとって心休める場所になろうと決めた。

そんな時告げられた婚約者の存在。

少し気持ちが沈んでしまったが、私に出会ってから考えが変わったと聞いて嬉しくなった。

孤児院から引き取ってここまで育ててくれたお義父さんのために、婚約者と結婚をして会社の社長になるんだという陽翔さんの今までの生き方がある。

それを簡単に変えることは出来ないけど、陽翔さんの今の気持ちを考えると「その人と結婚したほうがいい」とも言えない。

それに好きな人が結婚してしまうのは嫌だという個人的なわがママが大きかった。

「その件に関して私はあまり言えませんが、陽翔さんの人生なので、陽翔さんが後悔しないように生きて欲しいです」

自分の人生をどう生きるかは自分次第。

どうしても変えられないことはあるかもしれないけど、その中でもどの選択肢をとるかによって大きく変わるかもしれない。

「少しでも辛いことがあったら頼ってくださいね。私はいつでも陽翔さんの味方です」

こういう時に伝えるべき正しい言葉は分からないけど、私は私なりに伝えたい気持ちを正直に伝える。

陽翔さんは決して独りではないことだけは分かってほしかった。

「ありがとう、美月ちゃん」

顔を上げた陽翔さんとお互い微笑み合い、そのわずかな時間がとても幸せに思えた。

「ところでさ、この前一緒にいた人って誰……？」

「お兄ちゃんです。仲が良くて良く一緒に買い物とか行くんですよ」

「お兄さんか、びつくりした……」

どうやら陽翔さんはお兄ちゃんの事を彼氏的な人だと思ってしまったらしく、ずっとモヤモヤしていたそうだ。

もし彼氏が居たらこうして陽翔さんと過ごすことは無かっただろう。

「仕事の事とか婚約者さんの事教えてくれてありがとうございました。正直陽翔さんのこと何も知らなかったのも、色々知れてよかったです」

今まで話さなってきたことだから、きっと陽翔さんも話すのに勇気が必要だったかもしれない。

「こちらこそありがとう。美月ちゃんに受け入れてもらえてよかったよ」

驚いた話はいくつかあったが、どれも陽翔さんに違いはないし否定する要素はどこにもない。

何となくまだ隠していることがあるんじゃないかと思う事があるが、人に言えない話は誰にでもあるものだからいつか陽翔さんが話してくれるのを待つことにした。

二週間前、もしこのまま無縁になってしまったらどうしようと悩んでいたことが信じられない。

こうしてまた陽翔さんと会って話せたことが幸せでしょうがなかった。

「これはまた仕事が忙しくなるなあ」

「どうのことですか……？」

「大樹は俺と美月ちゃんのことを良く思っていないみたいで、会うたび仕事を増やされるんだよね」

私と会っているせいで陽翔さんが大変な思いをしていることを知って、申し訳ない気持ちになってしまった。

でもそれと同時に、仕事を増やされることをわかっていても会いに来てくれる陽翔さんの想いを嬉しく感じる。

「無理しないでくださいね」

「うん、気を付けるね」

その言葉に少し心配を抱えつつも、今一緒にいられるこの時間を噛み締めるように、陽翔さんと話しながら夜景を楽しんだ。

「来月、ですか……?」

美月（ルビ・みづき）ちゃんとのことがあった一週間後、お義父さんに呼ばれて実家に帰ると、そこで話されたのは結婚時期についてだった。

俺がうただと悩んでいる間に話は進んでいき、相手の家も了承で来月入籍することに。このままでは本当に婚約者と結婚になってしまうと焦った俺は、どうにかしなければと考えたものの、仕事の時間になってしまい実家を出た。

想像していた通り大樹によって仕事を増やされ、頭の中はパンクしそうになっていた。終わらせなくてはいけない大量の仕事と結婚について。

結婚について一番考えたいし解決したいが、重要な仕事ばかり押し付けられて、考えたくても考えられない状況だ。

「くそっ……!」

誰にもぶつけられない思いに苛立つばかりで、自分の太ももを強く殴った。

ストレスと病気の影響で髪が抜けることも増えている。

仕事は忙しいし考えなければいけないことはたくさんあるし病気で体は辛いしで、今の俺はボロボロだ。

このままこの生活を続けていけば確実に俺の病気は悪化してくだろう。

大樹（ルビ・ひろき）には話したほうがいいのか、でも話したく無いと思っっている自分もいる。

これからどうしようか悩みながらタクシーで会社に戻り、机に置かれた大量の書類に目を通して仕事を始めた。

「社長から呼び出し、何て言われたんだ?」

「……来月に籍を入れるとのことだ」

その報告に心なしか嬉しそうにする大樹。

優秀ではあるが、きつと俺を使って出世したいと思っっているんだろう。

それは別に構わないが、ここまで邪魔されると俺も黙っていられなし、いつか美月ちゃんに危害を加えるんじゃないかと心配になる。

それだけは絶対させない。

「トイレに行ってくる」

処方された薬をこっそりスーツのポケットに忍び込ませ、隠れて飲むためにトイレに向かう。

途中自動販売機で水を買ひ、個室に入って一気に飲んだ。

トイレで何か口にするのはとても気が引けるが、誰にもバレないようにするにはこうす

るしかない。

ゴミもしっかり家で捨てていて、証拠が残らないよう徹底的に隠し通す。

俺が席に戻って数分後に大樹が戻ってきて、どうやらお客さんが来たようだが、すぐに帰って行ったそうだ。

「なあ陽翔（ルビ・はると）、お前は来月結婚して社長になるんだ。ちゃんとわかってるよな？」

「……」

何も言わない俺の肩を掴み、グツと引かれて向かい合う体制になる。

俺にどうしても譲かせたいのか、圧をかけるように強い眼差しで見つめてきた。

「美女と結婚できて、社長になって金持ちになれて、幸せだろ？ みんなが望むものをお前は手に入れることができる」

確かに子供の頃は美人な奥さんと結婚してお金持ちになって優雅な生活を送りたいと夢見るかもしれない。

でもその生活を俺は望んでいない。

俺が望むものは、自由になって心から好きな子と楽しく過ごす、それだけだ。

「大樹、俺は決めたよ」

どの選択が自分にとって後悔のない道になるのか。

数日後、社長に用があると大樹を連れて社長室を訪れた。

「失礼します」

扉をノックして中に入ると、社長は椅子に座って机の上にあるパソコンで仕事をしていました。

やっていることは社員となんら変わらないのに、纏う空気感が普通の人とは違う。

「珍しいな、陽翔から話があるなんて」

事前に話があると言って時間を取ってもらっていた。

パソコンから目を離して立ちあがり、俺たちに客席に座るよう目配せをする。

大樹には何も言わず連れてきたが、それは大樹にもちゃんと俺の話も聞いてもらうためだ。

目の前に座る社長の目をしっかりと見て、少し緊張しながらも話し出す。

「大事な話があります。……婚約を破棄していただきたいんです」

「なに……？」

穏やかな表情だった社長の眉間に皺ができ、一気に部屋の空気が緊張感に包まれた。

大樹は言葉にはしないものの、「何を言っているんだ」と言わんばかりのストロークを俺に送ってくる。

「馬鹿なことを言っているのも、親不孝だと思われるのも承知です。でも俺は……どうしても結婚することはできません」

社長はとても難しい顔をしながら、肘を膝の上に置いて前のめりになった。

「……それはなぜだ？」

「夏前から体調を崩すことが増え、一か月ほど前に病院で検査をした結果、全身性エリテマトーデスという難病にかかっていることがわかりました」

初めて告げられる俺の体の状態に社長も大樹も酷く驚いているようで、口を開けて信じられない表情をしている。

「あと……、社長になることも辞退させてください」

本当の自分の子供のように育てられてきて、成長するにつれて社長になることを約束されてきたようなもので、その通りに生きようと思っていた分断るのは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

しかし病気を抱えた俺がこれからどうなるかわからないし、婚約者にも会社にも迷惑をかけてしまう。

そんなことならもうどちらも手放すことを俺は決めた。

それに、俺は心のどこかで自由になりたいと思っていたかもしれない。

「……病状はどうなんだ？」

「体が痛んだり熱が出たり、髪が抜けたりと色々あります。たまに薬が効かないこともあるので、少しずつ仕事に支障が出始めています」

「そうか……。 どうして病気のことを俺や大樹にすぐ言わなかった」

本当は病気がわかってからすぐに言うべきだったのだろう。

自分の体調が悪いということを知られるのがなぜか昔から嫌で、ずっと自分で何とかしようとしてきた人生だった。

だから今回も自分で何とかできると思い隠してきたが、この病気はそう簡単にいくものではなかった。

「心配を掛けたくなかったからです」

心配をかける上に仕事ができないことで周りに迷惑もかけてしまおうし、社員に病気だと知られたら、それこそ何を言われるか分かったものじゃない。

結局俺は臆病なんだ。

「お前は昔からなんでも一人で抱え込むな。 変に大人びていて、言ったことは忠実に守って、俺に反抗してきたことなんてなかった。 実の父親ではないことを気にしての事だと思っていたが……」

社長、いや、父は昔を懐かしむかのように窓の外を見ながら話した。

子供の頃、父が「自分のなりたいたいように生きなさい」と言ってくれたことをふと思い出す。

思えば社長になることも婚約のことも強制されたわけではなく、そう提案されて俺が承諾していた。

「俺はただあなたに恩返しがしくて、あなたの求める人間になろうとしていました。 今回のことで裏切るような形になってしまい、とても申し訳なく思っています……。 でも、

俺はやつと譲れないものを見つけられたんです」

大切な美月ちゃんを悲しませるようなことはしたくないし、男としてしっかりけじめをつけたい。

俺にとつて一番大切な人だ。

「……分かった。結婚のことと社長になることは破棄することにしよう。その代わりに、しっかり休んで療養するんだぞ」

もしかしたらすぐ納得してもらえず、何度も話すことになるかもしれないと思っていたので、まさかの結果に驚く。

社長として、父として、俺の気持ちをしっかり汲み取ってくれたことに涙が出そうになった。

「……ありがとうございます、お父さん」

父は初めて呼ぶ「お父さん」という言葉に目を丸くさせ、嬉そうに照れ笑いをした後俺たちに背を向けたまま、もう行きなさいと言った。

深く一礼をしてから部屋を出て、ふうとため込んでいたものを吐き出すように息を吐いた。

「大樹悪いな、出世させてやれなくて。でもお前の実力なら絶対通じる」

「なっ……!! くそ、気づいてて傍に置いてたのかよ」

頭をガシガシと掻き、軽く舌打ちをした大樹はその場にしゃがみ込んだ。

「病氣のことを知らなかったとはいえ、どんどん仕事を押し付けて悪かったな……」

「ああ、もうやめてくれよ? それよりも俺は今すぐ行かなきゃいけないところがある」
今すぐ美月ちゃんのもとに駆け寄って、思い切り抱きしめて全部伝えたい。

美月ちゃんが俺の背中を押してくれたおかげで自由になれたし、自分の生きたい道が決まった。

とにかく今すぐ会いたくてたまらなかった。

急いで歩き出してエレベーター前にきた時、急に体が痛くなって立っていられなくなった俺は床に倒れ込んだ。

「……っ」

今までとは比べ物にならない痛みと、気持ち悪さに意識が飛びそうになる。

「陽翔!」

遅れてついでしてきた大樹が急いで駆け寄り、俺の体を支えてくれる。

痛い、苦しい、寒気が止まらない。

大樹が来たことで安心したのか、体の症状に耐えきれなくなった俺はそのまま意識を手放した。

「え……?」

「あいつの秘書ってやつがそう言ってたんだ。だからあの男のことは忘れろ」

突然部屋に入ってきたかと思うと、爆弾発言をして部屋を出て行ったお兄ちゃん。

陽翔さんと直接話すために強引に会いに行つたものの、結局会うことができず、代わりに大樹さんが出てきたようだ。

“陽翔さんが婚約者と結婚をする”

そう言われた私は頭の中が真っ白になり、スマホを床にドンと落としてしまった。

心のどこかで婚約者さんではなく、私を選んでくれるのではないかと期待していたぶん、衝撃的なことすぎて思考回路が追いつかなかった。

ここしばらく会えていないし、連絡もなかったのは仕事が忙しくなってしまったからだと思っていたけど、結婚についての準備を進めていたの……?

すぐに真実を自分で確かめたくて、落としたスマホを手にとつて陽翔さんに電話をかけるが、呼び出し音がずっと続き、「お掛けになった電話番号は……」とアナウンスが流れる。

その後何回かかけてみたものの、陽翔さんが出ることは一回もなかった。

もうここでできっぱり終わらせるつもりなんだ……。

そう思うと勝手に涙が流れ出て、ツーツと頬を伝つて足の上に落ちた。

陽翔さんが結婚する……。

もう私と陽翔さんが一緒にいることはできない。

あらゆる悲しみが込み上げてきて、滝のように出る涙を止めることができず、大きな声をあげて泣いてしまった。

「うわあああん……!」

陽翔さんが後悔しない道を選んで欲しいとは言ったものの、いざ現実を突き付けられると心が碎けるほど苦しくて悲しい。

私が一緒に居たかった、もつというんなどころに行きたかった、こんなことになるなら想いを伝えてしまえばよかった……。

考えれば考えるほど後悔が溢れ、陽翔さんへの想いが止まらない。

枕に顔を押し当てて、ぐちゃぐちゃになるくらい涙を流し続けた。

いつかの日のように気づいたらまた眠っていて、そのせいで目はブヨブヨに腫れている。今の自分の姿が酷く醜く感じ、涙が枯れるほど泣いた私は乾いた笑い声しか出なかった。陽翔さんが選んだ道を私が邪魔することはできない。

いつか気持ちが落ち着いたら、心から「おめでとうございます」と伝えよう。

その時まで陽翔さんとの関わりをすべて断とう、私もキツパリ諦められるようにしよう
と、思い出を閉じ込めるかのように震える指でゆっくりと陽翔さんの連絡先を削除した。

気を失ってからのくらいだったのか。

気がついたときには俺は病院のベッドで寝ており、怠さと熱っぽさで涙が出そうなほど体が辛い。

「陽翔……！」

聴き慣れた声が聞こえてゆっくり首を動かすと大樹が心配そうに俺を見ていて、すぐにナースコールを押した。

その後看護師と医者が来て、今の俺の状況を伝えられる。

俺は二日間眠り続けていて、その間に薬の投与が行われていたものなかなか効かず、ずっと熱が下がらない状態が続いている。

以前よりも病状は悪化していて、このまましばらく入院することになった。

医者が出て行ったあと病室は俺と大樹の二人だけになり、少しの間静寂に包まれる。

「大樹、これからは**凧（ルビ・なぎ）**につけよ」

「え……？」

熱に浮かされ、深く考えられない俺は思ったままに言葉を発した。

俺が社長になれないなら、きつと数年後に凧が社長になるだろう。

今の内から凧についていれば、大樹はそのまま出世出来る。

「その方がお前のためになるし、お前もそうしようか考えてるだろ？」

「……本当にいいんだな」

「ああ。ただ俺が身の回りの事を出来るようになるまでは秘書としていて欲しい」

「分かった、周りの事は俺に任せろ」

熱が下がったら療養しながら出来る範囲の仕事をこなそうと、大樹に準備とプランの世話をお願いして今日は帰ってもらった。

大樹が居なくなればとうとう俺には何も残らなくなる。

こんな体では美月ちゃんに会うことも出来ないし、弱った姿なんか見せたくない。

寒気に襲われて布団を首元まで上げ、痛む体を何とか動かして寝返りを打つ。

寝返りすらも苦しいなんて、いつのまに俺の身体はこんなに弱ってしまったのか。

情けなさや悔しさと熱のせいで涙が流れ、孤独を感じた俺は布団をギュッと強く握りしめた。

せっかく自由になったというのに、病気のせいでやりたいことが出来ない。

倒れなければ美月ちゃんに想いを伝えて、一緒に楽しく過ごせただけなのに……。

ベッドから見える青空には飛行機が飛んでいて、その後ろに綺麗な雲を作っている。

目を細めるほど明るい太陽の光が差し込み、その眩しさが嫌になった俺は頭まで布団をかぶり、太陽の光を避けた。

今の俺にこの光は苦しいだけ。

熱と薬の影響で強力な睡魔に襲われ、俺はまた気絶するように眠り始めた。

季節はすっかり冬らしくなり、赤や黄色で彩られていた木からは葉っぱが落ち切ろうとしていた。

体に当たる風は冷たく、凍えながら街を歩く日々。

少しでも寒さを凌ぐようと綺麗に巻いたマフラーに顔を埋め、早足で病院に向かっていた。というのも実は先日、お父さんが階段で転んで足を骨折してしまい、二週間ほど入院すること。

そのお見舞いと着替えを交換するために病院へ通っていた。

結構大きな病院なので、行くたびに少し緊張する。

四人部屋の窓際にいるお父さんは、日の光が気持ちいいのか膝の上で本を開き、眼鏡をかけたままうたた寝をしていた。

もう少し寝かせてあげようと思い、着替えの荷物だけ置いて病院内を軽く探索することにした。

病院内を軽く探索した後、購買に寄って行こうと一階に下りた時、見たことのある人が受付近くのソファに座っていた。

声をかけるのもかけられるのも怖く、気づかないふりをして通り過ぎようとした時だった。

「美月（ルビ・みづき）さん……？」

名前を呼ばれてぎこちなく振り向くと、間違いなく大樹（ルビ・ひろき）さんが私の名前を呼んでいた。

陽翔（ルビ・はると）さんとの関りを断ってから約二か月。

陽翔さんと私の関係を知っていて気まずさしか感じられない状況なのに、大樹さんは普通に話しかけてきた。

「お久しぶりですね。 お見舞いですか？」

「はい、父が入院していて……。 大樹さんはどうしてここに？」

大樹さんは何かを考えるような難しい顔をしていた。

「大樹さん……？」

「ああ、すみません。 私も知人のお見舞いですよ」

「そうなんです。 あの、陽翔さんは元気にしていますか……？ すみません、気になつてしまつて……」

「……美月さん、そのことで話があります」

大樹さんについて歩いて行くのと、そこには綺麗な屋上庭園があった。

暖かみのある木のベンチャ、綺麗に並んでいる低木と芝生、レンガで作られた花壇などが

あり、春や夏はもつと綺麗なんだろうなと想像を膨らませる。

病院にこんな場所があったなんて知らなかった……。

ベンチに座るよう言われて待っていると、大樹さんが近くにある自動販売機で暖かいココアを買って渡してくれた。

「陽翔の事なんだけど……、実は今この病院に入院しているんだ」

そこからの話は信じられない事ばかりだった。

以前陽翔さんと二人でご飯を食べた数日後、病院で全身性エリテマトーデスという難病と診断され、今はその病気が悪化して入院している。

陽翔さんの申し出によって婚約は破棄され、社長になるという話も無かったことに。

一か月ほど四十度くらいの高熱が続き、最近ようやく落ち着いてきたようで、入院しながら少しずつ仕事をしている、と。

「私が知らないところでそんなことが……」

私と出会い始めた時にはきつと病気が発症していて、もしかしたら一緒にいるときにも苦しんでいたかもしれない。

「陽翔はよく君の話をしていたよ。会う前とか会った後は分かりやすいように機嫌が良かった。何もかも捨てて美月さんを選んだのに、こんなことになるなんて……」

とつくに私は捨てられたと思っていたのに、実はその逆で私のために色々動いてくれていたなんて……。

「実は二人が出会う前に、街中で陽翔が体調を悪くしたことがあってね、その時君に助けってもらったんだ。思えばきつとあの時から病気にかかっていたんだろうな……」

街中で私が陽翔さんを助けた……？

そういえば初めて大樹さんと会った時、どこかで見たことがある気がすると思ったが、きつと街中で出会っていたからそう思ったんだ。

陽翔さんを助けた時の顔は覚えていないけど、確かに目の前を歩く具合が悪そうな男性に声をかけたのは覚えている。

まさかあの人が陽翔さんだったなんて……。

自分たちが意図しないところで出会ったことを知って、運命なんじゃないかと軽率に考えてしまう。

「俺は正直二人の事を良く思っていないくて、会う時間を無くそうと陽翔の仕事を増やしたり、君のお兄さんに勝手に話してしまったり。陽翔が社長になれば俺も一緒に出世できるって思っていたから……」

陽翔さんが言っていた通り、大樹さんは意図的に仕事を増やしていたようだが、陽翔さんは全てを分かった上で受け入れていた。

「あの、陽翔さんは何号室ですか……？」

部屋の前に着き、不安と緊張で扉を開けようとする手が震える。

今日は行かないという選択肢もあるが、これ以上逃げるようなことはしたくなかった。ふーっとゆっくり息を吐き、コンコンと扉を二回ノックした。

「はい」

久しぶりに聞いた陽翔さんのその一声で今までの思い出がぶわつと蘇り、緊張とは違うドキドキが鳴り始める。

勇気を出して引き戸の取っ手を両手で握りしめて扉を開けた。

手元を見ていた視線を上げると、見たことないくらい驚いた顔をした陽翔さんと目が合う。

以前よりも痩せていて、顔色もあまりよくないのがわかった。

本当に病気なんだ……と陽翔さんの姿を見て実感してしまう。

ベッドのすぐ横まで歩いていき、驚いたまま固まる陽翔さんにそつと笑顔で話しかけた。

「陽翔さん、お久しぶりです」

今なぜ目の前に美月ちゃんがいるのか理解が追いつかず、ただ美月ちゃんを見ることしかできなかった。

「突然すみません……。 たまたま大樹さんに会って話を聞いて、居ても立っても居られなくて……」

「……どこまで聞いた？」

「病名と今の状況を聞きました。 あと、婚約の事も……」

美月ちゃんと一緒に居たいがためにいくつもの決断をしてきたが、今回病状が悪化して入院したことで、こんなハンデを背負った俺が美月ちゃんの傍に居るのは迷惑すぎるし、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

きつと美月ちゃんは気にしないと云ってくれるだろうけど、俺自身がその想いに応えられないし甘えられない。

いつどんな症状が出るか分からないし、美月ちゃんに苦しんでいる姿を見せたくない。

一か月熱にやられて何もできなかったため、返信もしておらず、何も連絡をしないでこのまま離れて行こうと思っていた。

「そっか……。 ごめんね、何も言ってなくて」

「いえ……。 もう陽翔さんと会えないと思っていたので、また会えてよかったです」

素直に思ったことを言う美月ちゃんの言葉に、俺はすぐ嬉しくなってしまう。

話せば話すほど「ああ、好きだな」という想いが出てきて、距離を取るといふ決意が簡単に揺らいでしまう。

もう来ないで欲しいときっぱり言ってしまった方が良いのかもしれないが、美月ちゃんの悲しそうな表情を想像すると言えない。

美月ちゃんを傷つけないわけじゃないのに、冷たく突き放す方法しか思いつかない俺はやはり冷酷なのか。

「美月ちゃんごめん、今身体が怠くて休みたいんだ」

「あ、気づけなくてすみません……！ 今日ほこれで失礼しますね」

離れるためについた嘘に対して謝る美月ちゃんに、心に針が刺さったようにチクリと痛んだ。

“今日は”という事はまた来るのだろうか……。

そして二日後。

「陽翔さん、おはようございます！」

明るく笑う美月ちゃんはまた俺のもとを訪ねてきた。

そのたびに「帰ってほしい」「今日も体調がすぐれない」「一人にしてほしい」などの言葉をかけて離れるよう言っていた。

しかし根気よく何回も訪れる美月ちゃんに、遂に俺は溜まっていたものを吐き出してしまった。

「ねえ、なんでこんなに何回も来るの？ 俺が来ないで欲しいって思ってるの分かるだろ？ もう諦めるよ……」

言いたくなかったことを言ってしまった。

でもこれ以上俺なんかに時間を取らせたくないし、このままではいつまでもたっても美月ちゃんへの想いが消えてくれない。

きつと今の言葉で美月ちゃんを傷つけた。

これでもう諦めてくれるはず、そう思っていたのに……。

「私は陽翔さんと離れたことで、今まで何回も後悔をしてきました。なので、私にとって後悔しない道は陽翔さんと一緒にいることです」

俺を包み込むような柔らかな笑みを浮かべた美月ちゃんは、また来ますねと言いつつ病室を出て行った。

「はあ……」

ずるい、本当にずるい……。

どうしようもないほど愛おしい彼女の言葉が頭の中を何回もループし、隠しきれない気持ちに頭を抱え込んだ。

そんなこと言われたら拒否できなくなるじゃないか……。

「やけに頻繁に来てくれるな」

「実は友達もここに入院していて、入院生活は暇だからって言うからよく来てるの」

半分は真実でも半分は嘘。

心中でごめんねと謝りながらお父さんにそう話した。

「じゃあお父さん、また来るね」

「ああ、気を付けて帰れよ」

陽翔さんの病室に寄った後、何事もなかったかのようにお父さんのお見舞いに来る日々。陽翔さんにはすぐ帰るよう言われるのがわかっているから、その後お父さんとゆっくり話している。

しかしお父さんはあと一週間しないうちに退院するため、私が病院に来る理由は陽翔さんに会うためのみになる。

大学終わりのバイトがない日に病院に通っていて、普段ならほぼ真っ直ぐ家に帰るので、何も言わずに病院に通い続けると、どうして帰りが遅くなるのか怪しまれてしまう。

陽翔さんとのことでお兄ちゃんと初めて喧嘩をしたあの日からだいたいぶ経つが、完全には仲直りできておらず、どこか少しぎくしゃくしていた。

今の状況を知られたらなんと言われるのか……。

「ちゃんと話すべきだよね……」

そう考えながら冷たく乾いた風が吹く街を歩いて帰路に就いた。

「ただいま」

外にまで美味しそうな晩御飯の匂いがしてきて、空腹を促された私はお腹を鳴らせた。

部屋に荷物やアウターを置いて、洗面所で手洗いうがいをしてからリビングに行くのがいつもの流れ。

「美月、お帰りなさい」

お母さんが台所のカウンターから顔を覗かせて言った。

お兄ちゃんは今日仕事が長引いて遅くなるらしく、久しぶりにお母さんと二人きりのご

飯だ。

「ただいま、お母さん。 運ぶの手伝うよ」

ちょうど出来上がった料理を食卓に運び、茶わんやお箸も綺麗に並べた。

今日の晩御飯は大好きなハンバーグと、寒い時期にはぴったりの体が温まる豚汁。

いつもは隣に座るお母さんと今日は向かい合わせになって座り、「いただきます」と手を合わせながら言って食べ始めた。

「お父さんの様子どうだった？」

「いつも通り元気にしてたよ。 でもそろそろ病院生活に飽きてきたみたい」

お母さんが病院に行けなかった日は、こうしていつも報告するのが当たり前になっている。

退院の日にちが決まってから、お父さんもお母さんどこか嬉しそうだ。

「そう、じゃあ予定通りに退院できそうね。 ……ねえ美月、少し前から気になってたんだ

けど、美月と流星（ルビ・りゅうせい）何かあったの……？」

お父さんの退院について話したかと思うと、今度は聞きづらそうに私とお兄ちゃんのことについて聞いてきた。

あからさまに変な感じではないけれど、どこか少しだけ気まずさが残っていて、それに気づくお母さんは流石だと思う。

お母さんには一度も陽翔さんのことを話しておらず、全て話すのか、喧嘩したことだけを話すのか迷った。

もしお母さんにまで陽翔さんのことを否定されたらどうしよう……。

そんな考えが巡っている私を、お母さんは優しく見守ってくれていた。

今までずっとお母さんは私の見方をしてくれて、私のことを考えて的確なアドバイスをくれたり、悲しいことがあれば心の寄り添ってくれたり、私の考えを尊重したうえで道を示してくれる。

それを思い出した私は「あのね……」と陽翔さんのことやお兄ちゃんと喧嘩してしまったことを話し始めた。

お母さんは「うん、うん」と優しく相槌しながら最後まで話を聞いてくれて、話し終わった頃にはなぜか私を見て微笑んでいる。

「美月にもそんなに大切な人が出来て嬉しいな。なんとなく好きな子ができたんじゃないかって思ってたんだけど、本当にその人のことが大切なんだね」

お母さんの言葉に思わず泣きそうになり、目に少し涙を貯めながら「うん……」と答えた。

私の気持ち、そして何より陽翔さんのことを理解してくれたのがとても嬉しかった。

「流星は美月のことが可愛くてしょうがないし、大切だから過保護になってると思うんだけど、それはちよつとやりすぎよね。美月ももう二十歳になるんだから自分の生きたいように生きなさいね」

お母さんは困ったように笑いながら、お兄ちゃんの過保護ぶりについて語った。

小さいころから何事にも過保護で、また一緒に暮らすようになってから過保護さが増したのをお母さんは見ている。

よくお母さんは「どれだけ妹が可愛いんだか」と口にしていて、私は苦笑いすることしかできなかった。

「私、お兄ちゃんとちゃんと話すね」

私もお兄ちゃんのこととは好きだし、ずっとこんなモヤモヤを抱えたまま過ごしたくない。今日帰ってきたらちゃんと話そうと心に決めた。

「自分が大切だと思う人は大切にしない。一緒にいたいと思う人は一緒にいなさい。

それが美月の幸せに繋がるんだから」

よし！ と気合を入れてハンバーグを食べた時、お母さんがそつと言ったその言葉に、我慢していた涙がぼろぼろと溢れ出た。

胸に響いたお母さんの言葉のおかげで、ふわっと心が軽くなった気がする。

お兄ちゃんがどれだけ反対しても、陽翔さんがどれだけ私を拒絶しても、私は諦めない。「ただいま」

玄関からお兄ちゃんが帰ってきた声が聞こえ、お母さんと顔を見合わせてから二階のお兄ちゃんの部屋へ向かった。

なぜか忍び足でもあまり音を立てないように階段を登っていき、扉の前まで来て軽くノックをする。

「お兄ちゃん、話があるんだけど入ってもいい？」

「……ああ」

少しの間があった後に返事が返ってきたので、なんとなく陽翔さんについての話なんじゃないかと察していると思う。

扉を開けて部屋に入ると、お兄ちゃんはスーツから部屋着に着替えていて、何やら鞆の整理をしていた。

ベッドに座って話すタイミングを探す。

その間、お兄ちゃんの枕元にある私が昔プレゼントしたクマのぬいぐるみを抱きしめていた。

「あいつの話か？」

声のトーンは落ち着いているものの、言い方がどことなく不機嫌だ。

「うん……。実は陽翔さん、病気で今お父さんと同じ病院に入院しているの。最初は何も知らなかったんだけど、たまたま陽翔さんの秘書の人に病院で会って話を聞いて……」

お兄ちゃんは何も言わず黙ったまま。

何を思っているのかわからないが、そのまま話を続けた。

「陽翔さんは私のために婚約を破棄して、社長になることもやめたんだって。でも、病気のことを気にして私を遠ざけようとしている……。だけど私はどうしても陽翔さんと一緒にいたいし、辛い想いをしている陽翔さんを支えたい」

お兄ちゃんが陽翔さんのことをどう考えているのかはわからないけど、私が陽翔さんから与えられたものは幸せのほうが断然大きい。

陽翔さんは決して人を傷つけるような人じゃないし、むしろとても優しい人だ。

現に私がこれ以上傷つかないように遠ざけようとしている。

「お兄ちゃんが私のことを大切にしてくれたいって心配してくれるのはとてもありがたいなって思ってるよ。でも、お兄ちゃんが私のことを思うように、私も陽翔さんのことを大切に想ってるの。だから、私は陽翔さんと一緒にいたいっていう気持ちで諦めない」

これが私の気持ちだとしつかりお兄ちゃんを見ながら強く伝えた。

一向に私を見ようとしなないお兄ちゃんは、ずっと床ばかり見つめて何も言ってくれない。

この無言の時間に耐えられなくなってきた私は、ぬいぐるみを置いて出ていこうと立ち上がったその時だった。

「……好きにしる」

プイっと顔を背けたまま不機嫌そうに呟くお兄ちゃんに思わず笑ってしまい、怒られる前に急いで部屋から退散した。

少し唇を尖らせながら言うあの様子は、まるで小さな子供が拗ねている時にそっくりだ。何はともあれお兄ちゃんとの問題は解決できた。

あとは頑なに拒み続ける陽翔さんの気持ちをどうやって変えるか……。

* * *

「陽翔、何で美月ちゃんを拒むんだ？ 病気のことを気にするのは分かるが、安定すれば普通に生活できるし、美月ちゃんなら絶対陽翔の力になってくれるだろ」

「落ち着いたとしてもまたいつ色んな障害に襲われるか起こるか分からない。そのたびに美月ちゃんに心配をかけたり悲しませてしまうのは耐えられない」

つい想像してしまうんだ。

悲しそうな表情を浮かべる美月ちゃんを。

美月ちゃんにはずっと笑顔で幸せでいてほしいのが俺の願いで、俺はそれを叶えることが出来ない。

「結局自分の事しか考えてないじゃないか。美月ちゃんの気持ちをしっかり聞いたうえで考えるよ」

そう言って大樹は病室から出て行った。

自分の事しか考えてない……？

美月ちゃんに辛い思いをさせたくない、その一心で俺は美月ちゃんを拒み続けた。

俺は俺なりに美月ちゃんのことを考えているつもりなのに……。

膝に掛けられた布団を握りながら大樹に言われたことを考えていると、コンコンと扉がノックされた。

看護師さんかと思えば返事をする、入って来たのは美月ちゃんのお兄さんだった。

思わぬ来訪者に戸惑いを隠せず、開いた口が塞がらない。

「あの時よりも痩せたな。病気はどんな感じなんだ？」

普通のお見舞いに来た人の様に、彼はベッドの横にある椅子に座った。

初めてよく見る彼はとても整った顔をしていて、もし兄妹でなければ勝ち目を感じられなかっただろう。

「症状は今安定しています。仕事も出来る範囲でこなしているので、あと一週間程度で退院できるそうです」

お兄さんはアウトターのポケットに手を入れながら立ち上がって、窓際に移動して窓の外を眺め始めた。

何も言ってくれないとどう思っているのか分からず不安になる。

ましてや名前も年も性格も知らないので、なおさら怖い。

「お前にとって美月はどんな存在だ？」

唐突な質問に一瞬固まったが、美月ちゃんの事を考えると自然と言葉が出てきた。

「俺にとって美月ちゃんは……、心からそばに居てほしいと思う存在です。俺は孤児院で育ったので親や親戚はいないし、周りの人間にも信頼できる人は数少ないです。そんな中で美月ちゃんは唯一安らげる場所で、美月ちゃんの幸せが俺の幸せだと思えるくらい大切です」

話している間、ずっと美月ちゃんの明るく優しい笑顔を思い浮かべていた。

初めて美月ちゃんを見た日、初めてカフェで話した日、初めて一緒にご飯に行った日、初めて一緒に出掛けた日、初めて美月ちゃんを抱きしめた日。

全てが幸せな思い出で、思い出すだけで俺の心を温かくしてくれる。

「美月とお前が疎遠になってから、美月はお前を忘れようとしたのか見苦しいほど明るく振舞っていた。俺は美月の幸せを想ってお前と離れるように言ったが、あの時の美月は見るに堪えなかった。でも昨日、病院でお前と会ったと話を聞いた時は以前の明るさが戻って幸せそうに笑っていた」

俺の知らない美月ちゃんの話をお兄さんは聞かせてくれて、そんなことがあったのかと美月ちゃんの気持ちの変化を初めて知る。

「美月にとっての幸せは大切な人と一緒に居る事だ。お前がどう考えていようが美月のその考えは変わらない。相手の気持ちを考える前に自分の気持ちを正直に話したうえで、今後どうするか二人でちゃんと話し合って決めるんだ。お互いが幸せだと思えるほうに進めばいい」

そう言ったあと俺のことを真っ直ぐ見て、「自分が幸せにするのか、他人に幸せにされるのを黙ってみてるのか、どちらにせよ覚悟を決めるよ」と残して帰っていった。

幸せにする覚悟と離れて幸せを願う覚悟。

今の俺にはそのどちらもち合わせていなかった。

お兄さんの話を聞くと、俺のことをあまりよく思っていないようだったが、美月ちゃんを思いやる気持ちからくる的確な助言は、間違いなく俺の心に響いた。

美月ちゃんの気持ちを考える前に、自分の気持ちを正直に話し、美月ちゃんの気持ちも聞いて二人で答えを出す。

退院する一週間後までに答えを決め、退院したらすぐ美月ちゃんに会いに行こう。そこで決めるんだ、二人の未来について。

今日はお父さんが退院する日。

ちようど日曜日だったので、お兄ちゃんの運転でお母さんと私の三人で病院に向かう。

私にとっては陽翔さんもいる場所に家族で向かうということに、なんだか不思議な感覚を覚える。

ここ一週間で二回ほど陽翔さんの病室を訪れたがどの時も部屋におらず、遂に会わない作戦をとってきたかと頭を悩ませていた。

会えないのでは何もできない。

私の頭の中はずっと陽翔さんの事で埋まっていて、家族という今も陽翔さんのことを考えている。

病院にたどり着いた今、お母さんが受付をする後ろで無意識に周りをきよろきよろ見渡す。

「探してるだろ。 あいつも近いうち退院するらしいぜ」

「そうなんだ、よかったあ。 ……え、何でお兄ちゃんが知ってるの？」

聞けば先日陽翔さんに会いに来て、その時に話を聞いたそうだ。

また私の知らないうちに……。

でも陽翔さんが退院してしまったら、連絡先を消した私には今後陽翔さんと連絡を取る手段がなくなってしまう。

もし今日会えたら連絡先をまた聞いても大丈夫だろうか。

「お父さんの所に行きましょう」

受付を済ませたお母さんが戻ってきて、お父さんを迎えに病室に行く。

病室に行く荷物ほとんどまとめられていて、あとは帰るだけという状態だった。

「やっと家に帰れるなあ」

お父さんはずっと退屈そうにしていたので、家に帰る事が決まって本当に嬉しそうだ。

お母さんもお父さんが家になくてどこか寂しそうにしている、一度離れたのにこの仲の良さはとても懂れる。

「ありがとうございます」

お医者さんに挨拶をして病室を後にし、お父さんの荷物をお兄ちゃんと私で手分けして持ち、お母さんがお父さんを支えながら病院を出る。

結局陽翔さんに会えなかったなあ……。

そう思いながら車に向かっていている時だった。

「美月」

お兄ちゃんに呼ばれて顎で指された方を見ると、病院から陽翔さんと大樹さんが出てくるのが見えた。

初めてこの病院で会ったときよりも随分顔色がよくなったように感じる。

陽翔さんもお父さんと同じ日に退院だったんだ……。

「ほら、早く行って来いよ」

お兄ちゃんは私の手にある荷物を取り、そのまま車の方へ歩いていく。

お母さんは微笑んで、お父さんは「えっ……？」と困惑している様子に心が温まり、一人

私は車とは反対方向に歩き始めた。

徐々に近づく距離に緊張しながらも、怯えることなく真つ直ぐ進んでいく。

先に大樹さんが私に気づいて目配せをしながらそつとその場を離れ、ベンチに座りながらスマホの画面を見つめる陽翔さんにゆっくり近づく。

その時ポケットに入っていた私のスマホが震え、見てみるとそこには陽翔さんの名前が表示されていた。

連絡先を消した時、電話帳の存在を忘れてそつちを消していなかったのだ。

不安そうに地面を見て電話をかける陽翔さんを見つめながら、私はその電話を取った。

「もしもし」

「美月ちゃん、急に電話かけてごめんね。実は話したいことがあって、今から会えないかな」

「はい、いいですよ」

陽翔さんの目の前に立って電話越しにそう告げた。

「はい、いいですよ」

電話より近い距離に美月ちゃんの声が聞こえ、ぱつと顔を上げるとそこには優しく笑う美月ちゃんがあった。

思わぬ登場にドキツと心臓が跳ね、スマホを耳にしたまま頭に浮かんだ言葉を口にした。

「俺は美月ちゃんのが好きで、心から大事にしたいって思ってる。俺が美月ちゃんを笑顔に、幸せにしたい」

「私も陽翔さんのことが好きです。陽翔さんと一緒にいる時間が私の幸せです。離れたく、ないですっ……」

涙を流しながら話す美月ちゃんの手を取り、なだめるように優しく撫でる。

「俺の病気はこれからどうなるかわからないし、美月ちゃんを悲しませてしまったり、大変な思いをさせてしまうことが少なからずあると思う。俺はそれが嫌で美月ちゃんから離れようと思ったんだ」

「私は陽翔さんが辛そうにしているからこそ、支えたいし力になりたいって思っています。病気の辛さを吹き飛ばすほど私も幸せにしたいんです。好きで一緒にいたい気持ちは、病気なんかで消えるものではありませんっ……。お願いです、一緒にいさせてください……！！」

美月ちゃんがしゃべり終わると同時に、俺は立ち上がって美月ちゃんを強く抱きしめた。

こんなにも俺を想ってくれて、涙を流しながら必死に気持ちを伝えてくれて、どんな俺も受け入れてくれて、病気の俺を支えたいと言ってくれて……。

もう離れる理由などどこにもなかった。

「ありがとう、俺を諦めないでくれて」

美月ちゃんが会いに来てくれなかったら、一緒になる未来はきつとなかった。

俺は美月ちゃんに救われてばかりだ。

「好きです、陽翔さん」

「うん、俺も好きだよ」

腕の中で泣きながら笑う美月ちゃんの頭を撫でて、その愛おしさに顔を埋めた。

人生で一番とっていいほど幸せな時間。

ここで誓ったことを一生忘れない、そう心に焼き付けて美月ちゃんを幸せにする覚悟を決めた。

「良かったな、上手くいって」

「お兄ちゃん……」

美月ちゃんのお兄さんが来たので、自然と抱きしめていた腕を解いてお兄さんと向き合った。

「お兄さん、あの時声をかけてくれてありがとうございます」

「はあ？ お前にお兄さん呼ばわりされたくねえよ」

その言葉に美月ちゃんも俺も笑い、その後お兄さんの機嫌を取るのに苦労した。

美月ちゃんの周りにいる美月ちゃんを思いやる気持ちと、美月ちゃんが俺に伝えてくれる言葉と気持ち、俺の気持ちを突き動かして幸せに導いてくれた。

眩しすぎて見えなかった太陽の光は今では心地よく感じて、俺の心を明るく照らす。

日陰に隠れる俺を日の下に連れ出してくれた彼女は、太陽よりも輝く笑顔で俺に笑いかけ、ぎゅっと俺の手を掴んで離さない。

彼女の後ろについていくとそこにはたくさんの“幸せ”が待っていた。

翌年四月。

私は大学二年生に上がり、以前のように勉強とバイトの毎日を送っている。

陽翔（ルビ・はると）さんは二月頃に会社を辞めて、自分の体調と相談しながらあのカフェと一緒にアルバイトとして働いていた。

実紀（ルビ・みき）さんは陽翔さんが面接に来た時とても驚いており、これまでの経緯を全て話すと、泣きながら「おめでどう」と言ってくれ、**篤志（ルビ・あつし）**さんも快く陽翔さんを受け入れてくれた。

退院してから陽翔さんの病状は安定していて、問題なく日常生活を送ることができている。

陽翔さんの会社は弟の**凧**(ルビ・なき)さんが数年後社長になるらしく、**大樹**(ルビ・ひろき)さんはその凧さんに就いて仕事をしているそうだ。

いろんなことがまた始まる春というこの時期。

たくさん話し合っ、私と陽翔さんは同棲を始めた。

最初はまだ早いんじゃないかと反対の声もあったが(主にお兄ちゃん)、真剣な私と陽翔さんの話を聞いて、一度離れたことのあるお父さんとお母さんは同棲することを許してくれた。

一緒にいたい時に一緒にいなくてどうするの、と。

支えてくれて、守ってくれて、背中を押してくれて、改めて周りの人への感謝を感じた。

陽翔さんはもともと住んでいたマンションを離れ、一緒に住みやすい部屋を探して最近そこに二人で住み始めた。

初心に帰りながら春を感じるのが好きな私は、陽翔さんが出かけている間に近所を散歩する。

「あ、桜……」

アパートの近くにある桜並木には綺麗な桜が花を咲かせ、暖かな春風に吹かれてはその花びらをつつまた一つと落としている。

目の前をひらひらと舞う花びらを手のひらで受け止め、儂く綺麗なその花びらを見つめた。

「**美月**(ルビ・みづき)」

名前を呼ばれて振り向くと、陽翔さんが桜舞う中で優しく微笑んでいた。

陽翔さんのもとに駆け寄り、その腕の中に入り込む。

陽だまりのような匂いと暖かさに包まれて、その心地よさに陽翔さんの胸元で頬擦りをした。

「帰ろうか」

「はい」

手を繋いで桜舞う中、笑いあいながら二人で家まで帰る。

雨の日に出会い、暖かな優しさに包まれ、お互い惹かれて恋に落ちた月と太陽。どうかこの幸せがずっと続きますように――。